岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（17）

下道山遺跡緊急発掘調査概報

1 9 7 7 年 2 月

岡 山 県 教 育 委 員 会

文　化　課

序

岡山県の美作地方においては，中国縦貫自動車道(大阪府吹田＝美作落合間)開通に伴いその影響を受けて各種開発事業が続出し，埋蔵文化財の発掘調査件数も年々増加する傾向にあります。

津山市街地の西北部に位置する神楽尾丘陵内に，弥生時代墳墓跡として周知されている「下道山遺跡」について，土地所有者が果樹園造成工事を計画され，種々協議した結果，昭和50年度工事予定のところの一部を除き，その着工を延期していただき，昭和51年度国庫補助事業として，埋蔵文化財緊急発掘調査を実施しました。

今回の調査は，直接造成の対象となった下道山遺跡の東半部と下道山南古墳に限定して実施いたしましたが，その結果，多くの新知見をえることができました。文化財に対する認識と御理解を深めるため，この報文が多少なりとも役だつとすれば，このうえないと存じます。

調査にあたって，土地所有者の方をはじめ文化庁・津山市・津山市教育委員会・学識経験者各位・並びに多くの方々の協力を得ることができたことに対し深く感謝の意を表します。

昭和52年2月

岡山県教育委員会

教育長　小 野 啓 三

下道山遺跡

例言

1. 本書は個人の果樹園造成計画にともない昭和51年度国庫補助事業（総額6265円，補助率50％）として岡山県教育委員会が「下道山遺跡緊急発掘調査委員会」へ委託して実施した発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は下道山遺跡緊急発掘調査団が担当し昭和51年7月19日から昭和52年1月までの約6ケ月間行なった。
3. 本調査にあたっては阿部義平・稲田孝司（文化庁）両氏の現地指導をうけ有益な御助言をいただいた。下道山南古墳出土人骨の精査・鑑定については，池田次郎氏（京都大学理学部自然人類学研究室）のお手を煩せた。地権者竹内譲氏には多大の御協力をいただき保存についても格別の配慮を賜わった。発掘作業は地元の方々の暖かい御援助をいただき無事完了することができた。また津山市教育委員会をはじめ岡山県教育委員会津山教育事務所の方々には本務にいそがしい中を連絡・調整等諸事お世話になった。
4. 遺構の調査，実測，写真撮影は主として下道山遺跡を栗野克己，下道山南古墳を岡本寛久が担当したが，須恵尚志・河本清・湊哲夫・安川豊史（津山市）伊藤晃・竹田勝・浅倉秀昭・秀島貞康（岡山県教委文化課）滝本正志（奈良大学生）各氏の協力を得た。また下道山遺跡発掘区の杭打ちおよび地形測量は業者に委託した。
5. 報告書作成にあたっては，第1・2・3章を栗野。第4章を岡本が担当執筆し，第5章として池田次郎氏より玉稿を賜わった。遺物の整理・実測・製図等においては滝本正志君の援助を受けた。
6. 調査時水糸のレベルは，中国縦貫自動車道のB・Mより，津山市交通公園予定地内に設置した，B・Mを利用させていただいた海抜高である。

目　　次

序
例　言
付　調査委員会会則．調査委員会・調査団名簿
第1章　調査の経過 …… 1
第2章　歴史・地理的環境 …… 5
第3章　下道山遺跡調査概要 …… 7
第1節　住 居 址 …… 7
第2節　土 壙 墓 群 …… 20
第3節　土 器 棺 …… 24
第4節　方形台状墓 …… 27
第5節　溝 状 遺 構 …… 43
第6節　段 状 遺 構 …… 43
第7節　古　墳 …… 44
第8節　火 葬 墓 …… 50
第9節　その他の土壙・出土遺物 …… 56
第10節　小　結 …… 57
第4章　下道山南古墳 …… 58
第1節　立地・外形 …… 58
第2節　調 査 方 法 …… 59
第3節　外 部 施 設 …… 59
第4節　埋 葬 施 設 …… 64
第5節　遺　物 …… 73
第6節　土　壙 …… 77
第7節　小　結 …… 78
第5章　下道山南古墳出土人骨について …… 81
あとがき …… 86

下道山遺跡緊急発掘調査委員会会則

（設　　置）

第1条　下道山遺跡緊急発掘調査を実施するため，下道山遺跡緊急発掘調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（目　　的）

第2条　委員会は，岡山県津山市総社に所在する，下道山遺跡および下道山南古墳の緊急発掘調査を実施することを目的とする。

（事　　業）

第3条　委員会は，前条の目的を達成するため，次の事業を行なう。

(1)　下道山遺跡等の文化財の調査研究および保存方法に関すること。

(2)　その他，目的を達成するために必要な事業。

（組　　織）

第4条　委員会の委員は，次の各号に掲げる者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

(1)　学識経験者

(2)　津山市文化財保護委員

(3)　関係行政機関職員

(4)　調査予定区域関係者

（委 員 長）

第5条　委員会に，次のとおり委員長および副委員長を置く。

(1)　委員長　　1名

(2)　副委員長　　2名

2.　委員長は，岡山県教育委員会教育次長をもってあてる。副委員長は委員のうちから委員長が委嘱する。

3.　委員長は，委員会を代表し会務を掌理する。

4.　副委員長は委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，あらかじめ委員長が指名する副委員長がその職務を代理する。

（諮問委員）

第6条　委員会に専門的事項を審議するため，諮問委員を若干名置く。

2.　諮問委員は，岡山県文化財保護審議委員及び学識経験者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

（任　　期）

第7条　委員の任期は，調査が完了するまでとする。ただし，それぞれの機関等の代表たる委員は，その役職に存する期間に限るものとする。

（会　　議）

第８条　委員会は，委員長が招集する。

２　委員会は，次の事項について審議する。

(1)　会則の制定および改廃に関すること。

(2)　調査及び保存等の基本方針に関すること。

(3)　その他，重要な事項

（事 務 局）

第９条　委員会の事務を処理するため，岡山県教育庁文化課に事務局を置く。

２　事務局員は，委員長が委嘱する。

（監　　査）

第10条　委員会に会計監査を実施するために監事を置き，その監事は，委員長が委嘱する。

（調 査 団）

第11条　委員会に，発掘調査とその他の事業を専門的に実施するため，調査団を置き，その調査員は岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

２　調査団に，団長を置く。

（補　　足）

第11条　この会則に定めるもののほか，委員会の運営に関して必要な事項は委員会が定める。

附　　則

この会則は昭和51年７月８日から実施する。

下道山遺跡緊急発掘調査委員会

役名	氏名	所属	住所
委員長	佐藤章一	県教育委員会教育次長	岡山市内山下
副委員長	木村岩治	津山市教育委員会教育長	津山市山下
	小林孝男	県教育委員会文化課長	岡山市内山下
諮問委員	鎌木義昌	岡山県文化財保護審議委員	岡山市兵団5－6
	近藤義郎	〃	岡山市津島中1丁目2—RE202
	水内昌康	〃	〃 三野2－6－4
委員	西口秀俊	県教育庁文化課参事	〃 内山下
	水田稔	〃 主幹	〃 〃
	光吉勝彦	〃 係長	〃 〃
	光岡釧郎	津山市教育委員会社会教育課長	津山市山下
	須江尚志	〃 文化係長	〃 〃
	江原滋	津山市文化財保護委員長	〃 田町98
事務局長	小林孝男	県教育庁文化課長	岡山市内山下
〃 次長	西口秀俊	〃 文化課参事	〃 〃
	水田稔	〃 主幹	〃 〃
	光吉勝彦	〃 係長	〃 〃
監事	生田寿一	県教育庁総務課参事	〃 〃
	谷名通良	津山市教育委員会課長補佐	津山市山下

調査団

調査団長	小林孝男	県教育庁文化課長	岡山市内山下
調査員	葛原克人	県教育庁文化課文化財保護主査	〃 〃
	伊藤晃	〃 文化財保護主事	〃 〃
	栗野克己	〃 〃	〃 〃
	山磨康平	〃 〃	〃 〃
	河本清	津山市教育委員会文化財保護主査	津山市山下
	湊哲夫	〃 主事	〃 〃

第1章　調査の経過

昭和50年に，土地所有者が果樹園造成工事を計画しているという話があり，津山市教育委員会をはじめ，関係者が協議を進めた。その結果，昭和50年度は，下道山南古墳の所在する丘陵の造成工事を実施する。その折に，古墳は墳丘の範囲を確認しぎりぎりまで造成をして，本格的調査は来年度とする。周囲の遺構の有無については，工事中に発見したらただちに調査する。下道山遺跡については，昭和50年度着工は見合せるので昭和51年度に発掘調査をする。昭和50年11月26日～12月11日まで第1次調査を実施した。この際，造成工事の都合上，やむをえず墳丘の西南部が一部削られることになったため部分的な，墳丘と葺石の調査実施後，削られた。第1次調査は岡山県教育委員会の埋蔵文化財緊急調査費をもって実施した。

昭和51年度は，岡山県教育委員会が国庫補助事業として埋蔵文化財緊急発掘調査を実施した。昭和51年6月から準備を始め，昭和52年2月に終了。現地での調査は昭和51年7月19日鍬入式を行い，昭和52年1月中旬まで約6ケ月間にわたり調査を実施，関係者の理解を得て保存できる見通しがたったため埋めもどし作業をして終了した。引き続き報告書作成作業を実施，報告書を刊行する。

日　誌　抄

昭和50年

11/26～12/11　＜下道山南古墳＞地形測量，トレンチ調査，墳丘西南部の平面調査・実測・写真撮影（第1次調査担当栗野）調査終了後墳丘周囲ギリギリまで削除，墳丘は高さ2m～5mの柱状に残る。

昭和51年

7／19　調査委員会，神事・現地で地権者立会のうえ調査範囲再確認，器材調達。

7／20～28　伐採，草刈り，地形測量とグリッド杭打ち（業者委託）・トレンチ設定，器材小屋建設。

7／29～8／6　下道山遺跡トレンチ調査。

8／7～8／20　＜下道山南古墳＞表土はぎ・葺石露出，内部主体既掘穴の発掘写真撮影。

8／21～9／30　＜下道山遺跡＞　東半部約1,300㎡の表土はぎ，遺構検出進行。土壙墓群1グループ検出（土壙墓104以上，壷棺5）・住居址3検出，1号住居址実測。

10／1～10/30　＜下道山遺跡＞　西半部約1,000㎡表土はぎ，遺構検出進行，奈良時代骨壷2個，円墳1基（横穴式石室）方形台状墓2基を検出する。円墳写真撮影，地形測量，石室実測・骨壷出土状況及び2号住居址写真撮影・実測。

11／1～11/13　＜下道山遺跡＞骨壷取り上げ補足実測，土層断面実測。東方急斜面部分2mおきに9本のトレンチを設定，発掘し，2号・3号墳を検出。

＜下道山南古墳＞測量ポイント割付，葺石実測開始，第1主体盗掘状況実測，主体部掘り方検出作業，今月から岡本参加

11/15～12/4　＜下道山遺跡＞2号墳の部分を拡張し全面発掘，写真撮影し実測完了。

3号墳の部分拡張し発掘，周溝断面実測と石室内遺物出土状況実測取り上げ。土壙墓群写真撮影。

<下道山南古墳>主体部検出作業。第2主体蓋石被覆粘土検出，写真撮影。墓壙内土層観察実測。葺石実測

12／6～12／27　<下道山遺跡>土器棺取上げ。文化庁稲田孝司氏来訪。3号住居址実測。土壙墓群平面図作成。奈良大学生滝本君参加，土壙墓断面実測。方形台状墓の墳丘断面図作成，土手はずし，土壙墓精査。

<下道山南古墳>第2主体被覆粘土実測し除去，同蓋石実測，第2主体開棺，人骨出土状態実測取上げ，第2主体石棺実測，第1主体蓋石被覆粘土残存状況実測。葺石実測。第1主体，第2主体土壙掘下げ。

1／5～1／14　<下道山遺跡>土壙墓群平板実測完了，遺物取上げ断面図作成と補足。

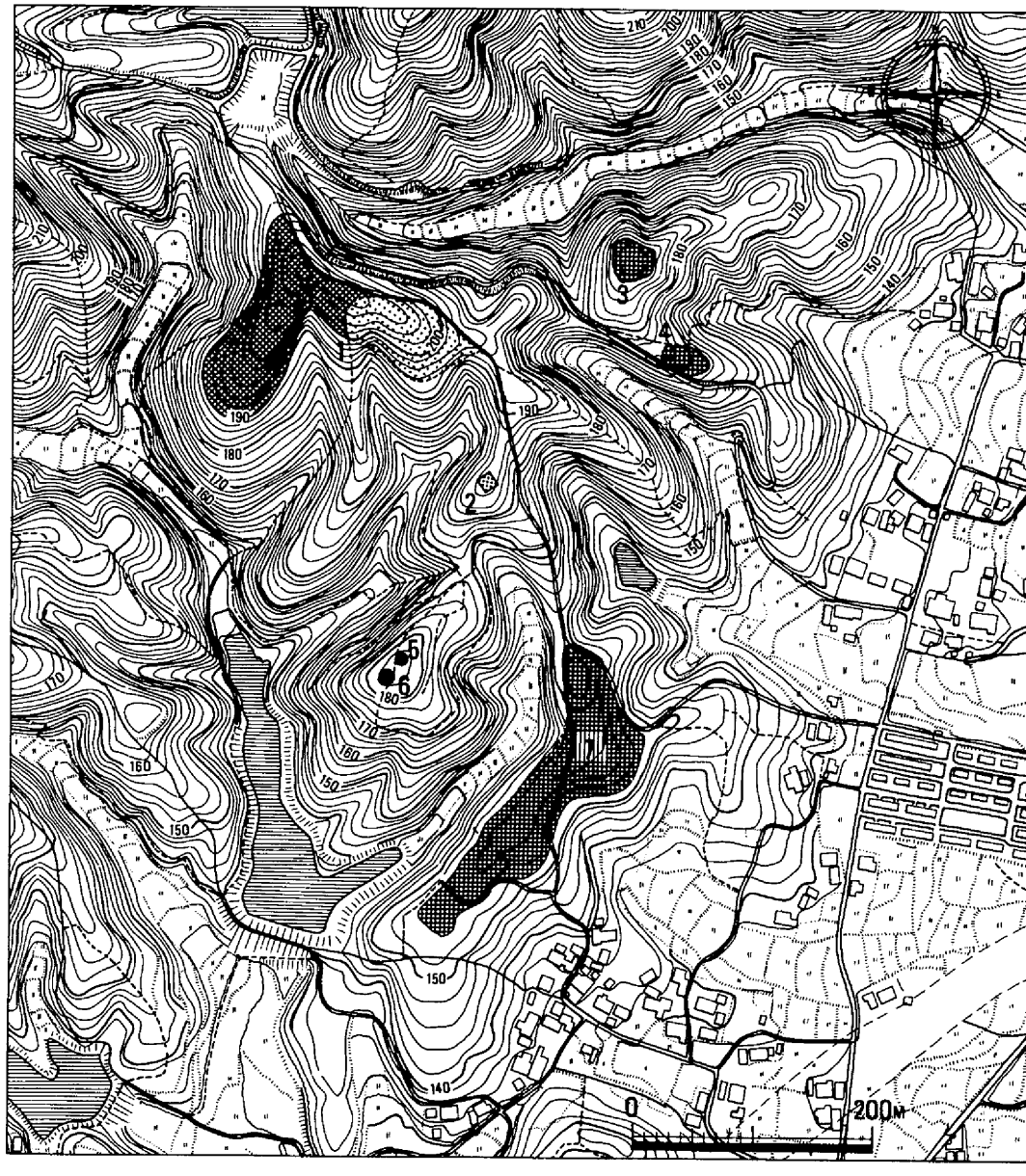
3号墳石室実測。方形台状墓の土壙墓断面実測。埋め戻し作業。

<下道山南古墳>第1主体，第2主体土壙実測。写真撮影。葺石実測。

1／7～1／31　<下道山遺跡>方形台状墓写真撮影，地形測量，土壙墓平面図作成。埋め戻し作業完了。撤収作業。

<下道山南古墳>墳丘トレンチにより盛土観察，土層断面実測図作成，葺石実測。埋め戻し。

第1図　周辺地形図　S＝1／20,000



第2図　下道山遺跡周辺地形図（1／6000）

1　下道山遺跡　2　下道山南古墳　3　権現山遺跡　4　大平遺跡

5　丸山1号墳　6　丸山2号墳　7　総社内山遺跡（津山市交通公園予定地）

第２章　歴史・地理的環境（第１・２図）

岡山県は中国地方のほぼ中央やや東寄りに位置する。東西方向にはしる中国山脈は日本海側と，瀬戸内海側の気候条件の違いを生み出す。岡山県の北端はこの中国山脈を境として鳥取県に接しており，同時に分水嶺となっている。岡山県には，中国山脈に源を発する三大河川があり，鉄道の発達する以前の主要交通体系として，高瀬舟[注1]を利用した河川交通経済の発展があった。西から高梁川・旭川・吉井川という名称でそれぞれ上流にも下流にも物資の集散によって発達した町[注2]が形成されていた。津山市も吉井川の上流で最も発展した港町である。津山市を中心とする津山盆地は東西約30㎞，南北約15㎞で，海抜100 m～250 m，比高20m～50mのごく低い丘陵が幾筋も南北に並んで走っている。その丘陵と丘陵の間には樹枝状に水田地帯が入り組んでいる。津山盆地は岡山県東北部にあり，鳥取まで70㎞，岡山市まで60㎞と日本海と瀬戸内海の中間に位置している。また前述のように古代から近世まで「美作国」として，行政的にも一定のテリトリーが形成されていた。

原始，古代の遺跡がこの津山盆地に多く見出されることはいうまでもない。[注3]

下道山遺跡は，津山市街地の北西部に位置する，神楽尾（かぐらお）丘陵に所在する。神楽尾丘陵は全体には南北に長い。南は津山市街地を含む吉井川によって，西は田邑（たのむら）盆地，東は宮川を中心とする水田地帯。北は丘陵の尾根としては，桝形山（ますがたやま）標高645 mに続くが，美作一宮「中山神社」から香々美（鏡野町）へ通じる道によって区画されている。神楽尾城跡の所在する標高308mの三角点から約600 m離れた，東向きに派生する丘陵の尾根上に「下道山遺跡」が位置する。下道山遺跡では尾根は西北西－東南東の方向へ長くコブ状の高みとなっている。略東西180 m，南北40～50 mの平坦面である。北側は深い谷となっており南から東へかけて枝尾根が数本派生している。この枝尾根上にも点々と遺跡が点在する。権現山遺跡・大平遺跡は[注4]昭和27年頃の調査時に数点の文様のある土器片がみられ，下道山と同じく弥生時代の墳墓と指摘されており，最近の土取工事に伴う調査で土壙墓群が検出されている。

津山市が交通公園予定地にしている丘陵には，トレンチ調査により，２段式の貯蔵穴をはじめ，弥生時代後期の住居址等が発見されており，保存問題を含め注目を受けている。また下道山南古墳の南の丘陵上に２基の古墳が所在する。

下道山遺跡の東西に長い丘陵上の西方は，かつて調査された。今回の調査対象地は，遺跡範囲の東半部の調査だけであるが，昭和27年調査時の甕棺出土地点は，今回の方形台状墓２号の位置に相当するものと推考される。（注４の文献と対比）

注１　岡山県通史をはじめとする，県史・市町村史

注２　それぞれの河川において物資集散基地の主要なものは，現在の地名で①新見市・高梁市－倉敷市，②落合町－岡山市，③津山市－西大寺である。

注３　・岡山県遺跡地名表1965年度，昭和41年３月，岡山県教育委員会
・全国遺跡地図（岡山県），昭和42年３月，文化財保護委員会
・岡山県遺跡地図第１分冊～第４分冊，昭和48年３月～昭和51年３月，岡山県教育委員会

・津山市遺跡地図・対照表，昭和 49年 5 月，津山市教育委員会
・津山市第 1 巻「原始古代」，昭和 47年 3 月，津山市
・「古代の美作」，昭和 47年 3 月，岡山県教育委員会文化課
・その他各遺跡の発掘調査報告等を参照されたい

注 4. 御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」
『古代学研究 21・22 合併号』昭和 34年 11月

第３章　下道山遺跡調査概要

下道山遺跡の東半部が調査対象地であった。平坦部が少なく，斜面が多いため，10ｍグリッドを設定することにした。西方に最高点があり遺構が連続していることが予想されたので，西方の丘陵の主軸方位に合せてグリッドの方位を決め（Ｂ・Ｃの中間のライン）11の西側の杭を基点にして，No.11～No.6まで直線に，そこから南へ１つ行き，ＣＤの中間ライン上で，No.6～No.1までの杭を設定した。

発掘調査はこのグリッドすべてを発掘したわけではなく，まずトレンチ調査によって，遺構の範囲確認を実施し，必要な部分を全面発掘調査した。（第３図）

第１節　住居址（第３～７図）

下道山遺跡では５軒の住居跡が確認されている。

１号住居址　Ｆ５区にある南向きの緩斜面に位置する。やや楕円形プランで浅い中央ピットと２本の柱穴をもっている。斜面により削平され，床面は約$\frac{1}{3}$検出されただけである。復元径は4.7×3.9ｍで２本の柱穴の方向にやや長い，主軸は等高線と平行している。山側に高さ30cmの壁が検出され一部岩盤を壁と床面に利用しており，壁溝は検出されなかった。中央ピットは隅丸方形のプランを有し（44×44－22cm）底面は２段である。作りなおしとみられる。

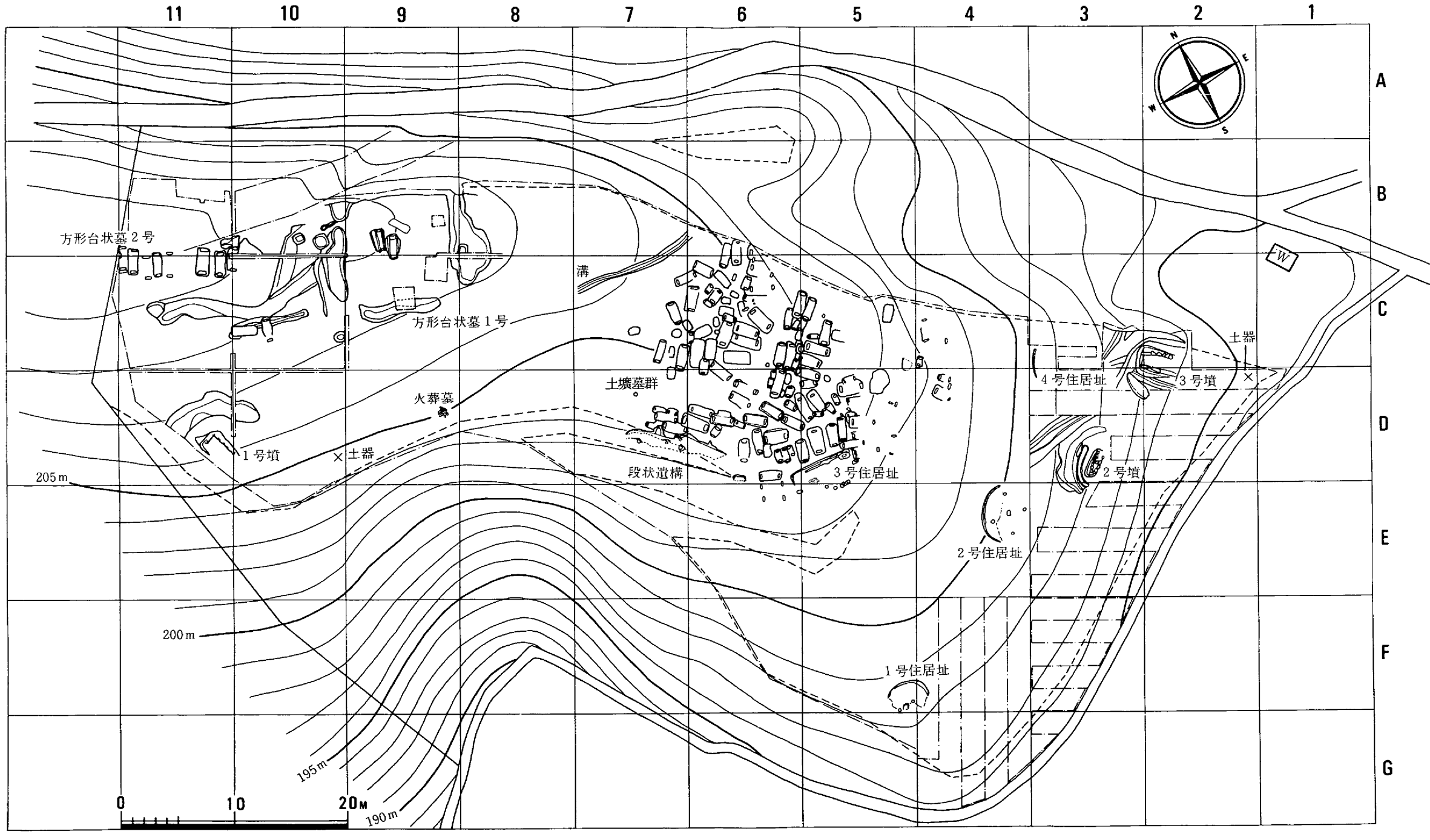
２号住居址　Ｅ４区にあり南東向きの緩斜面に位置する。山側に高さ40cmの壁と壁溝の一部および床面が$\frac{1}{4}$程度検出された。谷側は大きく削平され中央ピットと柱穴が検出されただけである。復元形態は主軸が等高線に平行したやや楕円形プランで5.2×4.7ｍとなる。柱穴は４本みられ柱痕と掘方の区別がつくものもある。中央ピットは削平されて本来の形は不明確であるが49×27－29cmで２つの底部があり使用時における掘りかえしと思われる。中央ピット内および中央ピットから西側の床面には多数のサヌカイト・フレークとチップがみられ，石鏃も発掘された。そのうちの２号墳近くまで広がっていた（第45図－５）の石鏃は未完成品であって，住居跡内で石鏃生産が行なわれていたことが想定される。壁溝からは石皿と土器片数片が出土しただけである。胴部片と口縁部片（第45図－１）の内面に刷毛目が見られることから弥生時代中期後半と推察される。

３号住居址　Ｄ・Ｅ５区付近で南向きの緩斜面に位置した土壙墓群の南に接して検出された方形住居跡である。南半部は大きく削平されており全容を知ることはできないが，他の住居址と同じく主軸が等高線に平行する傾向をもっている。東西方向は5.8ｍを計測する。本住居址に伴なう柱穴は西北および東北隅に直径10～20cm，深さ約７cmほどの小柱穴があり，そこから南1.2～1.4ｍの所にやや大きな柱穴をもつ特殊な構造である。住居跡中央部に柱穴・凹み等があるがこの住居跡の柱穴としてどのような機態があるのか定かではない。床面で一ケ所赤色に焼けた炉跡がある（Ｉ－Ｊ断面）。北側および東側には壁溝がわずかに認められる。また東北には東西98cm，南北52cm，深さ36cmの長方形ピットがあり甕形土器の破片（第45図７）が出土した。他に石庖丁と土器片（第45図８・11）が南端に２～３連続した柱穴内より出土した。他の土器（９・10）は上層埋積土中から出土したものであり本住居址の時期は前述した土器により弥生時代中期後半期と考えられる。

4号住居址 （第51図）C・D3区の東向き斜面で検出された溝が円形住居跡の痕跡とも考えられるので4号住居跡としたが，中央ピット，柱穴等は削平のためか検出されなかった。溝は巾10～18㎝深さ約5㎝程度のもので弧状をなし，東側に一部床面の残存部と考えられる平坦面がある。

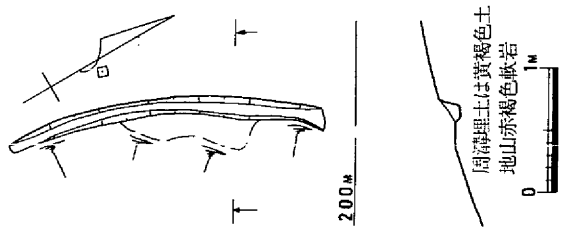
5号住居址 B10区東端部において，方形台状墓第1号西溝が途切れている部分に接して，中央ピットと考えられる直径40㎝の円形ピットから東向きに床溝と考えられる長さ110㎝，巾26㎝，深さ約10㎝の溝がある。埋土中には炭の小粒がやや多く見られた。柱穴については周辺を削り出してみたが検出されず，土器片も出土しなかった。

出土遺物 （第45図1～11）1号住居址からは甕形土器胴部破片が出土した。内外面ともに刷毛目調整されており，弥生時代中期後半のものと推考される。2号住居址からは（1～4）甕の口縁部がかろうじて一片と胴部片が出土したほか砥石やサヌカイト製石鏃・サヌカイト・フレーク・チップが出土した。1は口唇部が上方へわずかに拡張する。色調は灰茶褐色で復元径は約20㎝である。2は淡緑青色の砥石破片で両平面が磨滅し滑らかでやや凹んでいる。石皿だった可能性もある。3は住居址内で，5は住居址の東方2号墳の近くでチップとともに採集されたものであるが，本住居址の東半部削平のため流出したものと考えられるので，同時に取上げる。3は石鏃の先端部で片面に大剥離面を残し周囲を調整剥離している。5も石鏃である。表裏とも調整剥離し，大剥離面はほとんど残さないぐらい調整している。断面はやや菱型になる。3，5とも縁辺は鋭い刃部を保ち，磨滅はみられずまさに作りたての石鏃という感じである。サヌカイト・フレーク，チップも多量に出土していることから石鏃生産がここで行なわれていた可能性がある。3号住居址長方形ピット出土（第45図7）の甕形土器片は，口縁端部は凹線文をもち肥厚して上方に拡張している。内外面とも細かい刷毛目調整が施こされている。8は口縁部がわずかに拡張，端部に凹線文をもち内面に刷毛目調整がみられる。9は高坏脚部破片で櫛描直線文が二段みられる。10は小形の壷の底部で外面に刷毛目調整がみられ丹塗り土器である。底部はあげ底となっている。11は砂岩片岩製磨製石庖丁である。長さ11.4㎝，巾3.8㎝，厚さ0.9㎝，2孔が両面から穿たれ，刃部はほぼ直線である。



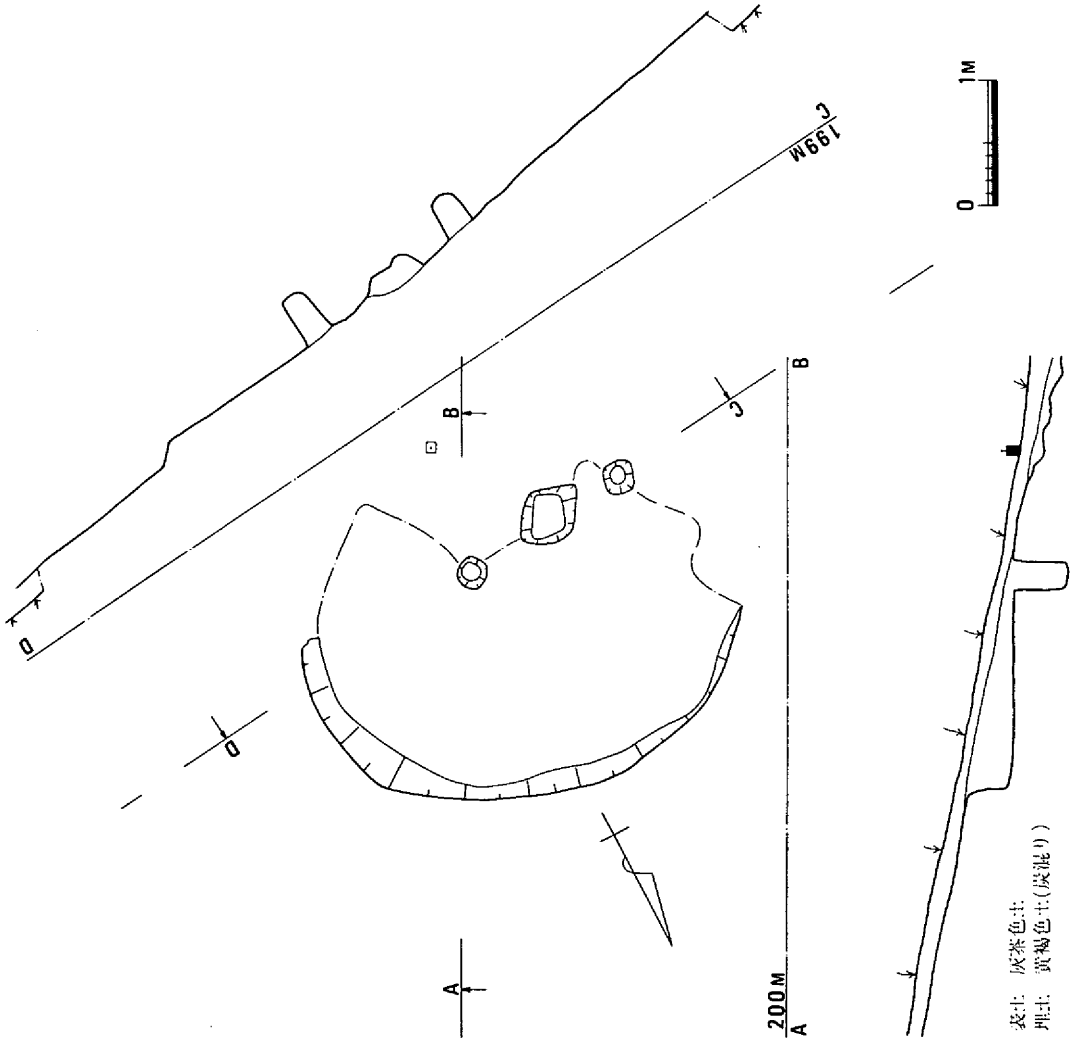
第３図　下道山遺跡地形図および遺構配置図（S $=\frac{1}{400}$）　海抜高，１mコンター

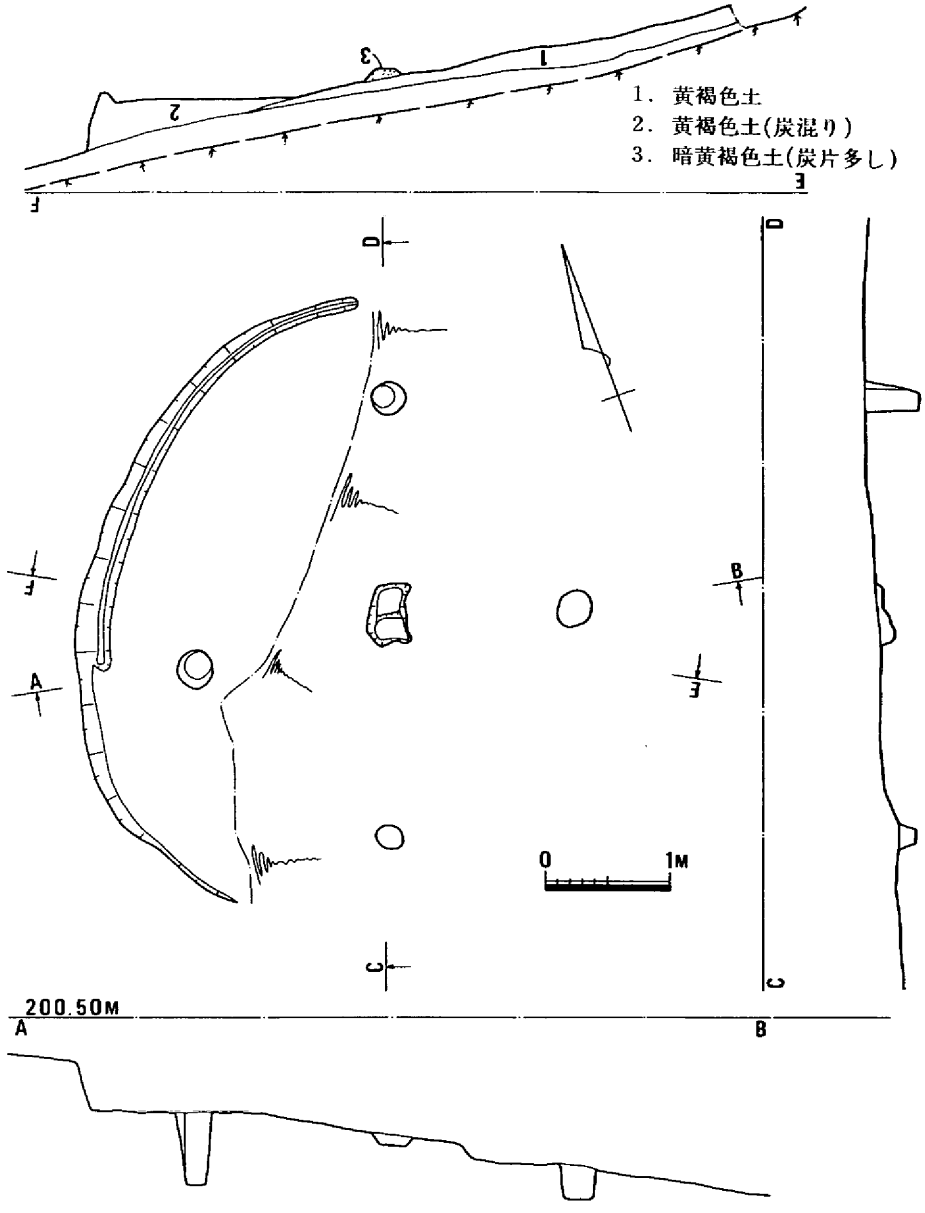
（一点鎖線が発掘範囲を示す）



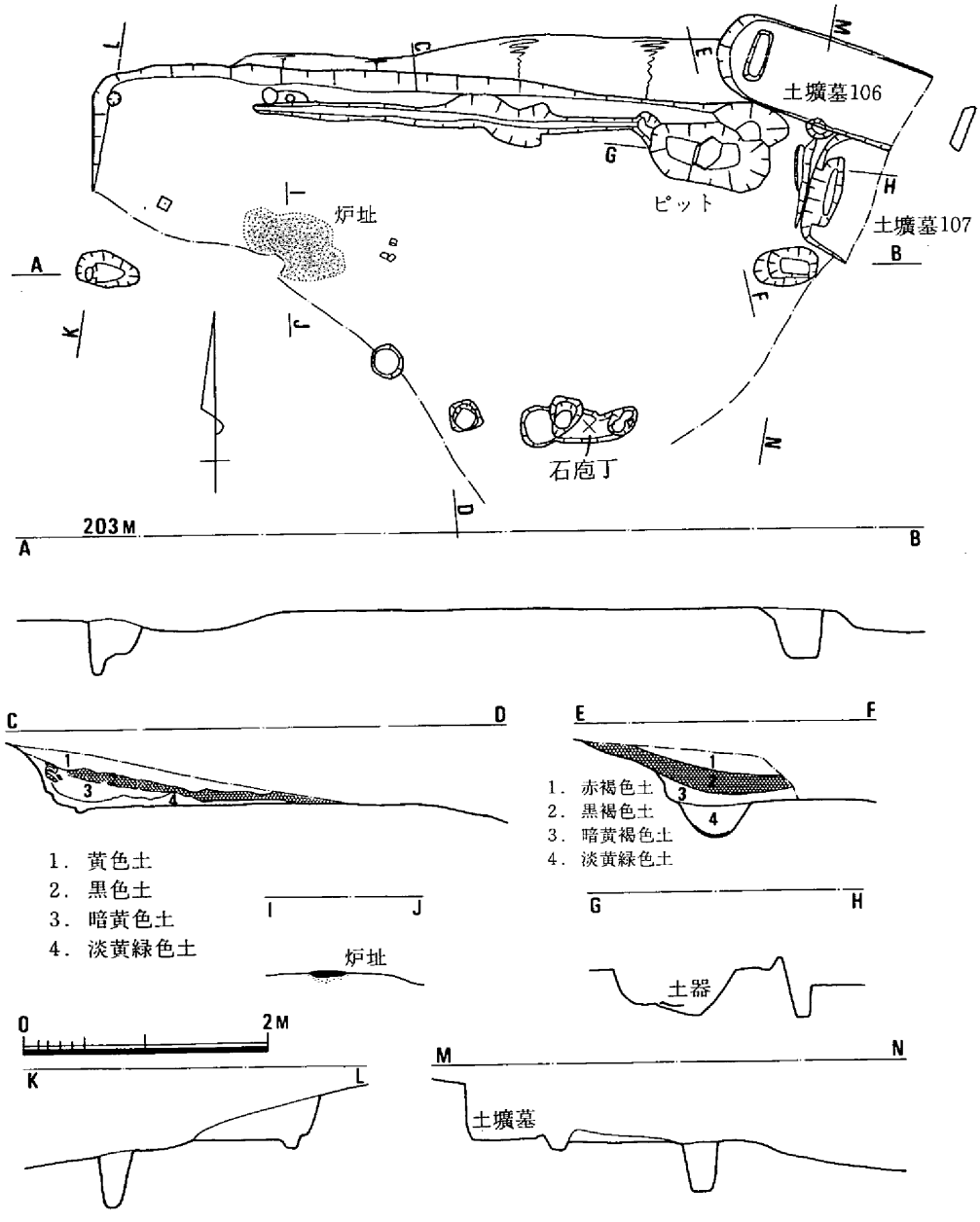
第5図　4号住居址実測図（1－60）

第4図　1号住居址実測図（1－60）

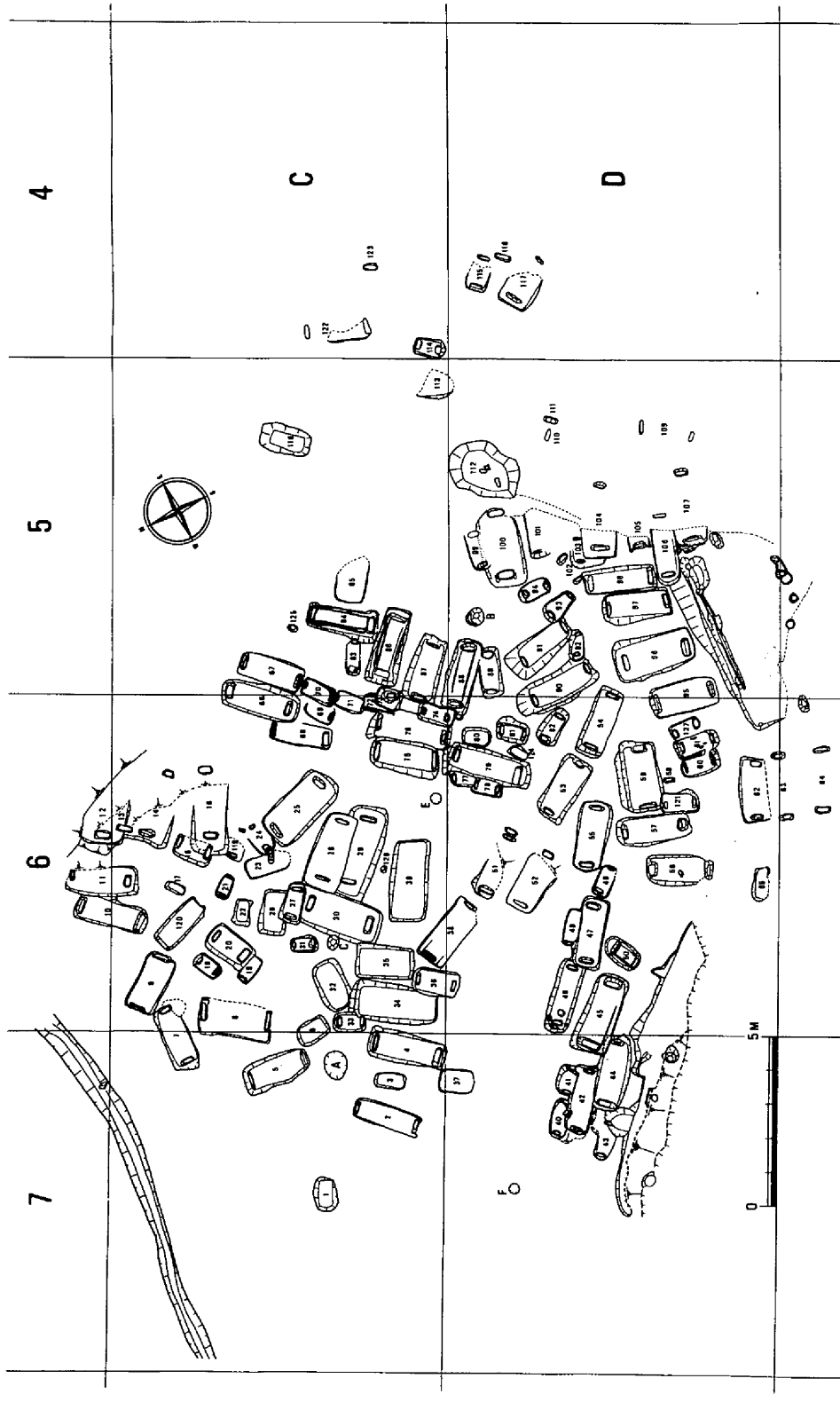




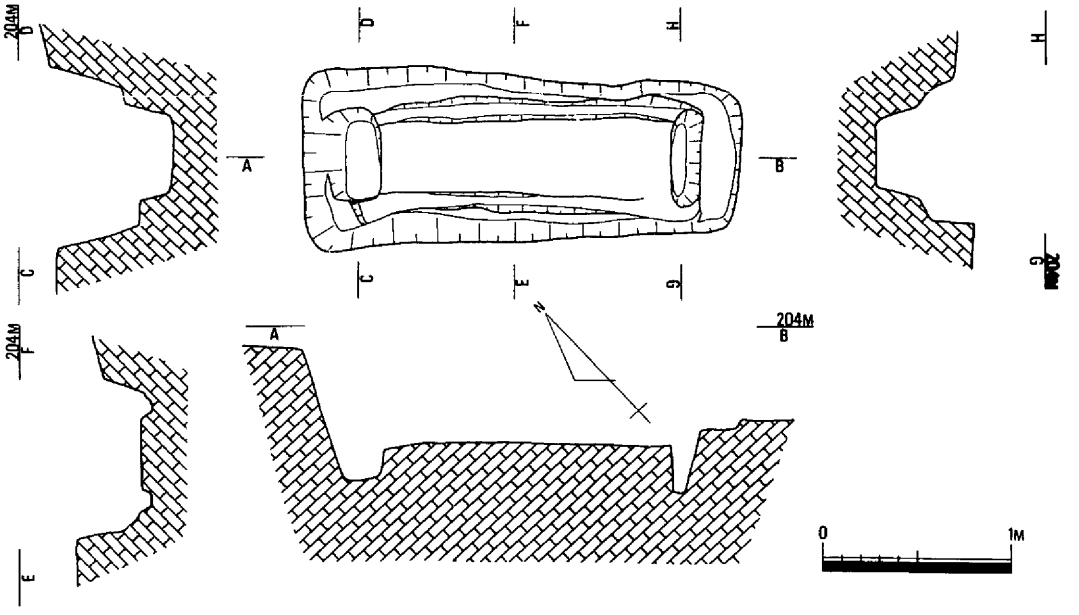
第6図　　2号住居址実測図（$\frac{1}{60}$）



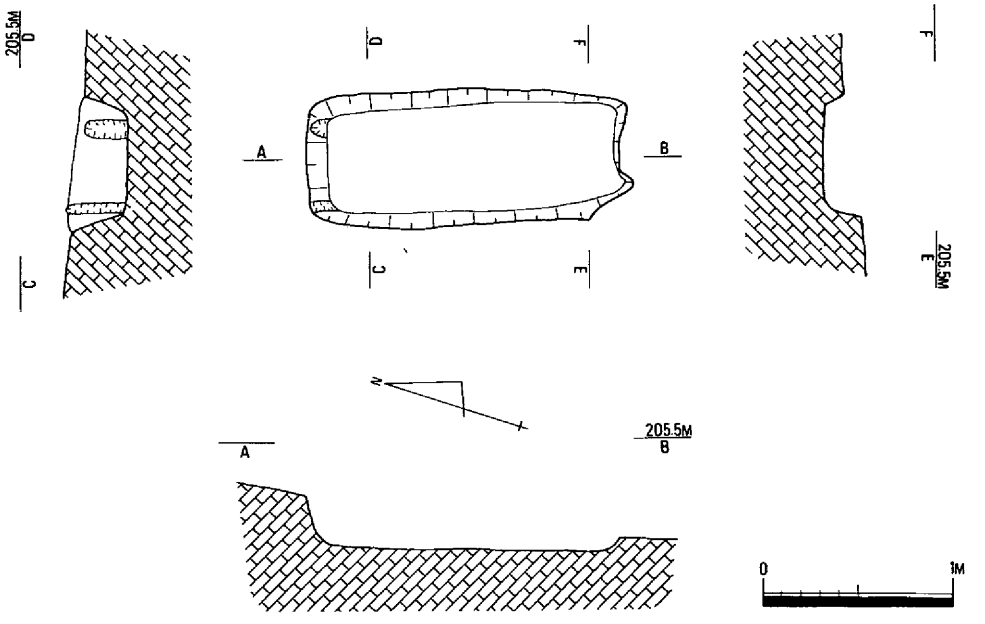
第7図　3号住居址実測図（$\frac{1}{60}$）



第8図　土壙墓群実測図（$\frac{1}{200}$）



第9図　土壙墓群　No.86 土壙（$\frac{1}{40}$）



第10図　土壙墓群　No.120 土壙（$\frac{1}{40}$）

土　壙　墓　群　一　覧　表

土壙番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 巾	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 巾	小口溝（北方向） 長軸 上面	小口溝（北方向） 長軸 底	小口溝（北方向） 短軸 上面	小口溝（北方向） 短軸 底	小口溝（北方向） 床面のさからの深さ	小口溝（南方向） 長軸 上面	小口溝（南方向） 長軸 底	小口溝（南方向） 短軸 上面	小口溝（南方向） 短軸 底	小口溝（南方向） 床面のさからの深さ	小口溝間距離	側溝（長軸北方向に対して右側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して右側） 巾	側溝（長軸北方向に対して右側） 床面のさからの深さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して左側） 巾	側溝（長軸北方向に対して左側） 床面のさからの深さ	側溝間距離	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
1	100	70	40	75	40																			N 64°W	平行	平行	
2	200	65	35	195	60	40	25	13	8	20	45	30	13	8	27	170								N 47°E	直交	直交	小口溝南が床面から20cmの所で二段掘になっている
3	95	45	25	83	38																			N 46°E	直交	直交	
4	235	90	40	220	60	50	40	15	8	30	55	45	18	10	25	175								N 42°E	直交	直交	
5	205	90	25	185	80	55	43	13	6	7	53	40	22	8	15	150								N 6°E	平行	直交	
6	100	65	40	85	50																			N 4°W	平行	直交	
7	200	85	35	181	75	40	33	15	8	13	38	28	22	10	13	143								N 88°W	直交	直交	
8	215	(100)	7	(212)	95	63	55	20	10	17	62	52	14	8	12	178								N 36°E	直交	平行	
9	180	90	13	176	80	51	40	11	6	16	56	45	17	7	14	150				185	7		88	N 33°W	平行	平行	南壁に1つ北壁に2つ側板痕跡あり
10	217	73	42	205	64	53	42	27	10	17	55	51	23	13	18	155								N 42°E	直交	直交	
11	210	80	25	195	75	31	23	15	6	10	35	28	25	17	18	150								N 33°E	直交	平行	
12			15		(123)	48	43	25	17	25														N 62°W	平行	直交	
13	(202)	(26)	35	(191)	(20)	50	41	18	15	20			30	23	19	114								N 52°W	平行	直交	
14	(220)	(95)	20	(216)	(90)	50	35	23	6	24	(35)	(21)	(20)	(14)	(11)	160								N 42°W	平行	直交	
15	115	65	14	112	55	42	30	18	8	20	45	31	16	11	18	70								N 48°E	直交	平行	
16	(254)	111	36	(253)	90	45	32	23	10	32	42	35	22	13	27	170								N 67°W	平行	直交	
17											62	52	29	19	6									N 45°W	平行	直交	小口溝1つ
18	89	50	20	75	41	26	18	15	12	14	22	16	11	3	9	45								N 63°E	直交	平行	
19	82	(46)	7	79	(37)	25	16	11	5	11														N 28°W	平行	直交	東小口溝部分木の根により攪乱
20	145	83	25	138	66	41	30	16	8	17	43	40	25	18	14	80								N 64°E	直交	平行	
21	74	40	11	68	32	39	30	11	4	11	30	21	8	3	5	47								N 38°W	平行	直交	
22	80	46	18	65	38																			N 56°W	平行	直交	
23		60	24		52																			N 11°E	平行	平行	
24			5			22	22	20	6	24	20	16	12	6	15	65								N 80°E	直交	直交	
25	245	115	42	139	100	50	40	15	8	32	48	32	22	14	36	170								N 19°W	平行	直交	土器あり（第46図1）
26	132	85	40	114	61																2			N 55°W	平行	直交	西北壁に側板痕跡が1カ所あり
27	121	60	31	110	50	34	28	12	5	16	34	26	13	6	20	66								N 50°W	平行	直交	30より新
28	241	110	32	234	106	47	43	11	4	16	40	37	10	4	10	166								N 44°W	平行	直交	29より新
29	271	122	64	256	98	49	48	25	22	16	50	43	17	10	16	176								N 46°W	平行	直交	
30	248	135	47	235	95	48	43	22	11	23	52	41	23	16	35	165								N 47°E	直交	平行	土器溜Cに切られている
31	80	46	34	69	37	23	19	10	6	10	23	17	15	10	11	46								N 20°E	直交	平行	
32	158	89	40	137	65																			N 89°W	直交	平行	
33	98	56	31	88	43	28	23	18	12	12	34	26	14	9	16	51								N 25°E	直交	直交	
34	249	113	68	230	85																			N 31°E	直交	直交	
35	178	98	65	154	80																			N 29°E	直交	直交	
36	140	78	16	136	70	35	24	15	10	32	34	27	15	9	24	94								N 37°E	直交	直交	34より新
37	104	70	8	98	63																			N 26°E	直交	直交	
38	210	88	9	205	85	44	35	10	4	20	41	35	14	6	17	176								N 25°W	平行	直交	
39	235	114	46	230	90																			N 56°W	平行	平行	
40	(124)	53	21	(110)	48	25	22	10	5	8			13	6	12	85								N 45°W	平行	平行	
41	95	59	27	90	46	28	22	10	8	13	27	24	10	7	13	54								N 36°W	平行	平行	
42	215	75	32	195	64	36	25	14	4	19	35	25	16	6	21	134								N 49°W	平行	平行	
43	(116)	(53)	12	(106)	(49)	40	23	17	8	9	(56)	(50)	8	7	16	85								N 49°W	平行	平行	
44	225	100	22	215	75	50	38	19	12	12	40	28	12	5	14	170								N 50°W	平行	平行	
45	242	120	30	230	86	64	58	26	16	20	55	43	30	12	25	166								N 40°W	平行	平行	土器片検出（第46図2）

土壙番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 巾	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 巾	小口溝（北方向） 長軸 上面	小口溝（北方向） 長軸 底	小口溝（北方向） 短軸 上面	小口溝（北方向） 短軸 底	小口溝（北方向） 床面からの深さ	小口溝（南方向） 長軸 上面	小口溝（南方向） 長軸 底	小口溝（南方向） 短軸 上面	小口溝（南方向） 短軸 底	小口溝（南方向） 床面からの深さ	小口溝間距離	側溝（長軸北方向に対して右側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して右側） 巾	側溝（長軸北方向に対して右側） 床面からの深さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して左側） 巾	側溝（長軸北方向に対して左側） 床面からの深さ	側溝間距離	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
46	210	76	31	195	55	35	33	18	11	5	40	33	18	12	8	150								N 49°W	平行	平行	
47	215	80	28	205	68	43	35	16	7	15	44	32	21	9	20	147								N 62°E	平行	平行	
48	110	34	20	94	31	28	25	9	3	8														N 46°W	平行	平行	
49	95	50	11	85	44	26	21	13	7	11	32	20	12	9	11	62								N 32°W	平行	平行	
50	117	63	26	109	60	45	37	20	8	17	43	37	12	6	26	59	(70)	6	2	62	5	3	32	N 62°E	直交	直交	
51a	(220)		13	(218)		49	44	15	7	23	40	31	25	14	32	169								N 38°W	平行	直交	
b											41	35	12	6	25	155								N 38°W	平行	直交	内側小口溝
52	(95)	85	29	(193)	80	50	40	14	7	11	36	29	19	14	13	150								N 30°W	平行	直交	
53	202	85	45	191	80	35	32	11	8	19	42	26	15	11	22	156								N 30°W	平行	直交	
54	210	85	43	192	75	49	45	15	6	16	45	39	15	8	21	150								N 40°W	平行	直交	
55	215	94	29	213	82	45	43	15	12	24	48	30	16	12	25	157								N 50°W	平行	平行	
56	205	95	43	200	70	46	35	31	19	27	39	35	31	12	29	140								N 30°E	平行	直交	土器片
57	228	90	52	203	75	44	30	16	11	28	36	30	35	10	25	152	12				15		36	N 21°E	平行	直交	南壁に側板痕跡を確認（8cm深さ）
58	206	115	32	195	90	52	48	13	7	25	45	32	27	16	29	155								N 70°W	直交	平行	
59			3			35	21	13	7	14														N 69°W	直交	平行	小口溝1個のみ
60	117	80	26	104	50	31	21	10	2	12	36	27	19	4	11	73								N 11°E	平行	直交	
61	132	56	32	112	53	32	26	16	5	19	35	21	15	5	15	80								N 14°E	平行	直交	側板わきに地山石をあてている
62	188	83	13	184	75	40	27	15	7	21	35	28	19	19	17	141								N 65°W	直交	平行	
63			37	(202)		45	27	18	13	11	44	27	23	13	18	162								N 70°W	直交	平行	削平で小口溝のみ検出
64			40	(198)		48	37	18	12	10	51	41	17	13	19	163								N 65°W	直交	平行	削平で小口溝のみ検出
65	100	(55)	9	89	(45)																			N 53°W	直交	平行	近世か中世小皿と刀子出土
66	235	85	40	221	70	45	35	24	20	35	44	33	20	11	36	164								N 45°E	直交	平行	
67	192	81	39	187	75	42	33	17	8	16	40	32	17	6	16	153								N 46°E	直交	平行	両方の小口溝とも2段掘り
68	185	67	14	180	62	40	33	12	4	22	40	33	20	15	22	142								N 32°E	直交	平行	
69	(90)	63	11	(85)	59						30	21	15	7	11									N 54°E	直交	平行	小口溝1カ所のみ石が詰っている
70	105	53	14	100	44	23	14	8	6	14	23	15	17	6	17	74								N 50°E	直交	平行	
71	89	54	26	76	41																			N 45°E	直交	平行	
72	(105)	52	14		46												(32)	8	2	95	4	3	32	N 32°E	直交	平行	
73	78	62	25	67	53																			N 45°E	直交	平行	土器棺Dにより切られている
74	105	46	25	100	40	29	20	12	6	15	25	17	16	7	16	57								N 45°E	直交	平行	
75	204	97	57	187	78	58	49	15	11	22	59	47	15	9	21	158								N 36°E	直交	平行	土器片あり（第46図4）
76	240	(70)	26	224	(75)	53	38	12	8	23	42	24	17	8	21	185								N 41°E	直交	平行	土器片あり（第46図6）
77	(90)	(35)	23	(85)	(25)	29	19	12	8	13			12	11	10	59								N 28°E	直交	平行	
78	(90)	(46)	7	(87)	(41)	25	21	14	6	11	30	18	14	7	15	55								N 40°E	直交	平行	
79	255	85	25	232	70	48	37	17	12	19	55	50	22	19	14	170								N 46°E	直交	平行	
80	87	54	30	72	40																			N 26°E	直交	平行	
81	99	67	42	82	39	31	26	11	9	16	32	21	10	7	9	58								N 39°E	直交	平行	
82	122	62	40	105	42	36	25	20	15	15	28	21	21	6	20	54								N 32°W	平行	直交	
83	(110)	41	19	(100)	38	24	20	10	9	8	20	15	18	7	19	63								N 60°W	平行	直交	
84	219	76	24	208	66	44	31	16	9	22	49	40	22	19	14	160				176	4	1		N 38°E	直交	平行	東側板溝はかすかな痕跡あり
85	(37)	91	32	(35)	87																			N 52°W	平行	直交	
86	210	86	51	195	69	52	41	28	18	20	49	36	14	7	26	153	157	10	6	155	12	6	39	N 45°W	平行	直交	
87	200	98	46	183	61	49	35	13	8	20	45	33	21	8	24	149								N 47°W	平行	直交	
88	225	85	55	210	75	47	43	24	11	23	50	37	26	13	30	146								N 49°W	平行	直交	
89	146	68	27	134	58	42	33	17	9	14	38	32	23	18	20	90								N 65°W	直交	直交	
90	256	100	30	199	65	36	29	15	12	16	33	30	15	14	22	170								N 4°W	平行	直交	

土壙番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 巾	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 巾	小口溝（北方向） 長軸 上面	小口溝（北方向） 長軸 底	小口溝（北方向） 短軸 上面	小口溝（北方向） 短軸 底	小口溝（北方向） 床面からの深さ	小口溝（南方向） 長軸 上面	小口溝（南方向） 長軸 底	小口溝（南方向） 短軸 上面	小口溝（南方向） 短軸 底	小口溝（南方向） 床面からの深さ	小口溝間距離	側溝（長軸北方向に対して右側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して右側） 巾	側溝（長軸北方向に対して右側） 床面からの深さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 長軸	側溝（長軸北方向に対して左側） 巾	側溝（長軸北方向に対して左側） 床面からの深さ	側溝間距離	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
91	190	92	26	175	69	36	29	16	4	13	45	31	10	9	16	148								N12°W	平行	直交	
92	93	46	13	78	35	21	16	12	10	12	20	13	12	9	13	49								N57°W	平行	直交	
93	106	52	28	93	43	36	21	17	11	7	25	13	9	4	8	67								N17°W	平行	直交	
94	100	52	16	79	48	27	19	16	6	9	26	20	14	10	11	49								N 6°E	平行	直交	
95	196	98	32	186	91	56	40	18	10	21	48	33	16	11	27	154								N12°E	平行	直交	
96	242	115	35	236	100	51	49	16	14	28	49	47	13	11	24	164								N13°E	平行	直交	
97	203	86	31	183	66	40	32	10	7	16	41	31	16	10	15	180								N19°E	平行	直交	
98	212	75	25	207	58	49	28	15	13	23	51	39	15	13	12	165								N21°E	平行	直交	
99	(117)	(62)	3	(115)	(59)	31	22	16	13	16	35	28	16	14	16	80								N80°W	直交	直交	
100	(205)	69	23	(205)	65	56	54	22	19	21	54	46	24	17	30	153								N72°W	直交	直交	
101	(155)		15	(147)		18	16	9	4	10														N71°W	直交	平行	
102			13	(95)		39	29	16	13	11	32	22	13	10	14	65								N84°E	直交	平行	削平の為，小口溝のみ
103	(77)		10	(75)		25	18	9	6	11	22	17	9	5	13	58								N72°W	直交	直交	
104	(229)	103	46	(220)	95	56	32	12	11	49	(35)	(28)	(15)	(10)	(24)	174								N60°W	直交	平行	
105		62	15		58	36	27	16	9	19								4			7			N72°W	直交	平行	北壁に側板痕跡検出
106	(215)	(62)	50	(195)	60	42	37	15	11	24	44	35	13	11	26	156								N72°W	直交	平行	
107			30			55	42	20	8	34	40	35	22	11	38	182								N72°W	直交	平行	
~~108~~																											欠番
109				(162)		42	38	9	8	8	30	27	11	6	9	143								N38°E	直交	平行	
110						39	34	11	10	16														N45°E	直交	平行	小口溝1カ所のみ検出
111						42	32	16	4	23														N50°W	平行	直交	二段に掘られていた
(112)	202	156	65	143	99																			N40°E	直交	平行	土壙床面に石あり，近世
113		(79)	21		(74)																			N72°W	直交	平行	土壙墓かどうか不明
114	92	56	40	80	44	31	27	12	11	13	25	24	16	14	12	49								N43°E	直交	直交	
115	(102)	65	21	(100)	60	38	35	14	9	13	40	36	10	7	6	76								N45°W	平行	直交	
116						50	44	21	10	22														N47°W	平行	直交	
117	(118)	100	29	(113)	91	47	35	21	6	29														N30°W	平行	直交	
118	150	80	84	109	45																			N48°E	直交	平行	近世
119	(98)	55	12	(96)	50	25	22	16	5	10	27	21	11	6	7	68								N42°W	平行	直交	
120	165	77	27	150	57													10			5			N17°W	平行	平行	小口溝なし．南北壁に側板痕跡あり
121	105	63	17	100	50	31	18	14	13	17	36	26	13	6	15	75								N24°W	平行	直交	
122		(50)	11	(91)	(45)	45	32	23	12	31	50	35	15	9	32	155								N20°E	直交	平行	
123						52	38	21	12	12														N65°W	平行	直交	
124						58	54	37	28	20														N35°W	平行	直交	小口溝のみか
125						29	21	19	13															N52°W	平行	直交	小口溝のみ
126						20	17	12	10	26														N77°E	平行	直交	小口溝のみ
127	95	56	17	91	40	30	22	18	9	8	35	25	23	14	10	49								N 2°W	平行	直交	削平の為，巾を確認できず

（注記）
- 記録は確認できたものを示した。
- 削平され滅失したものは現在値を（　）で記入した。
- 側板溝は床面で確認できるものと，壁に側板の当った凹痕跡が確認できるものがある。
- 掘り方の計測値は，検出した地山面で確認したものである。
- 深さは，遺構を地山面で確認したので，地山面からの計測値である。
- 小口溝が1つだけで墓壙が確認されないものの場合，小口溝の長軸と直交する線を土壙墓の主軸とした。
- 方位は磁北を基準とした。磁北方位は真北より西偏約6°40′（昭和48年）

方形台状墓1号

土壙番号	墓縁上縁 長さ	墓縁上縁 巾	墓縁上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 巾	小口溝（北方向） 長軸 上面	小口溝（北方向） 長軸 底	小口溝（北方向） 短軸 上面	小口溝（北方向） 短軸 底	小口溝（北方向） 床面からの深さ	小口溝（南方向） 長軸 上面	小口溝（南方向） 長軸 底	小口溝（南方向） 短軸 上面	小口溝（南方向） 短軸 底	小口溝（南方向） 床面からの深さ	小口溝間距離	側溝（長軸北方向に対して右側） 長さ	側溝（長軸北方向に対して右側） 巾	側溝（長軸北方向に対して右側） 床面からの深さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 長さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 巾	側溝（長軸北方向に対して左側） 床面からの深さ	側溝間距離	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
1	222	91	15	203	65	57	53	28	20	26	48	46	25	18	29	147								N 26° E	直交	平行	第1台状墓
2	192	100	17	187	90	42	36	14	11	9	35	32	14	10	16	155	197	9	4	204	10	3	46	N 19° E	直交	平行	

方形台状墓2号

土壙番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 巾	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 巾	小口溝（北方向） 長軸 上面	小口溝（北方向） 長軸 底	小口溝（北方向） 短軸 上面	小口溝（北方向） 短軸 底	小口溝（北方向） 床面からの深さ	小口溝（南方向） 長軸 上面	小口溝（南方向） 長軸 底	小口溝（南方向） 短軸 上面	小口溝（南方向） 短軸 底	小口溝（南方向） 床面からの深さ	小口溝間距離	側溝（長軸北方向に対して右側） 長さ	側溝（長軸北方向に対して右側） 巾	側溝（長軸北方向に対して右側） 床面からの深さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 長さ	側溝（長軸北方向に対して左側） 巾	側溝（長軸北方向に対して左側） 床面からの深さ	側溝間距離	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
1	224	90	16	208	80	62	54	24	16	19	48	39	18	12	20	154								N 30° E	直交	平行	
2	241	109	16	233	97	71	45	22	11	24	77	50	32	26	24	168								N 34° E	直交	平行	
3	204	76	5	202	64	56	47	20	9	13	47	38	17	11	14	164								N 23° E	直交	平行	
4						66	61	21	13	8	54	43	25	15	13	161								N 24° E	直交	平行	第2台状墓
5	218	88	15	207	76	47	42	11	7	18	43	39	16	7	22	173								N 29° E	直交	平行	
6(a)						(56)	43	21	6	21	73	59	20	8	18	187								N 28° E	直交	平行	
6(b)						〃	〃	〃	〃	〃	60	54	19	12	17	161								N 28° E	直交	平行	
7						49	44	23	12	21	49	41	20	11	14	177								N 27° E	直交	平行	
8						43	43	14	14	17	56	41	17	11	24	207								N 33° E	直交	平行	北小口溝中より石を検出
9	(219)	83		(203)	66	46	43	16	8	21	46	43	20	14	23	158								N 17° E	直交	直交	
10	229	84		203	63																			N 68° W	平行	平行	

その他の土壙

土壙番号	墓壙上縁 長さ	墓壙上縁 短巾	墓壙上縁 深さ	墓壙底 長さ	墓壙底 短巾	主軸の方位	尾根稜線と	等高線に対して	備考
65	100	(55)	9	89	(45)	N 53° W	直交	平行	
112	202	156	66	143	99	N 40° E	直交	平行	
118	150	80	34	109	45	N 48° E	直交	平行	
新1	100	94	50	57	46	N 88° W	平行	直交	
新2	126	124	61	100	92	N 3° E	平行	直交	
新3	122	91	60	59	45	N 70° W	平行	直交	
新4	115	85	60	58	58	N 33° E	直交	平行	

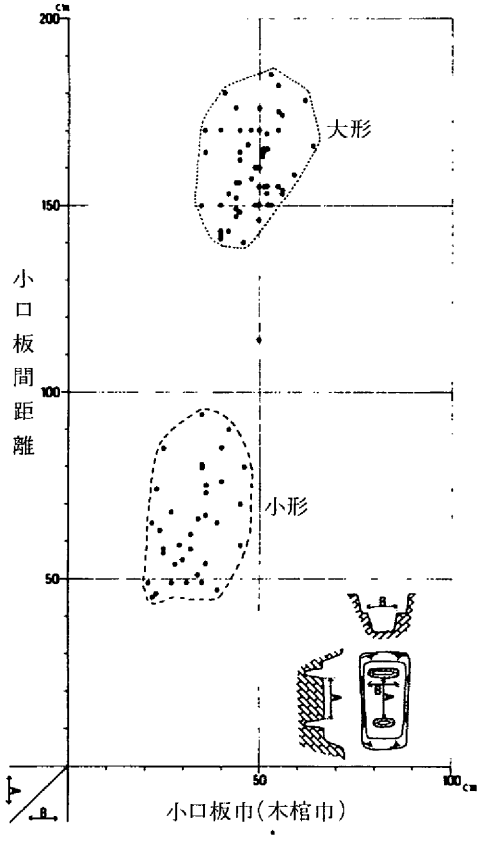
第2節　土壙墓群（第8～14図）

今回の発掘調査対象地内から，総数142基の土壙が検出されたが，この中には近世の瓦を伴い土壙の作り方も弥生期のものと異なる点のある7基を差引いた135基が弥生期のものと想定された。そのうち方形台状墓に伴う12基を除く123基（新しいものを含めると126基）が方形台状墓より東方約15m隔てて群集する。東西約30m，南北約25mの範囲内に密集して，さらに土壙墓群の間には土器棺が6個検出された。土器棺も土壙墓群に伴う埋葬の一部と考えられるが，記述の便宜上第3節で後述する。

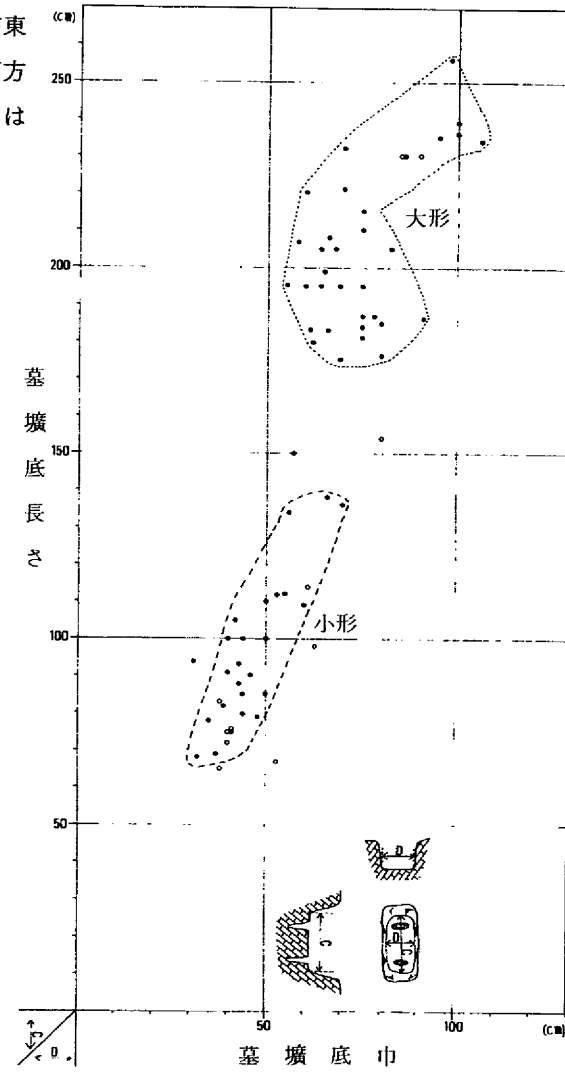
これらの土壙墓群は，近接状況，方位によって数基づつのグループに分けることができる。また構造・規模による分類も可能である。

(1)　位置・立地

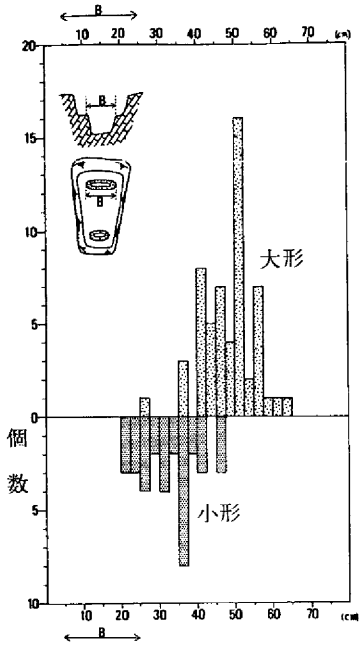
下道山遺跡は正確に言えば西北西から東南東の方向に長い尾根上に位置するが略して東西方向に長い尾根ということにする。この頂上部は



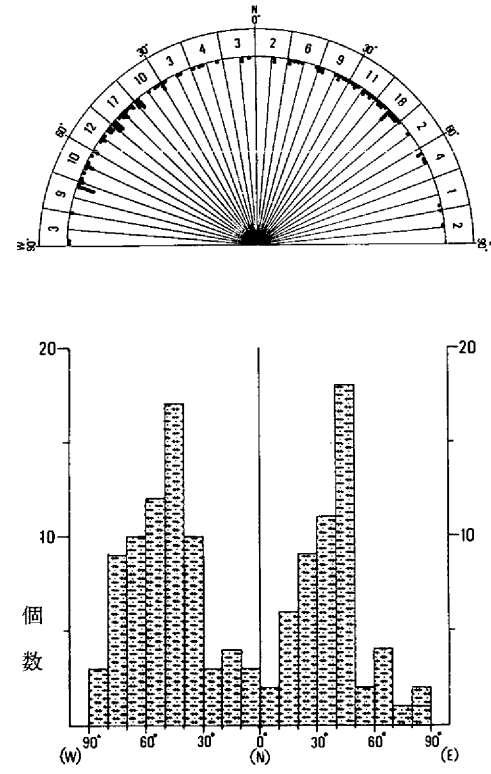
第11図　木棺内径を推定する



第12図　土壙墓床面の大きさ



第13図　小口板巾の大きさ



第14図　土壙墓主軸方位一覧表

西端部の最高点から，方形台状墓2号までは，やや平坦である。ところが方形台状墓1号から東へ向ってゆるく傾斜していき東南方向と南西方向の陵線に向って撓形に広がった緩斜面に土壙墓群が位置する。方形台状墓群より約2 *m*低い位置である。この土壙墓群の北西に，東西方向の溝（第5節で後述）が存在するが尾根を直交して切断しておらず．時期を推定させる土器片も検出できなかったので土壙墓群の位置を界するものとしては積極的に理解できなかった。

この土壙墓群の北側はB5・B6区から東方へ続く凹みにみられるように，旧道によって切断されている。また北・東・南の周辺部では，わずかに小口板溝痕跡だけ検出されたものもあり削平によってすでに消滅した土壙墓も何基か存在した可能性がある。

(2) グループ分け

土壙墓群相互の比高は約4 *m*あるが，高さよりも平面的な位置関係と主軸方位等によって分類してみた。

C6区・C7区を中心とした北グループ約42基（No.1～39，119，120，126）と南半部が分離される。また同一方向の小グループに分類を試みると，この北グループ内では2～4・33～37の8基がほぼ同一方位に主軸をもち，東西に並列しながらまとまっている。これに加えて5・6・8・30～32と土器棺A・Cまで含めた16基とみることもできる。以上を仮にAグループと呼称する。次にBグループとして12～16・118がほぼ同一方向に主軸をもちまとまっている。ただし15は16と重複し直交す

る主軸をもっているが，特に他のグループに属するともみえずBグループに入れることにする。25・28・29・129・39を主体とし，21～24・26・27等を含めたものをCグループとする。しかしCグループは，Bグループと同群となる可能性もある。10・11の2基がまとまっているのをDグループ，18～20の3基をEグループ，残りの7・9・120・17をFグループとする。

55を含めるかどうか躊躇するが40～50・55の12基が等高線に平行する同一主軸をもち良くまとまっているのでGグループとする。38・51～54・82の6基が同一方向に配列されているのでHグループとする。66～81・124の土壙墓に土器棺D・Eを加えた19基をIグループとする。83～89・125の土壙墓に土器棺Bを加えた9基をJグループとする。90～94の5基をKグループとする。56・57 121の土壙墓と直交する方位をもつ58・59の5基をLグループ。62・63・64の3基をMグループ。60・61・127・95～98の7基をNグループ。99～107の9基をOグループ。113～114の2基をPグループ，115～117の3基Qグループとする。

この他に1・109～111・122・123の6基の土壙墓と土器棺Fがあるが点在しているため以上のグループ分けの中に入れることができなかった。

(3) 土壙墓の切合いについて

以上のように17グループに分類したが，グループどうしが接近していたり，接近していても方位の異なるものがありどちらに含めるか疑問の残るものもある。これは分類する人の主観によって違いはでてくるであろうと思う。

土壙墓群の中においてグループ対グループの関係で優位に立つグループは特に認められない。

この土壙墓群は接近したもののなかで，土壙どうしが切り合っているものがある。どのような切り合い方かその様態を観察してみる。土壙墓の構造と分類については後述するが，土壙墓の掘方の中へ木棺が組まれていたことは想定される。掘方が切合っている場合があっても，その木棺の部分はさけて作られている（15・16の例26・27の例等による）

これは土器棺の場合でも同じような例が観察できる。ただ一つだけの例外は土壙墓73と土器棺Dの場合である。これがどうして生じたのかは次のような状況が想定される。①土壙墓73は小口板溝を持たない土壙である。→木棺組合せではなく掘方内に直接埋葬された可能性がある。②土壙墓73は小形の土壙墓である。→子供を埋葬したとすれば，土器棺D埋葬の際，遺骸がほとんど分解していた可能性もある。③土壙墓73の位置は四方を他の土壙墓に取り囲まれている→ここに土壙墓が存在したことが地表面から識別できずに土器棺Dを埋葬した。以上のように想定されるがこの第3の現象および土壙墓の配列状況から，新しく埋葬しようとする場合に，以前に埋葬された土壙の位置が識別できたものと考えられる。識別には何らかの標式（石・木）を置いたことも考えられるが，むしろ掘方の中に木棺を組んだ結果，余った土を盛上げてできた長方形の土饅頭が次々と並んでいたのではなかろうか。しかも木棺が腐朽し去る前で，あまり間を置かずに次々と短期間に埋葬されたものと考えられる。

(4) 土壙墓の構造

個々の遺構については一覧表を参照されたい。ここでは概要についてのべることとする。

平面形はすべて長方形の土壙を掘込んだものである。小口溝を両側，又は片側にもつものとまったくもたないものがある。また側板痕跡 （土壙墓一覧表で側溝としている。）が床面や，土壙掘り方の小口の壁面にみられるものもあり，小口板溝を有さないものでも，組合せ式箱式木棺となるものもある。また発掘中の所見として，土壙掘方の検出をする際に，木棺部分の埋積土と掘方の埋土の違いが見出せるものが多く，平面で分離して発掘できるものがあった。

土 壙 墓 形 態 分 類 一 覧 （合計 126 ）

	小口溝を有する		小口溝なし
	両 側	片 側	
大形 合計 58	2・4・5・7・8・9・10・11		34・35・39・(85)
	14・16・25・28・29・30・38・42		113・120
	44・45・46・47・51・52・53・54		
	55・56・57・58・62・63・64・66		
	67・68・75・76・79・86・87・88		計 6
	90・91・95・96・97・98・100・104		
	106・107・109・122 計 52		
小形 合計 51	15・18・20・21・24・27・31・33	19・48・69	1・3・6・22・23・26
	36・40・41・43・49・50・60・61		32・37・71・72・73・80
	70・74・77・78・81・82・83・84		
	89・92・93・94・99・102・103・114		計 12
	115・117・119・121・127		
	計 37	計 3	

その他削平が著るしく上記分類に入らないもの （合計 13 ）

大 形	合計 8	12・13・17・101・105・116・123・124	小口溝片側あり
大・小不明確	合計 2	110・111	〃
小 形	合計 3	59・125・126	〃
近 世	合計 3	65・112・118	

※ 108 は欠番

土壙墓の床面の大きさは第12図に示す。掘方上面は削平その他による影響を受け易いので土壙床面の計測数値を利用した。また第11図に示すごとく小口板の巾と，小口板間の距離，すなわち組合せ式箱式木棺の内径と推定される数値を表にした。これによると土壙墓群は大・小の二種に大別され，小口板溝間の距離の分布は 140 cm～ 185 cm，45 cm～94cmということになる。これが一概に被葬者の身長を示すとはいえぬが，仮りに現在の平均身長(注)に合せて年令をあてはめてみると，11～成人，0才～3才ということになる。大形の土壙墓は合計66基，小形の土壙墓は55基あり，乳幼児の埋葬率が異常に高い事が示される。もし土壙墓の形態として二種の大きさが規格化されて存在し，すべての埋葬を，この規格の土壙を利用する慣習があったとすれば前記の推論は成立たないことは

いうまでもない。

㊟ 厚生統計協会「国民衛生の動向」特集「厚生の指導」P310第4章児童等の体格体力など昭和52年

小口板溝の有無については，比較的小形のものに，小口板溝を持たないものが多いことがみられるだけであるが，片側だけに小口板溝を有する明確な例は，小形の土壙だけである。

小口板溝の長さについて（第13図）大形土壙墓では35cm～64cmの間であり小形土壙では21cm～45cmである。これから一定の規格化された巾の板材使用がうかがえないかと（第13図表）を作成したが，大形で40～57.5cm，小形では20～40cmあたりの頻度が高い傾向を示すだけで，特に規格化された巾とは言えず，逆に対象物に適当に対処していたことがうかがえる。

主軸方位については（第14図）北東および北西方向に指向性があることを指摘するにとどめる。

(5) 出土遺物（第46図1～7）

実測図の右下に出土した土壙墓の番号を記した，1は高坏の坏部である。直径約20cm，色調は淡赤褐色，内外面とも縦位の刷毛目を施したあとヨコナデ調整している。2は土壙墓45の西側小口板溝上部で土壙内に落ち込むようにして検出された。口径13cm，口縁部に凹線文をもつ壺形土器である。頸部はやや長く，胴部との境が少し凹む，外面はていねいにヨコナデしているが胴部には刷毛目が残る内面ヘラ削り調整が胴部上位までみられる。3は甕形土器の底部である。外面に浅い刷毛目をもつ，赤褐色に焼きしまっている。4・5は口縁部下方に拡張する甕形土器である。端部に2～3本の凹線を施こし，内面にわずかに，ヘラ削りが見られる。弥生後期前半に比定したい。6は丹塗り高坏脚部である。縦位のヘラ描き平行線が5本みえる。弥生後期前半に比定したい。7はC6区の表土除去中出土したもので，上下に拡張する口縁部をもち端部に三条の凹線文を施したていねいな作りの甕形土器である。

第3節 土器棺 （第15.47.48図）

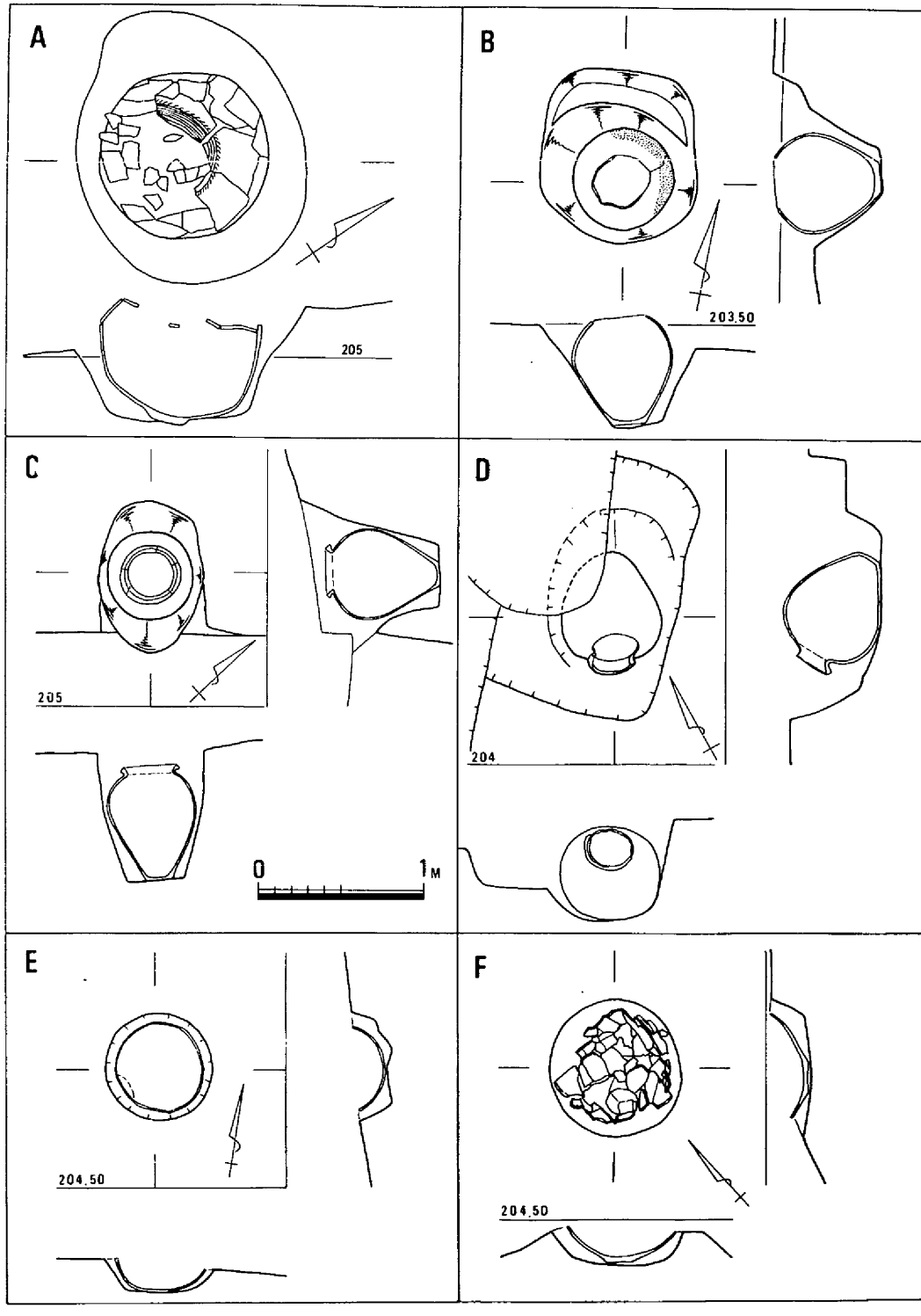
下道山遺跡の丘陵東端部に存在する土壙墓群の中で6個の土器が土壙に埋置された状況で検出された。いずれも土器棺だけのグループはつくらず土壙墓群内に点在していた。

(1) 土器棺A

土壙墓3と5の中間にあり大型の壺形土器の頸部を打ち欠き壺棺としたもので直径128×166cm深さ73cmの円形土壙内にやや北に傾きほぼ垂直に埋置されている。胴部上半部は破損している。また復元できない別個体の土器片も存在するので蓋に使用されたと考えられる。

(2) 土器棺B

土壙墓89の東にあり頸部を取り去って口を広げた壺形土器を使用している。直径93cm×84cm，深さ62cmの截頭円錐形を反転した形の円形土壙内に直立させて埋置している（なお図上で掘方の北側の段は掘りちがいである。）



第15図　土器棺実測図

(3) 土器棺C

土壙墓30に接して検出されたもので，口縁部を打ち欠いていない完形品の甕形土器をそのまま使用して直径91×63cm，深さ83cmの土壙内に直立させて埋置している。これも土器棺Bと同じく截頭円錐形を反転したような土壙となっているが，どちらかといえば住居跡などの柱穴の掘方に相似する。この掘方は東南部で土壙30と接したところの断面を観察するとわずかに土壙墓30の土が赤色がかった黄褐色土であり，土器棺埋土は赤味が少なく，断面の切合からみると土器棺が，土壙より後に築かれたと考えられる。

(4) 土器棺D

土壙墓73と切合って検出された。口縁部から頸部の円周のうち半分を取り，口を広げた壷形土器を使用している。直径 110 cm×75cm，深さ60cmの楕円形の土壙内に胴下半部を土壙底面に接するよう横転させており，底部を北にむけ打ち欠いた口を上にむくように埋置している。

(5) 土器棺E

土壙墓75の西方に検出された。直径64×65cm，深さ25 cmの土壙内に底部を西南にむけ横転して埋置している。遺構上部は削平のため残存状況が悪い。

(6) 土器棺F

土壙墓37の西方3 mの所で検出された。Eと同じく遺構上面の削平がはげしい。直径78×82 cm，深さ24 cmの土壙内に底部を下にして直立埋置している。E，Fともに土器の復元はできなかった。

(7) 小 結

土器棺埋葬状況をまとめると，下記のようになる。

1. 土器棺埋置用の土壙を掘って埋納してある。
2. 土器棺Dを例外として土器棺埋納と土壙墓とは接近はしても重複せずに作られている。
3. 土壙内に土器を直立したもの（A・B・C・F），横転させて埋納したもの（D・E）の二種に分類される。
4. Aは土器棺に土器片の蓋をした可能性があるが，他には土器あるいは石などで蓋をしたものは発見されていない。

(8) 出土遺物

土器棺Aは胴径 50.3 cm，高さ(46)cmの大形壷形土器である。色調は明赤褐色で黒斑を有す。頸部に刷毛目調整の後，ヘラ状工具による沈線をめぐらす。沈線の下部に刷毛状工具による刺突文をめぐらす。胴部外面は刷毛目調整の後，下半部は縦のヘラ磨き上部は横位のヘラ磨きとなっており，ていねいな仕上げである。胴部内面は剥離がはげしいが，横位の刷毛目調整が施されている。底部は平底でやや肥厚している。底部から胴部への仕上りはややゆるい角度である。

土器棺Bは頸部から上が欠損しているが，胴径 34.8 cm，高さ(32.5)cmの甕形土器である。外面刷毛目調整，内面ヘラ削りは胴部上半まで施されている。色調は淡赤褐色である。底部は平底で，胴部への立上りは細くなっている。

土器棺Cは高さ 35cm 胴径27cm口径16cm，完形品の甕形土器である。口縁部は上下に肥厚して端部

に三条の凹線文を施している。胴部の調整は土器棺Bと同じである。色調は淡赤褐色で黒斑を有する。胴部外面において底部から8～20cmの間にススの付着がみられ，甕として実用していたことをうかがわせる。

土器棺Dは口縁部を打ち欠き，口を広げた壺形土器である。高さ35.4cm，口径 14.4cm，胴径 30.7cm 口縁部は上下に拡張し三条の凹線文を施こす。甕に比べると胴部がはり，平底へゆるやかに向っている。胴部外面はていねいなヘラ磨きが施こされ，胴部中央部に櫛状工具による刺突文がめぐる。内面ヘラ削りは下からおおよそ3分の2上部までである。

時期については，内面に刷毛目を有するAがやや古く弥生後期前葉。B・C・Dは弥生後期前葉末～中葉頃に比定したい。いずれにしても接近した時期の資料と考えられる。

第4節 方形台状墓

今回の発掘調査区域内で2基確認された。伐採後の地形観察では，わずかに1号の墳丘状の高まりと1号と2号の間の凹みがわずかに感じられるほどで，発掘調査をするまでは積極的に認め難かった。しかし調査グリッドの主軸を決定する方法として，調査区域外西方の丘陵頂部を含めてセンターを通るよう設定した結果，ほぼ1号，2号の中央部に連続した土手を残し断面観察することができた。

発掘調査では，方形台状墓1号では東溝と西溝で黒色土を包含する溝や土壙墓が検出されて方形台状墓の可能性がでてきてから南溝の存在も確認できた。

一方，方形台状墓2号は，1号の調査状況をふまえて観察するとわずかな痕跡であるが東溝，南溝，土壙墓が検出されたので方形のつもりで西溝を追求した。ところが土壙墓が次々と並んで検出され，調査区域外西方の松林の中でわずかに凹む所がありそこを西溝と想定すれば，正方形にならず東西方向の長方形の形態となる。

(1) 方形台状墓1号（第16・20～23図）

①外形，外部施設

調査前にわずかな高まりしか観察できなかったが，東・南・西の三方を溝で画されている。北側は山の斜面をそのまま利用し東西10m，南北10m，高さ20～40cmの方形の高まりが認められる。東南・西のそれぞれの溝底から台状部最高点までの比高は，東溝 1.63 m，西溝 0.28 m，南溝 1.29 mを計ることができる。

東溝は長さ8 m，巾1.3～3.58 cm，深さ30cmであり，南北方向に長い，中央部東側は巾広く，深く掘り広げられており，特異な形状を示す。溝底は北から南へ若干の傾斜をみせている。南端部ではあがって留りとなってしまい南溝と連続しない。また，この東溝に面する斜面から溝底にかけて，16個の石が見られる。大きさは15～30cmの河原石である。なお東溝中にみられる深いピットは東溝の埋積土の黒色土を切っており本遺構には伴わない。

南溝は長さ7.1m，巾 1.38 m，深さ 0.25 m，東端は傾斜面に消えているが西端はあがっており，東溝，西溝，いずれとも連続しない。南溝東部に東溝と同じように3点の石がみられた。埋積土は（第21図左端）下層に暗褐色土，上層に褐色土が見られ墳丘土（淡褐色土）と識別される。

西溝は長さ8.8 m，巾 2 m，深さ 0.15 m，北端と南端は斜面にそのまま消えてしまっている。北端から約1.8 mの所を境として溝がいったん途切れ，溝底はそれぞれ北と南方向へ傾斜している。埋積土は暗褐色土が薄く認められ 3 点の石と土器片 1 点がみられた。この溝は削平のためかすかに痕跡が認められただけである。なおこの溝の西南部に溝と平行して長さ5.3 m，巾約 1 m，深さ15 cmの段が存在するが暗褐色土は埋積しておらず，西溝の一部となりうるか判定できない。北斜面は溝や段など何らの施設も有していない。以上で溝の状況を記述した。墳丘はこの溝に囲まれた内部で方形であったと想定される。墳丘断面（第20図）の観察では14の土層が盛土に相当するが，地山の風化の可能性もあり即断し難い。墳丘の高さは計測点によって違いがあり溝底からの計測値は記述したが，視覚的には周囲の地形（周溝外の地表面）からの比高はせいぜい約20～40cmで，周溝からの比高では約40～50cm，いずれも座布団を置いたような低平な墳丘といえる。

②内部主体

方形台状墓中央部よりやや北西に偏して土壙墓 2 基が発見された。土層断面から土壙墓No. 2 がNo. 1 によって切られていることから，No. 2 よりNo. 1 が新しく作られたものであろう。土壙墓No. 1 の北側に，地山礫のブロックがみられ，周囲に炭の小片がやや多くみられたが，明確な遺構としてとらえることができなかった。

第 1 土壙墓

掘方の両長辺壁面に赤色土（第22 図でドットで示した部分）がはりついており，他の土壙墓と異なる土である。小口板溝を両側に有する。小口板の底部では内側にあたる方が，さらに一段深くなっており，小口板はめ込み時の微調整が考えられる。

第 2 土壙墓

掘方は西方がやや広がっており，側板痕跡と小口板溝を 2 つづつ有する。

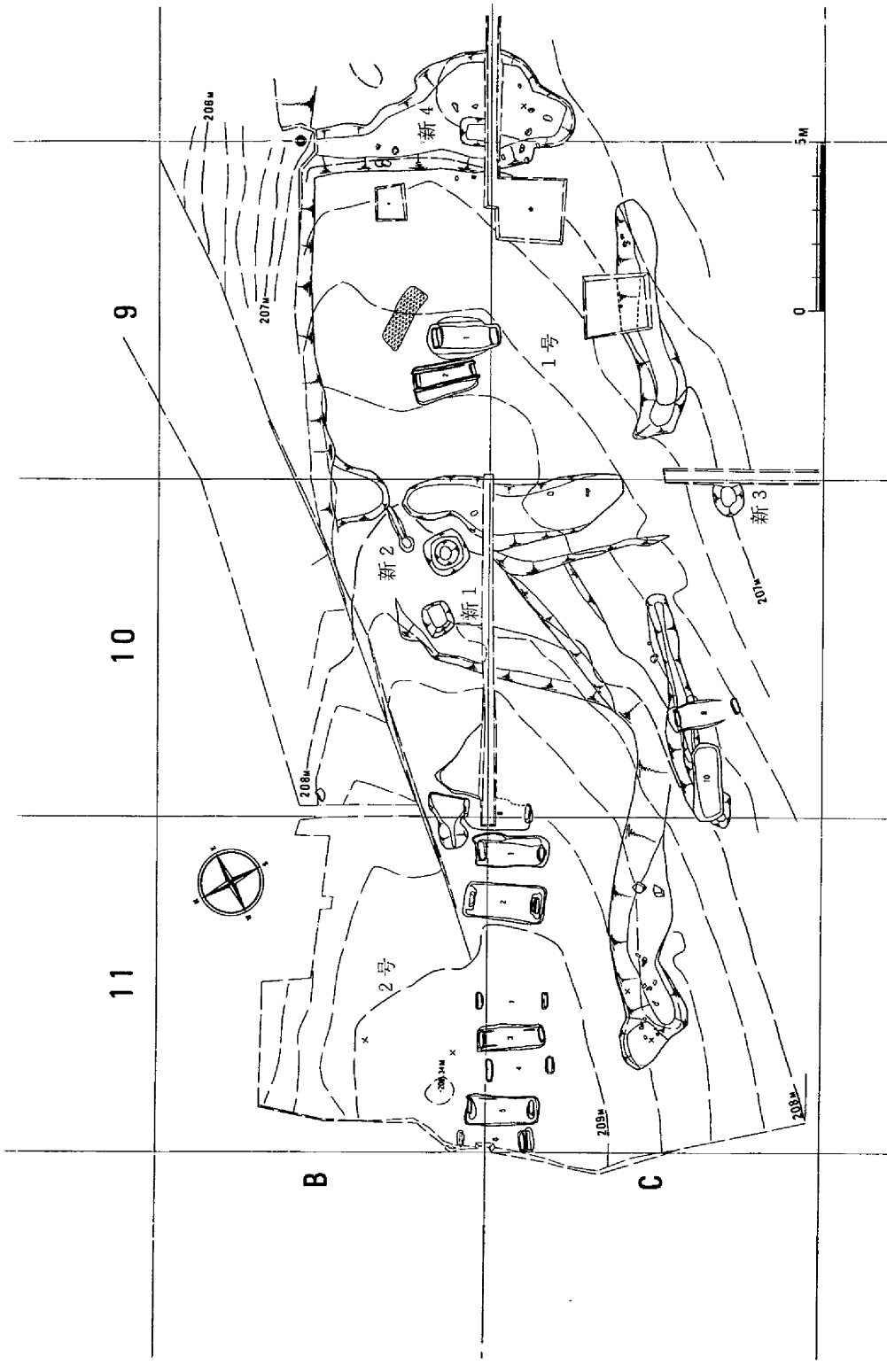
側板痕跡は巾 7 ～11 cm，深さ 3 cmで小口板溝をはさみ，さらに外方に延びている。木棺の板組を想定させる好資料である。

(2) 方形台状墓 2 号（第16～18・24～33図）

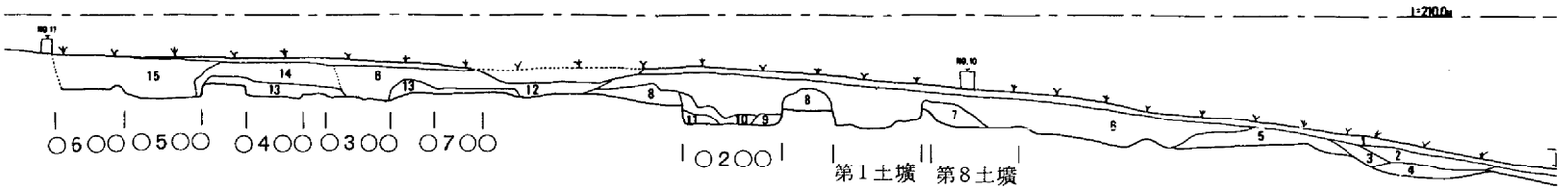
①外形・外部施設

1 号の西方に約 5 m離れて所在する。東・南・西の三方を溝で画され，北側は山の斜面をそのまま利用したもので，東西約20 m，南北約 8 ～10 m，高さ約0.8 mであるが，溝底から台状部最高点までの比高は，東溝1.34m，南溝1.32mである。

東・南の溝はＬ字状に接続しているが，ちょうど接続するところで溝底を別方向の溝によって切られている。東溝は長さ約 7 m，巾約1.4 m，深さ 0.25 mで，北東↔南西方向に長く，墳丘側からの肩はあるが反対側の肩は最高 6 cm程しかない。現状ではこのように溝というより平担面のある段状となり残存度が悪い。溝底は，土手の部分を分水嶺として東北と南西の方向にわずかに傾斜している。

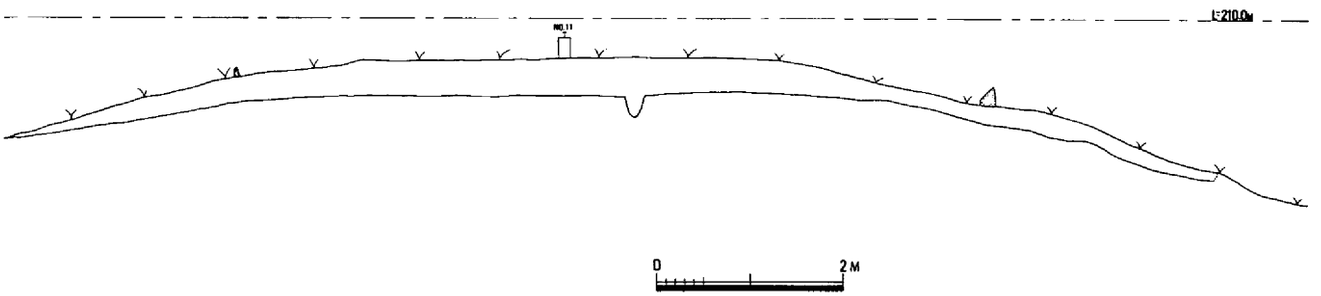


第16図　方形台状墓実測図（$\frac{1}{200}$）（発掘後の地形測量）

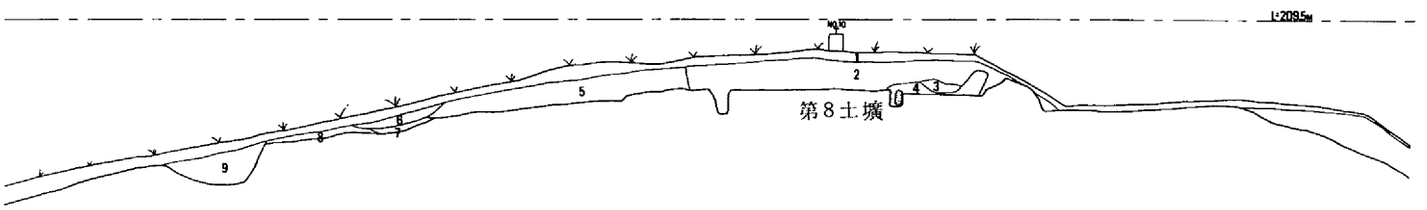


1．表土
2．褐色土(2㎜前後の砂粒を含んだ固い層である)
3．やや暗い褐色土を 2と比べてもろい
4．暗褐色土(腐食土を含んだものと考えられる)
5．黄褐色土層
古墳の盛土のようにきめのこまかい軟らかい土である
木炭粒を数点含んでいる。
6．地山礫混り褐色土層
(10～2㎝前後の地山礫を混入した土)
7．やや白っぽい褐色土
8．淡褐色土(小礫を一切含まない良質粘土)
9．やや灰色を帯びた褐色土
小礫を含まない粘土
木炭粒1片あり
10．淡灰褐色土
11．赤みを帯びた褐色土(赤は地山礫である)
12．軟らかい褐色土である。
13．やや白っぽい褐色土
(固い土である，木炭片1片あり)
14．淡褐色土 軟らかい土でわずかに木炭粒
(5㎜以下) を含んでいる
15．小礫(2㎝前後の地山礫)混り褐色土

第17図　方形台状墓2号　東西断面図　S＝1/80

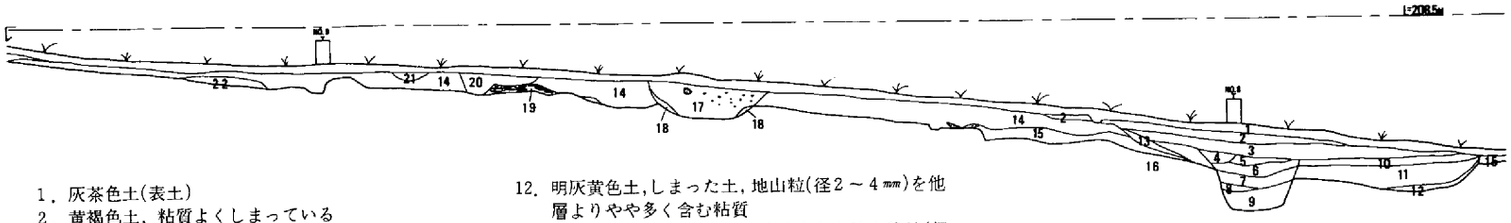


第18図　方形台状墓2号　B 11・C 11区西壁　S＝1/80



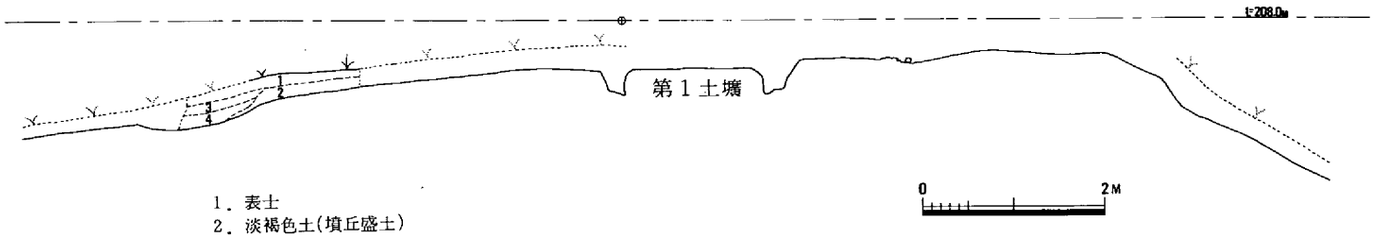
1．表土
2．地山礫(10㎝～3㎝)混り褐色土
3．淡褐色(礫なし)
4．赤みを帯びた褐色土
5．淡褐色土(礫を含まない軟らかい土)
6．攪乱土(褐色・黄色・暗褐色・混合土)
7．暗褐色土
8．褐色土
9．褐色土

第19図　方形台状墓2号　B 10・C 10区西壁断面図　S＝1/80



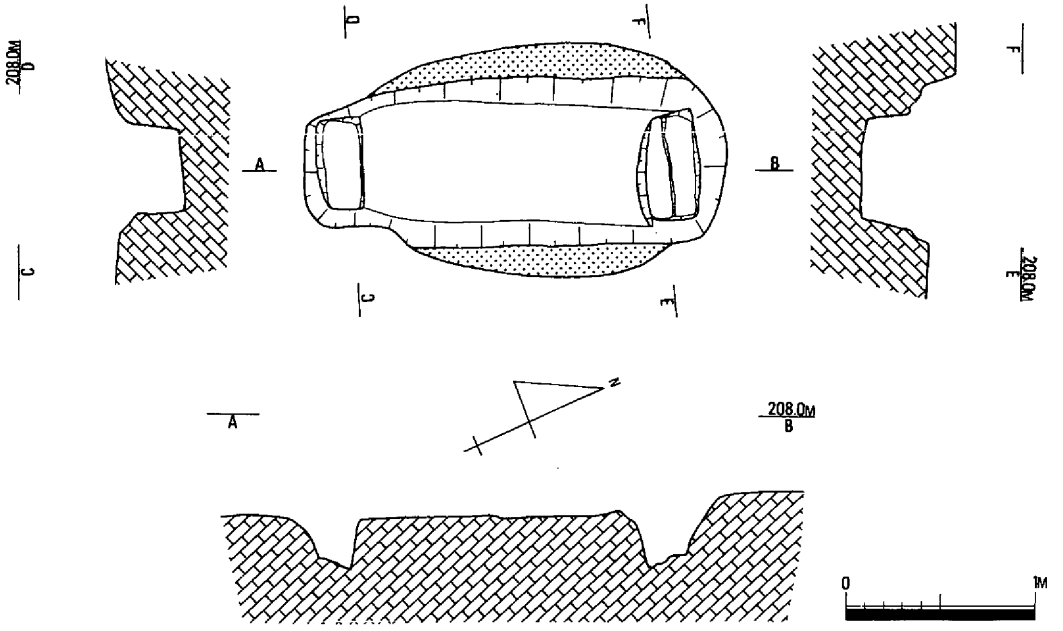
1．灰茶色土(表土)
2．黄褐色土，粘質よくしまっている
3．明灰黄褐色土，2の土よりもややしまりがない粘質
4．灰黄褐色土，3の土よりもややしまりがない粘質
5．灰黄褐色土，3の土とよく類似するがよりしまっている粘土
6．褐色土，ややしまった土，粘質
7．暗茶褐色土，あまりしまりのない土，粘質
8．褐色土，もろい土，粘質
9．赤褐色土，地山の砕粒を多量に含みもろい土
10．黄褐色土，3の土よりもしまりがないがそうもろくない粘質
11．灰黄色土～暗灰黄色土，ややしまった土，黒味を帯びる所あり，粘質
12．明灰黄色土，しまった土，地山粒(径2～4㎜)を他層よりやや多く含む粘質
13．明灰黄色土，しまった土，やや大きな地山砕粒(径5㎜)を含む粘質
14．灰黄色粘質土，よくしまった土，均質
15．淡赤色礫含有，灰黄色土，しまった土，淡赤色礫は地山の風化破砕したもの大きい
16．地山，淡赤色岩
17．褐色土，地山礫混り土
18．赤色土
19．地山．変成岩の大きいもの
20．梅の植樹掘方穴
21．暗褐色土(炭混り土)
22．暗褐色土

第20図　方形台状墓1号　東西断面図　S＝1/80

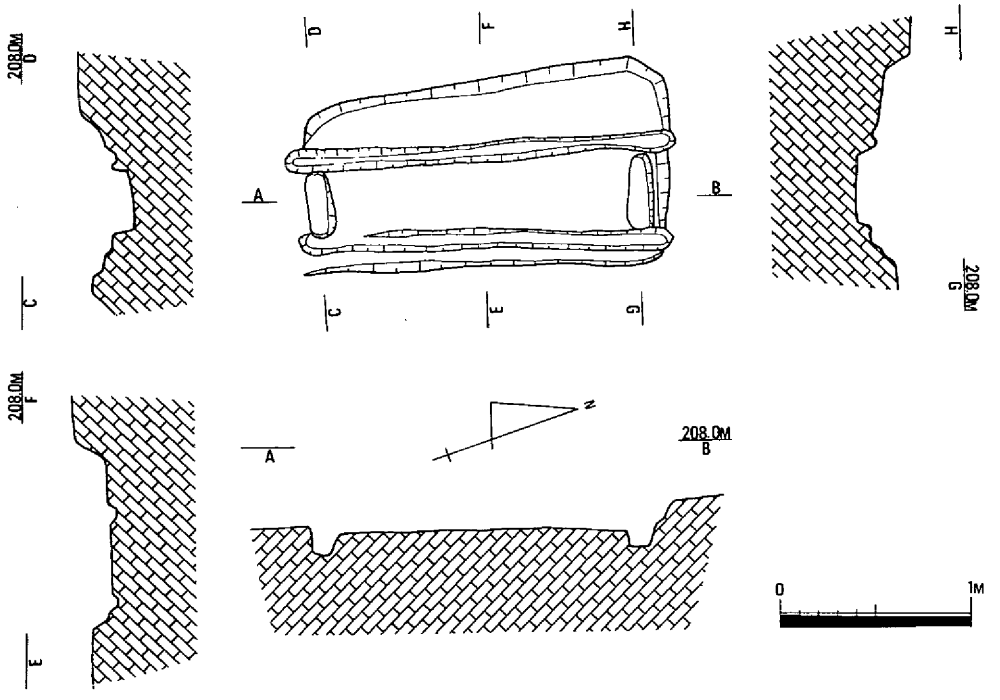


1．表土
2．淡褐色土(墳丘盛土)
3．褐色土
4．暗褐色土(溝内堆積土)

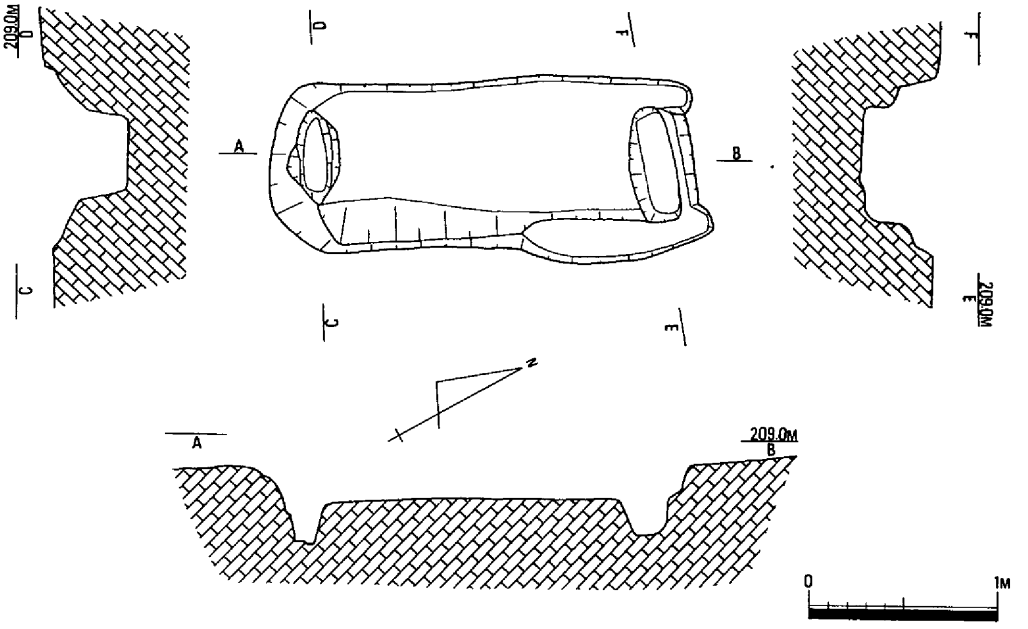
第21図　方形台状墓1号　南北断面図　S＝1/80



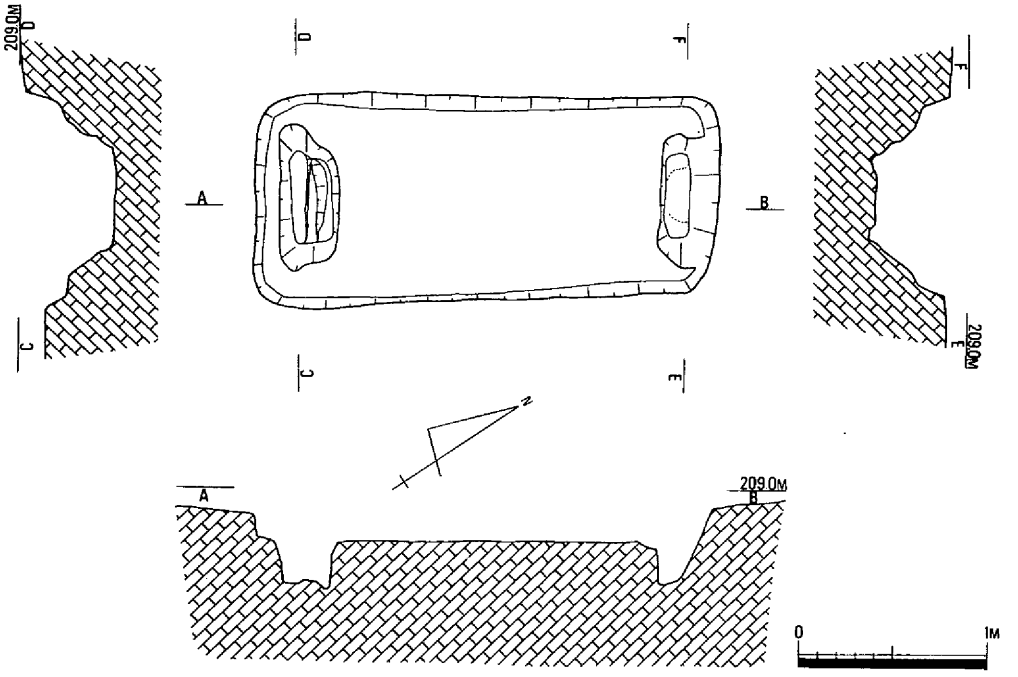
第 22 図　方形台状墓 1 号　第 1 土壙 ($\frac{1}{40}$)



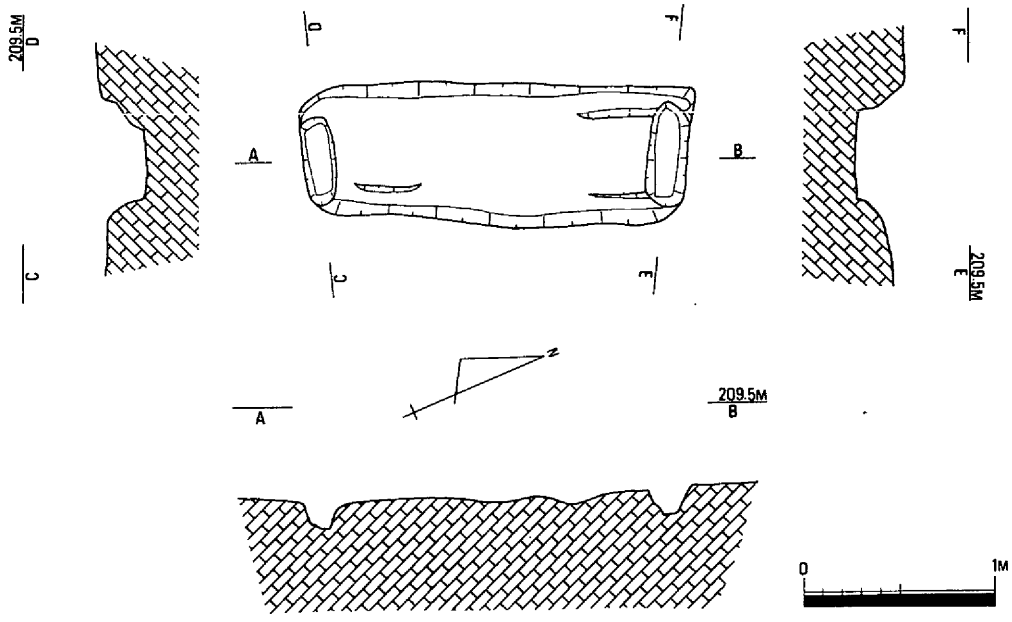
第 23 図 方形台状墓 1 号 第 2 土壙 ($\frac{1}{40}$)



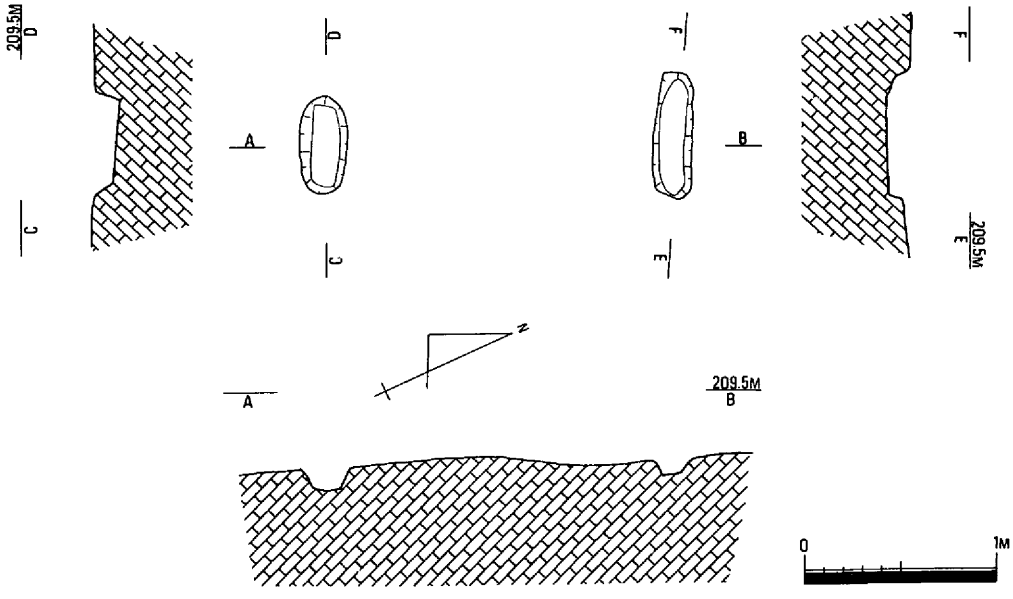
第 24 図　方形台状墓 2 号　第 1 土壙 ($\frac{1}{40}$)



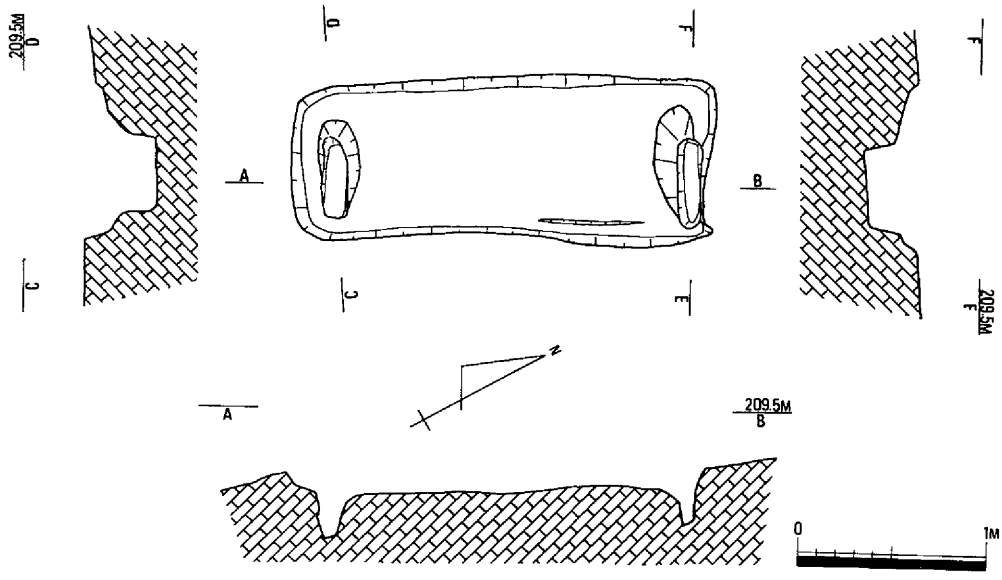
第 25 図　方形台状墓 2 号　第 2 土壙 ($\frac{1}{40}$)



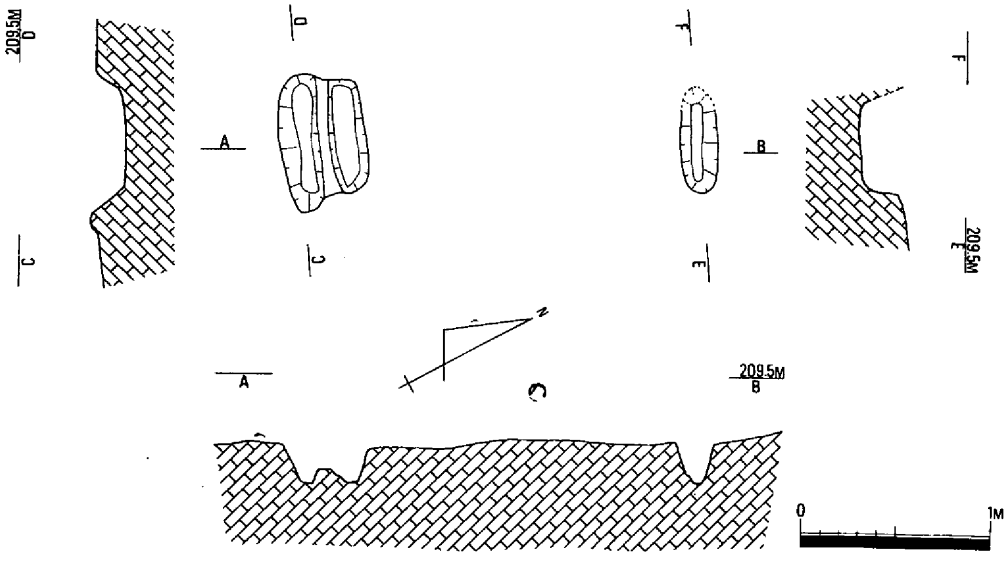
第26図　方形台状墓2号　第3土壙（$\frac{1}{40}$）



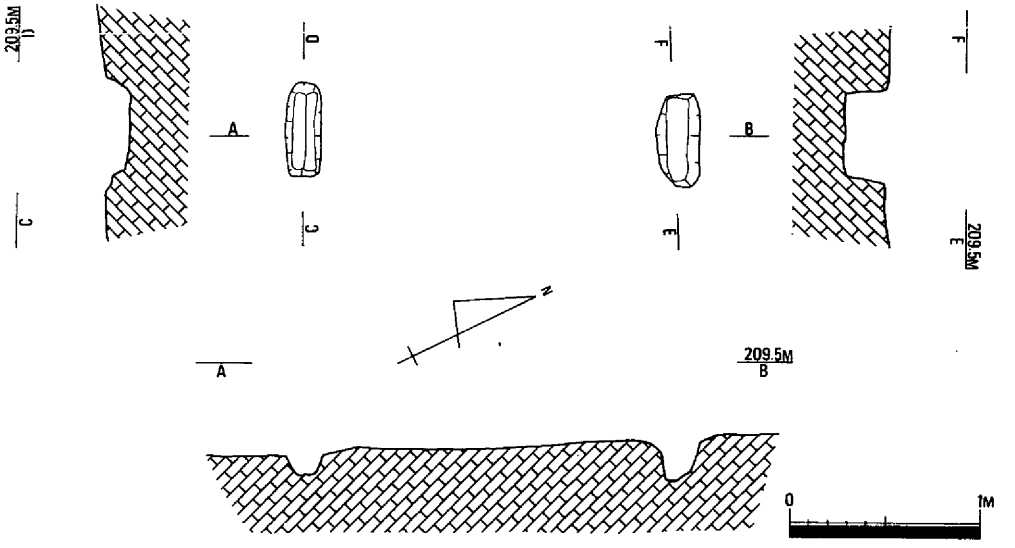
第27図　方形台状墓2号　第4土壙（$\frac{1}{40}$）



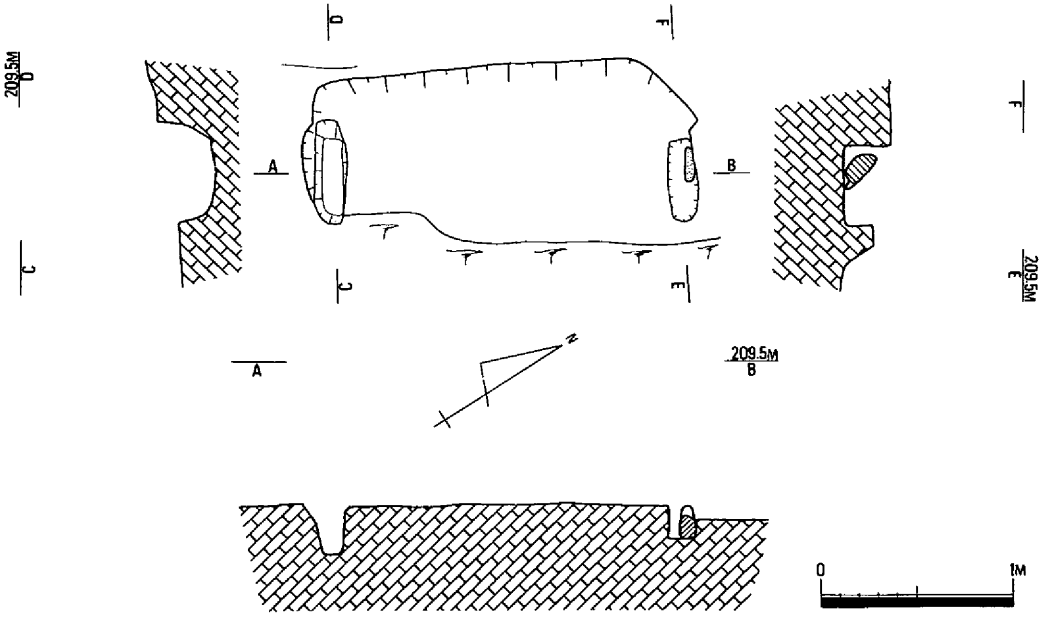
第 28 図　方形台状墓 2 号　第 5 土壙 ($\frac{1}{40}$)



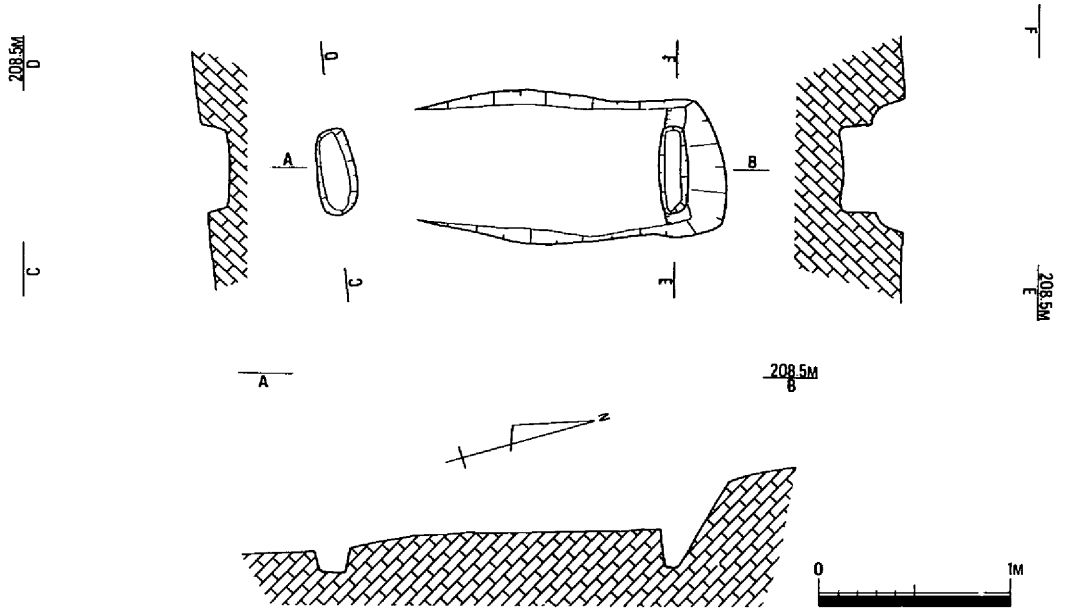
第 29 図　方形台状墓 2 号　第 6 土壙 ($\frac{1}{40}$)



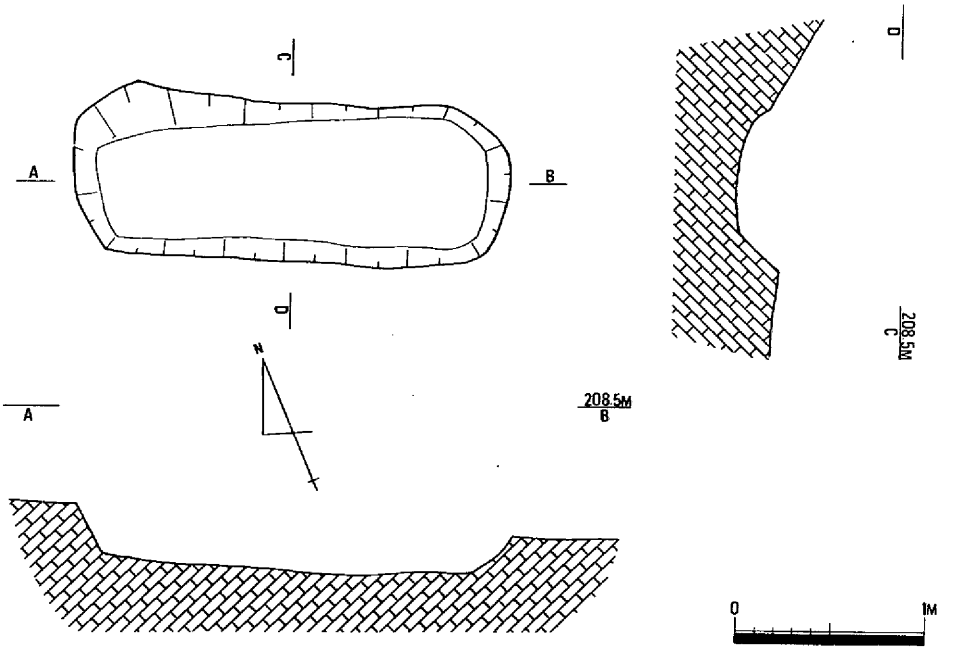
第 30 図　方形台状墓 2 号　第 7 土壙（$\frac{1}{40}$）



第 31 図 方形台状墓 2 号 第 8 土壙（$\frac{1}{40}$）



第32図　方形台状墓2号　第9土壙　$(\frac{1}{40})$



第33図　方形台状墓2号　第10土壙　$(\frac{1}{40})$

南溝は長さ約10m，巾約1.8m，深さ約30cmであり，西北西－東南東に長い。西方はいったん途切れ，あがった上に 1.2 m程の平坦面があり，溝としてはここで終っている。調査対象地西端部の断面観察（第18図）ではNo.11の測量杭から南へ3.6mのところで平坦面が終り，傾斜面になっている。さらにNo.11の杭から6 mのところで盛土状の土も消滅しており，3.6 mから6 mの間で，傾斜面の変更する所が積極的には認められない。このように，南溝は墳丘の東半部にのみ存在する。溝の西方には10～15cmの石が17点と東方に30cm四方の石2点がみられた。また，土器片が2点みられた。（第16図参照）

西溝は今回の調査対象地域外に存在するので伐採をしておらず，正確な記録はとれなかった。しかし地表観察によってNo.11の測量杭から西方へ約5.5mから8 mの間に凹みがあり，それぞれ南北方向へ傾斜する溝状の凹地となっている。おそらく方形台状墓2号の西溝と想定されるものである。

北斜面には溝状，あるいは段状の遺構は存在しなかった。しかし，この斜面では第2土壙墓の北約3.5 mのところで甕形土器が破片で（第46図14）で，また土壙墓No.3の北約3.2 mのところで高坏，台付鉢形土器等の破片（第46図10・11・12）が出土した。

墳丘の規模については前述した。盛土については断面観察からは積極的に言える状況ではないが，土壙墓1～8を確認した平坦面が，東西約14m（調査対象地内だけ），南北約7 mあり，この上に堆積土が30～40cm程あるので，これが方形台状墓1号と同じように盛土の可能性がある。このように墳丘の構造については，視覚的にも低平な墳丘であり，際立った高塚となっていない。

②内部主体

調査区域内において，方形台状墓上の平坦面で同一方向に主軸を有する土壙が8，墳丘裾の南東部から2の合計10の土壙墓が確認できた。墳丘上面には前述のように，表土下30～40cmのところに平坦面が存在し，ほとんどの土壙はこの面を削り出すことにより検出されたものであるが，土層断面の観察によって，これより上部から切込んでいることがわかった。土壙相互の前後関係は断面で明確にとらえることができなかった。一部で掘方埋土と木棺部埋積土の区別がみられた程度である。主体部は10を除きいずれも両方に小口板溝を有するもので掘方が検出されずに小口板溝のみ検出されたものもある。台上部平坦面には東側に1・2・8の3基，西側に3・4・5・6・7の5基の2グループに分離できる。2と7の間もていねいに削り出したが何ら検出できなかった。

第1土壙墓は平面図でみるように北側において側板部分が突出している。他に第3・5土壙墓では床面で側板部分がわずかに溝になっている。また小口板溝部分が二重になっている例（第2・6土壙墓）もあり，いったん小口板溝を掘って，小口板を置いてみたあとの微調整をしたことがうかがえる。土壙掘方内部で，いずれも小口板溝と側板によって囲まれたと想定される内側の床面は平坦面を有している。

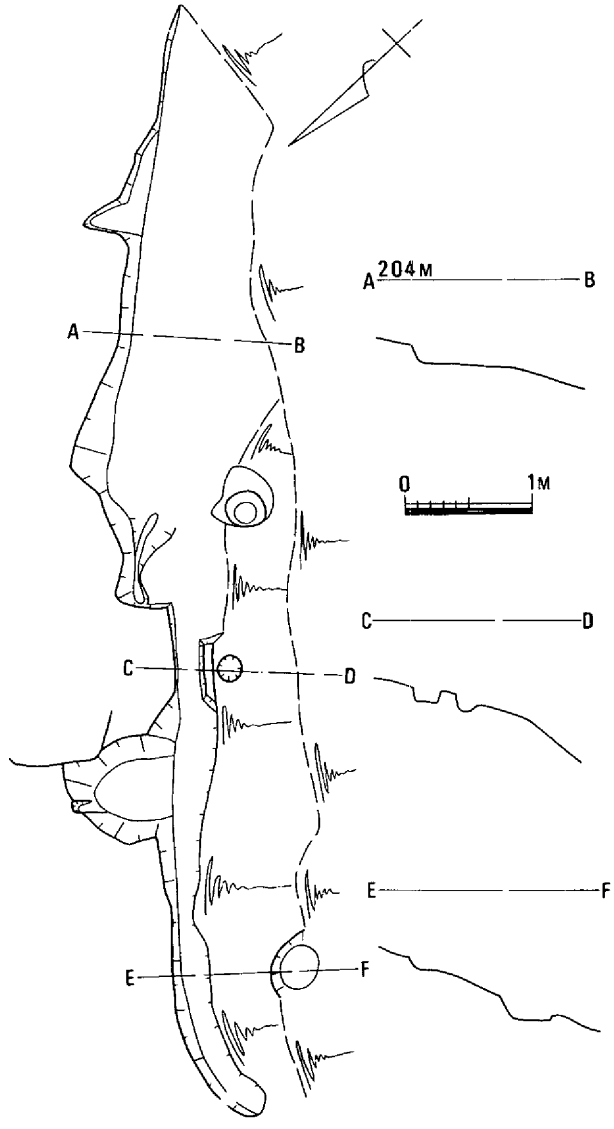
第9・10土壙墓は墳丘外に存在してそれぞれ直交する方角に主軸をむけている。9は小口板溝を伴う。しかし10はまったく小口板溝を伴なわず，床面もやや湾曲しており平坦面ではないことから，あるいは別の時期の可能性もある。

③出土遺物　前述した南溝と北斜面の土器の他に第3土壙墓の北70cmの所から一括出土した破片が

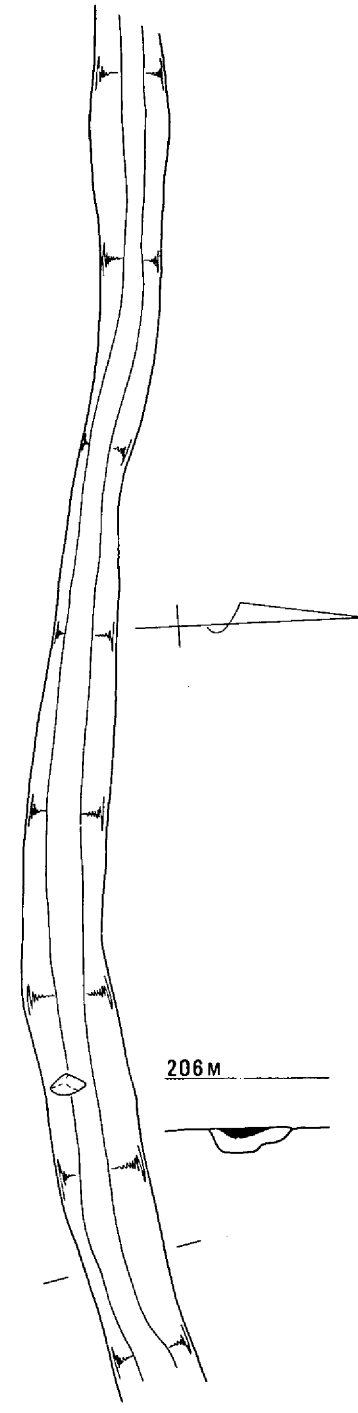
あるが接合復元はできなかった。ただ一片実測できた口縁部は（第46図 12）地表下約30㎝の土壙墓検出面と同じ面から発見されたものである。

(3) 出土遺物（第16・46図）

方形台状墓1号からは，土器片一片だけで時期の決め手になる土器は出土しなかったが，方形台状墓2号からは4ケ所から出土した。10は高坏坏部破片，復元形には若干無理があるかも知れないが内外面とも，ていねいにヘラ磨きが施こされている。赤褐色

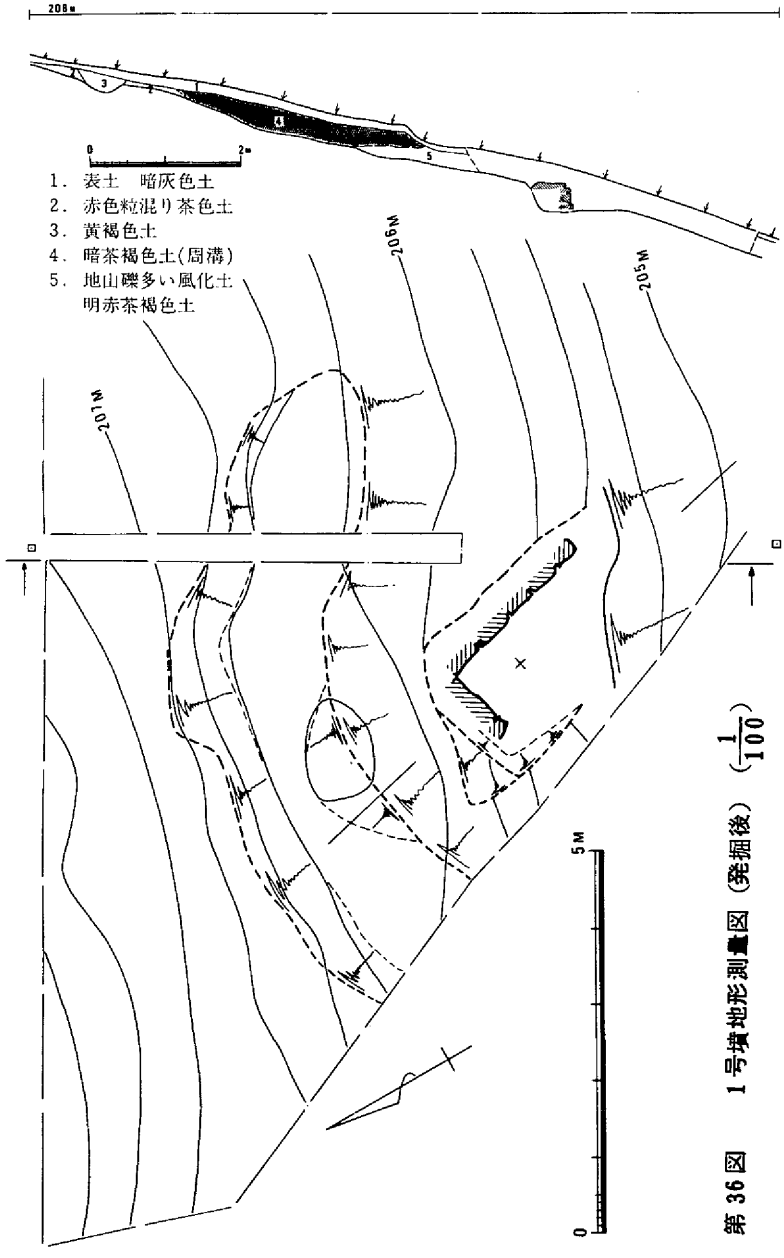


第34図 段状遺構実測図（$\frac{1}{60}$）



第35図 溝実測図（$\frac{1}{60}$）

を呈しキメの細かい肌をしており外面縦位のヘラ磨き調整したあと櫛描直線文を数段施こし，その間に貫通しない円形竹管を縦に刺突させている，内面ヘラ削りが顕著である。12は甕の口縁部，赤褐色で風化がはげしい。外反した口縁部がわずかに厚みを増している。13は算盤玉形の胴部をもつ長頸壷の胴部破片で，胴径約17㎝，稜線の直上に4本の凹線文をもち，さらにその上に，浅い円形竹管刺突文が部分的に施こされている。内面は刷毛目整形されている。赤褐色，やや軟質であるが，作り方はていねいである。14は図上で復元した甕形土器，器高約20.5㎝，口径13.5㎝，口縁端部が上下に拡張する。剥離のため凹線文の有無は観察できない。淡褐色～暗茶褐色で，外面下部は軽くヘラで平滑に仕上げている。弥生時代後期前半頃と考えられる。



第36図　1号墳地形測量図（発掘後）（$\frac{1}{100}$）

第5節　溝状遺構

B・C7区に検出された東西方向に長い溝で東端部は崖により切れており西端部は浅くなっているため検出されなかった。巾37㎝～約70㎝で深さ20㎝を計る。土器片は検出されなかったが，埋土は方形台状墓1号東溝でみられた黒色土と対比させた感じからは弥生時代のものと推定される。

第6節　段状遺構

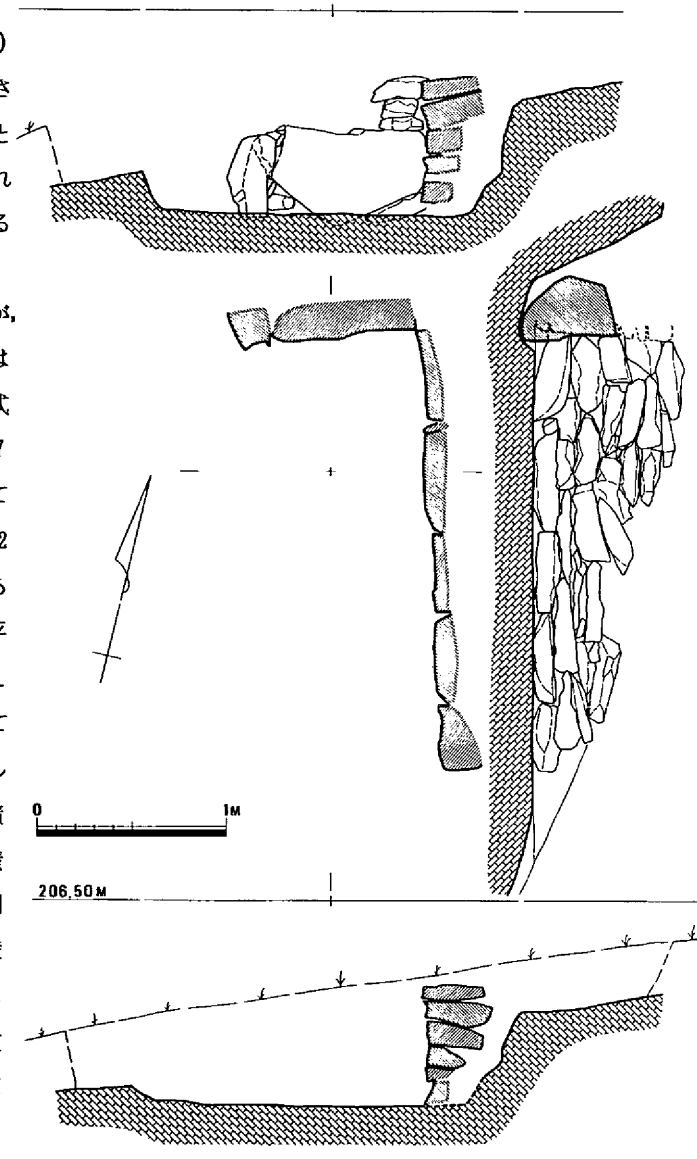
D6・7区土壙墓群の西南に接して検出されたもので延長8.9ｍ，長軸は等高線に平行する。（第34図），東南側に約5ｍの

壁がありいったんくびれて西北方向には浅い溝が存在する。これは別個の遺構とも考えられる。柱穴も3本検出されたがどのような組合せか不明である。全体に削平が大きいため遺構の性格について言及しがたい。

第7節 古　　墳

(1) 下道山古墳1号墳（第36・37図）

D10，11区の南向き斜面に検出された円墳で横穴式石室を内部主体とする。発掘前には墳丘はみとめられず，発掘中に発見されたものである周溝は巾約2 mで山側に認められ，西方は調査対象地外にのびているが，馬蹄形を呈している。復元墳丘径は約7 mとなる小円墳である。横穴式石室は巾約2.1 m，長さ3.4 m，深さ67 cmの長方形の掘方の中に構築されている。石室現存長2.34 m，奥壁巾92 cm，石室主軸方位はN－13°－Wである。奥壁は平石を横に立てて最大平面を内側に向け，上面を水平に据えるため下に尖った部分を掘り凹めている。さらに西側に石を立てて足している。側壁の東側残存部は横口積で一見古式古墳の竪穴式石室状の積み方をしている。なお玄門および閉塞施設等は検出されなかった。奥壁の大きい石とつめ石の一部に地山に露頭のある千枚岩を利用，他は流紋岩㊟を利用している。石室内部は床面まで撹乱され，撹乱土中より須恵器片（第49図1・2）が発見されただけである。

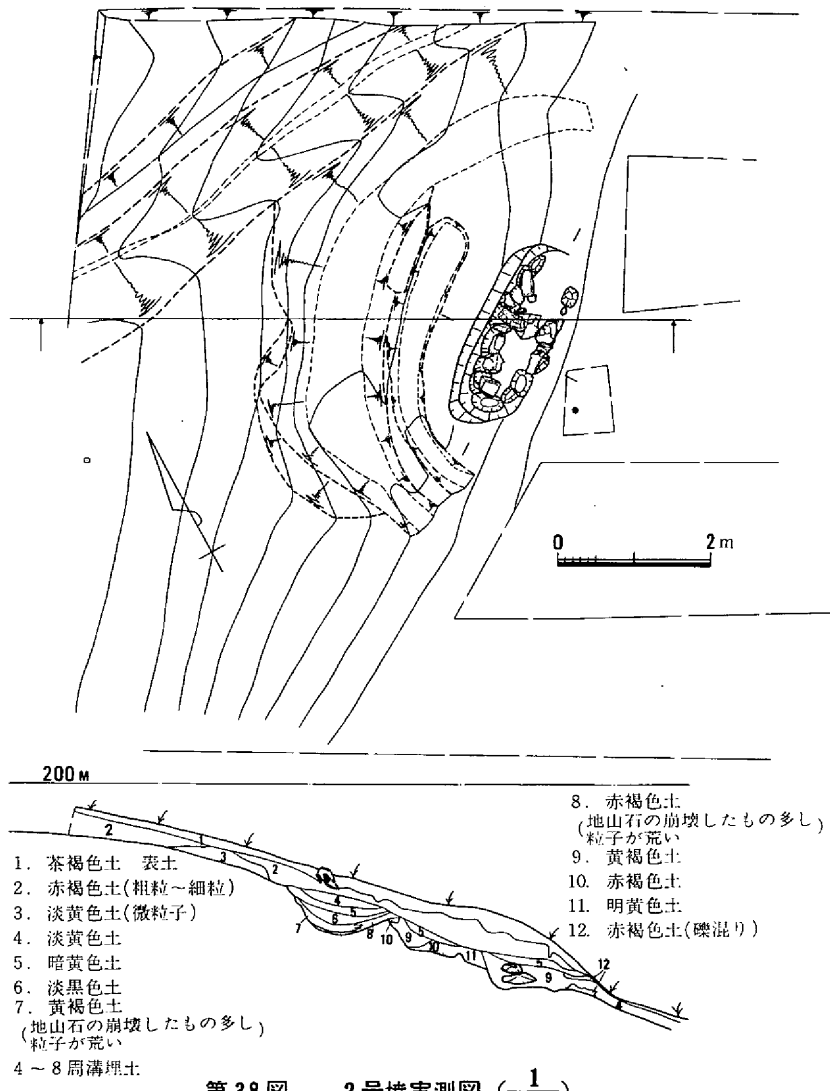


第37図　1号墳石室実測図（$\frac{1}{40}$）

㊟ 佐良山古墳群をはじめ津山市内後期古墳の石材として多く利用されている石材である。
「佐良山古墳群の研究」P13注6
「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6」，「二宮大成遺跡」P88

(2) 下道山古墳2号墳(第38・39図)

D，E3区に検出されたもので東南むき斜面に主体部の主軸を等高線にほぼ平行させて構築し，山側に半円形に溝をめぐらしたもので本来は直径1.4 m，高0.6 mの小円墳であろう。これは二宮大成古墳で検出された内側溝㊟と同類のものと思考される。



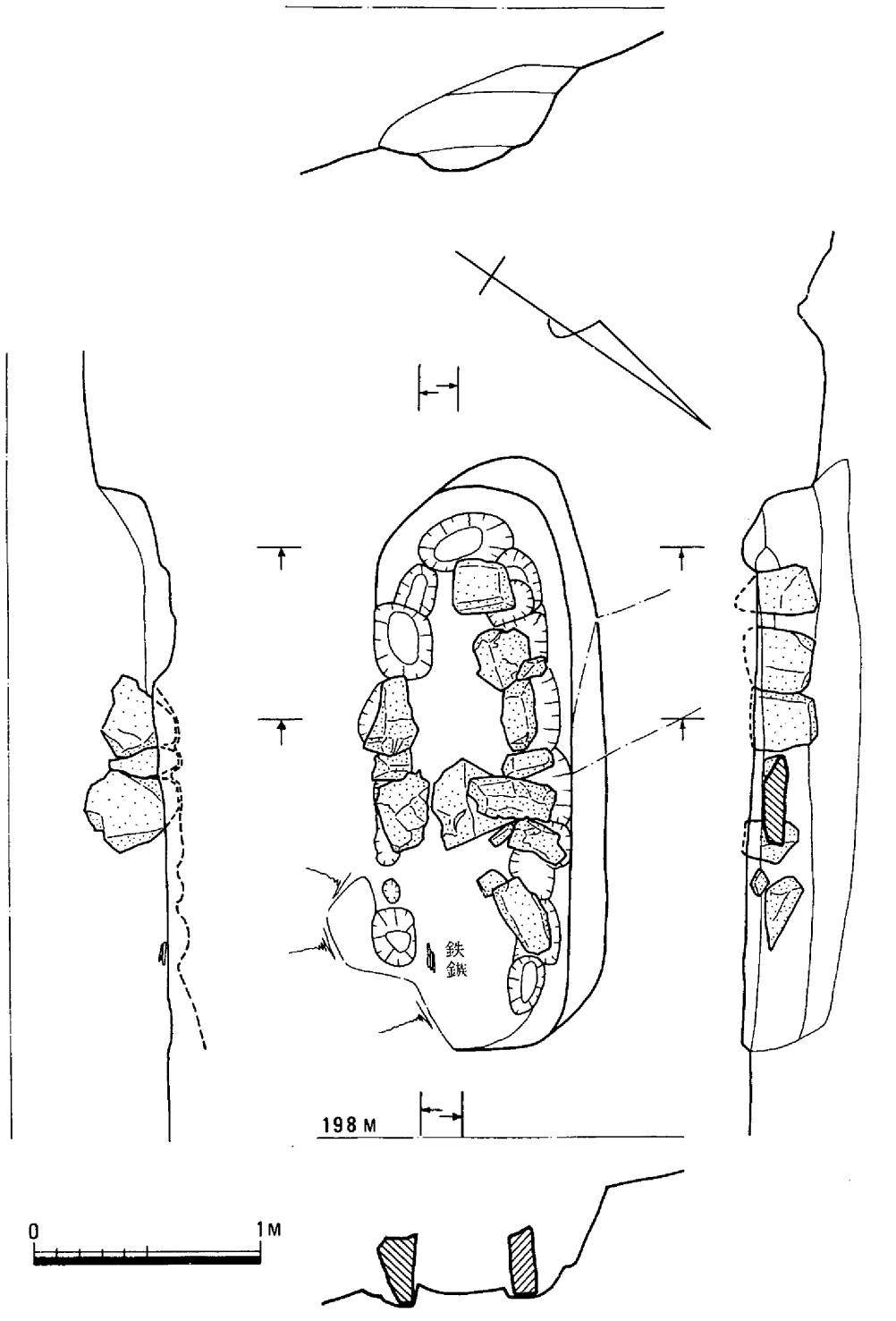
第38図　2号墳実測図 $\left(\frac{1}{100}\right)$

内部主体　内部主体は長約2.5 m，巾1.1 m，掘り方の中に箱式石棺を構築したものである。撹乱のため大部分の石材は原位置にないが，板石基部を埋め込むための掘方を検出したことにより西北壁は8枚の板石，東南壁は7枚以上の板石をもって構築されたとみられる。小口部分はそれぞれ1枚づつと考えられるが，東北部では掘方痕跡は検出されなかった。石棺の内径巾45 cm，長さ約1.9 m，主軸方位N－54.5° E－出土遺物は(第49図右下1・1～3)石棺内撹乱土から須恵器片数点，北東部床面から3点の鉄鏃が発見された。

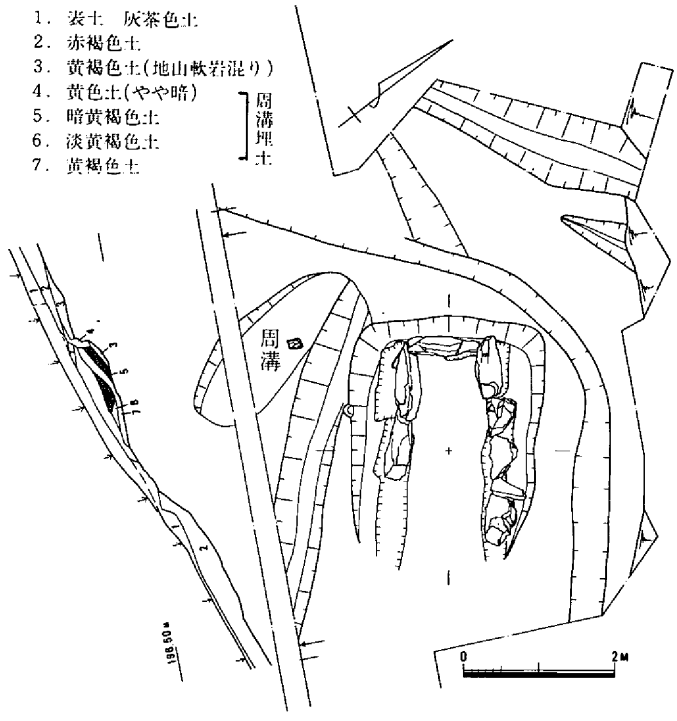
㊟ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6)「二宮大成遺跡」P83墳丘の項

(3) 下道山古墳3号墳(第40，41，42，49図)

C2区においてトレンチ調査により発見された横穴式石室で東南向きの斜面に位置し，等高線に

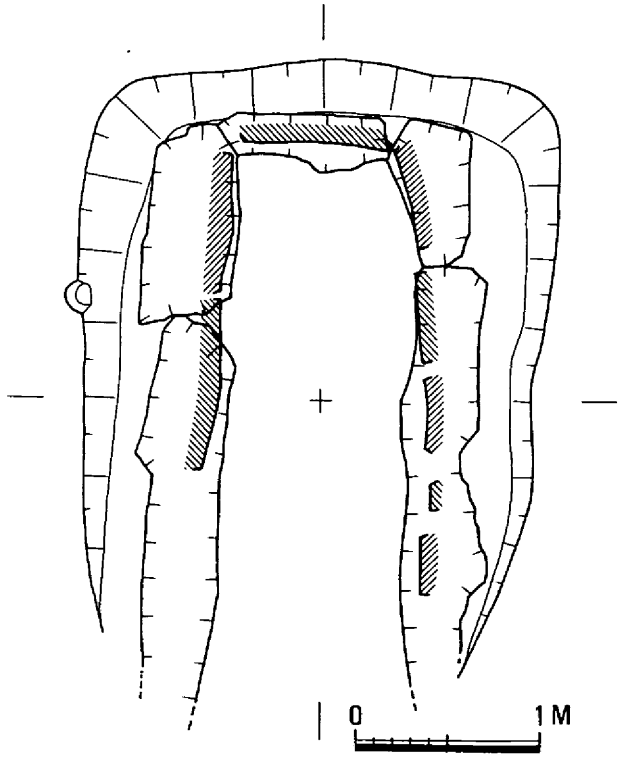


第 39 図　　2 号墳主体部実測図（$\frac{1}{30}$）



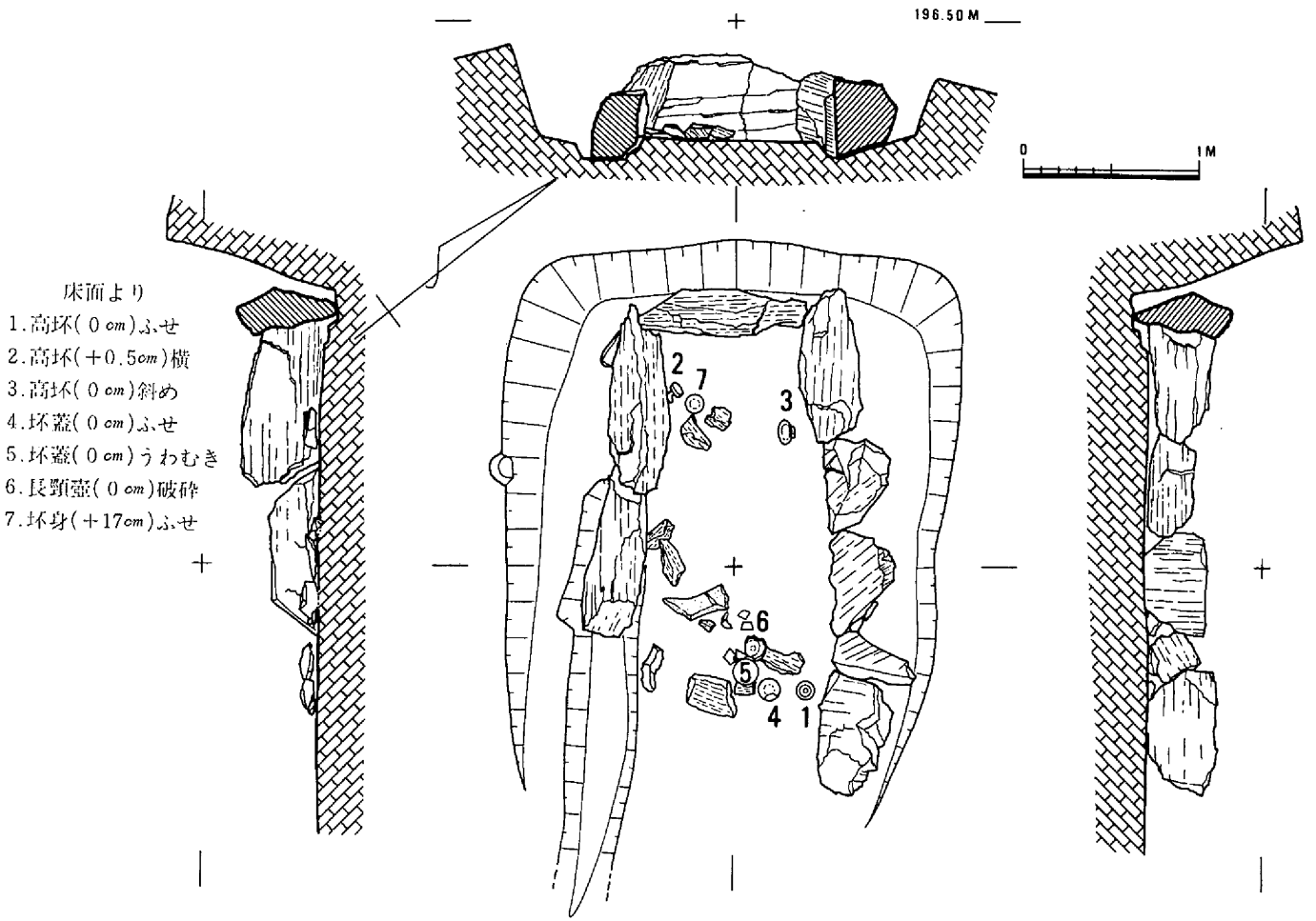
第 40 図

3 号墳実測図 $(\frac{1}{100})$



第 41 図

3 号墳掘方実測図 $(\frac{1}{40})$



第42図　3号墳石室実測図 $(\frac{1}{40})$

ほぼ直角方向に主軸をもつ古墳である。

周溝の一部が石室掘方の西南部にわずかだが検出されたのでおそらく山側にのみ馬蹄形に掘られていたと推定される。横穴式石室は巾2.62m，長 3.2 m，深0.85mの掘方の中に構築されている。最下段の石室奥部の石材が残存しているだけで，他は破砕された石材の小片が撹乱土の中にみられるので，石材使用を目的として掘られたことがあるようだ。石室現存長 2.6 m，奥壁巾 1 m，玄室最大巾 1.2 m，主軸方位はN－ 53°－Wである。奥壁，側壁とも長方形平石の最大平面を石室内側に向け，上面を水平にするため下部は石材に合わせて地山を掘込んでいる。東北壁の奥から4番目の石はツメ石を兼ねて小口を石室内部に向けた石を使用している。玄門および閉塞施設は検出されなかった。石材はすべて千枚石を使用しており1号墳と対象的である。

遺物の出土状態は，周溝部分では何もなく，石室内部から須恵器が発見された。第49図7は平安期に比定される坏身で床面から約17cm上にあったが他の須恵器は床面にほぼ接していた。1の高坏が伏せて直立して置かれていた。2・3は上むきに直立して置かれたものがやや傾むいて出土した。この3点はいずれも壁の近くにある。4は伏せて，5は上向きに置かれて，6の壺は破砕され破片が飛びちっていた。床面には須恵器の他には小石が見られるので，あるいは棺台の可能性もあるが不規則である。

(4) 出土遺物（第49図）

1号墳出土破片のうち計測できた2点を紹介する。1は口径 11.6 cm，高3.6cmの須恵器の坏蓋。暗青色，焼成良好，上部は平坦面となっており，ヘラ削りされている。7世紀前半と思われる。2は底部糸切り底の須恵器皿である。全体に薄い作りで口唇部外面に凹線がみられヨコナデ整形している。古墳よりかなり後のものであろう。

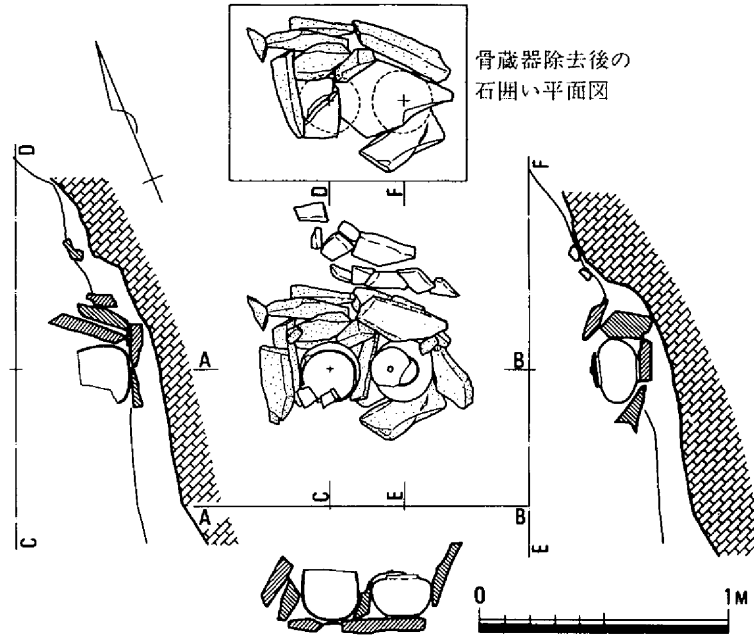
2号墳からは須恵器数片と，鉄鏃3本が検出された。須恵器は坏身の受部から立上りへかけての屈折部破片で，正確な図化は無理だが，直径13cm直後と考えられる。暗灰色，焼成良好，鉄鏃は破片となっているが3本あった。尖根片丸棘箆被形式である。

3号墳から7点の須恵器が出土した。7は上層であり，灯明皿として使用痕があり後から石室内に入り込んだものである。1は高さ7.05cm，口径10.9 cm，青灰色，2は高さ8.1cm，口径10.2 cm，灰色で坏部がひずんでいる。3は高さ(7.9cm)，口径 11.3 cm，灰白色を呈す。無蓋高坏である。坏部の口縁は外傾が著しく脚部も短いが脚部末端はやや肥厚し，くせをもつ。4は高さ4.5cm，口径 11.6 cm，灰白色。5は高さ3.6cm，口径11.8 cm，灰黒色，生焼けで軟質である。いずれも天井部ヘラ削り（ヘラ起し）で他はヨコナデ。6は長頸壺の体部でひずみがみられる。肩に稜線がみられ，高台は貼り付けやや高く外へふん張る。灰白色でやや軟質，小さな黒色斑点がみられる。7は口径 13.2 cm，高さ4.1 cm，灰白色軟質，底部ヘラ起しの坏身で口縁は大きく外反する。内面に黒色の緋襷がみられ重ね焼きの時，ワラを使用し付着を防いだとみられる。また口唇部には2ケ所，三角形に煤の付着があり，灯明皿に利用したと推考される。1～6は7世紀前半頃。7は奈良末～平安初頭頃と思われる。

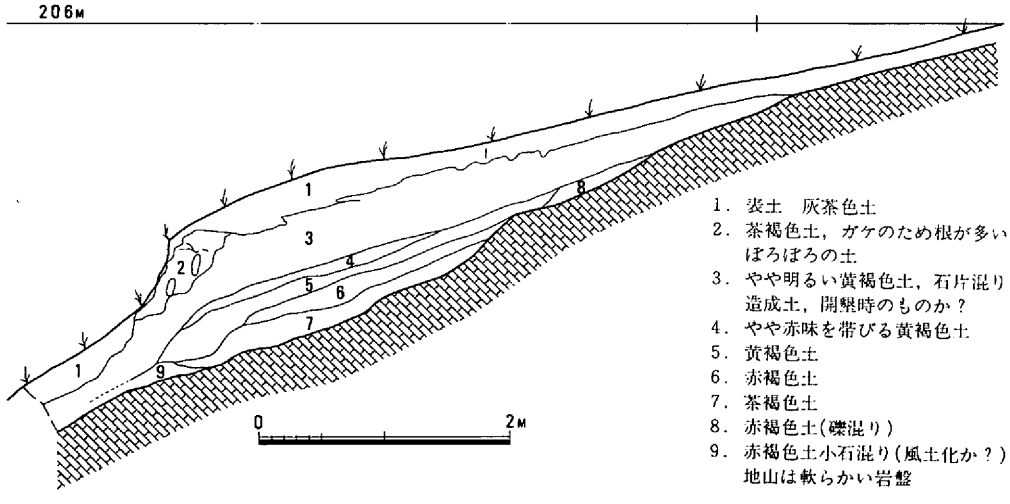
第8節　火 葬 墓（第43・44図）

方形台状墓1号のD9区南斜面で発見された。丘陵平坦面から急斜面へさがっていく変換点であり，また南に開折された谷の始まる場所でもある。このような出土状況は，津山市押入西遺跡の骨蔵器㊀と似るものといえよう。

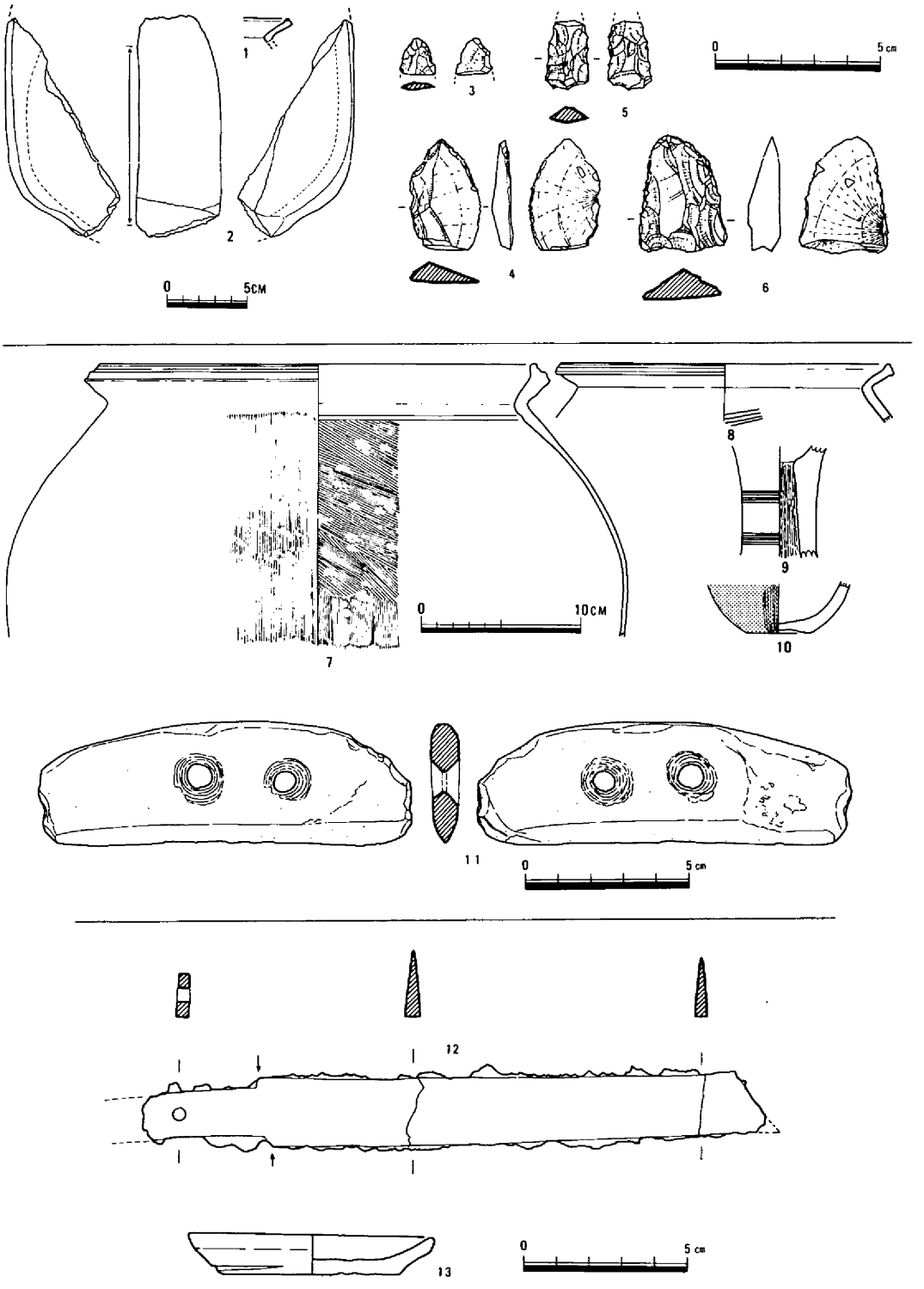
須恵器の蓋付骨蔵器が東側，土師器の骨蔵器は西側に並んでおり，この2個の主軸をとれば等高線とほぼ平行している。2個の骨蔵器を囲むように，長さ約53m，巾約30cmの長方形の石囲いが千枚岩（地山の岩盤でもある）によって作られている。石囲いの南側は検出された石材が少ない。これは最初から作らなかったのか，あるいは須恵器骨蔵器の蓋や土師器骨蔵器の南半部が壊れていることから破壊された可能性もあるだろう。



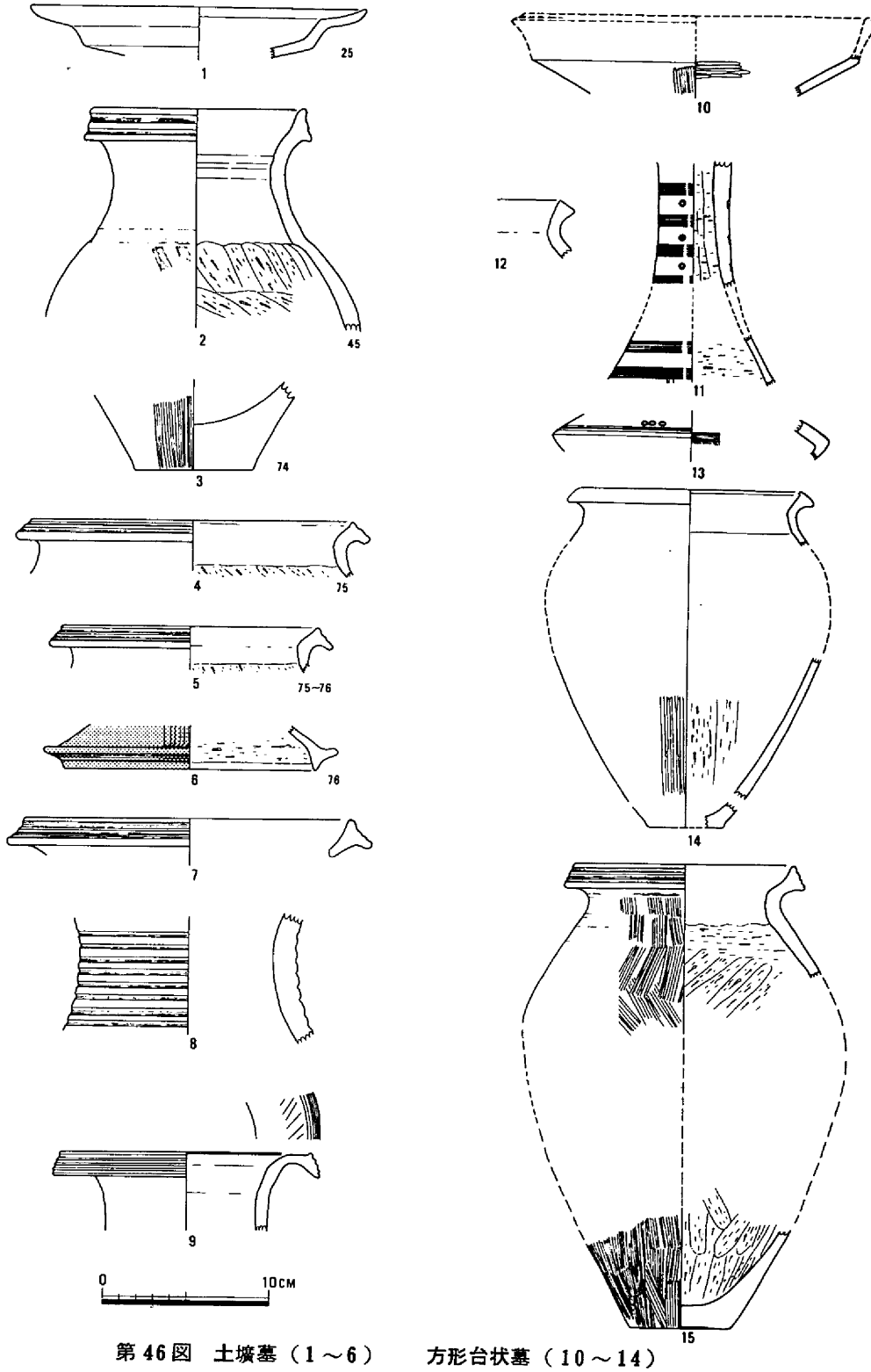
第43図　火葬墓実測図（$\frac{1}{30}$）　水糸L＝204m



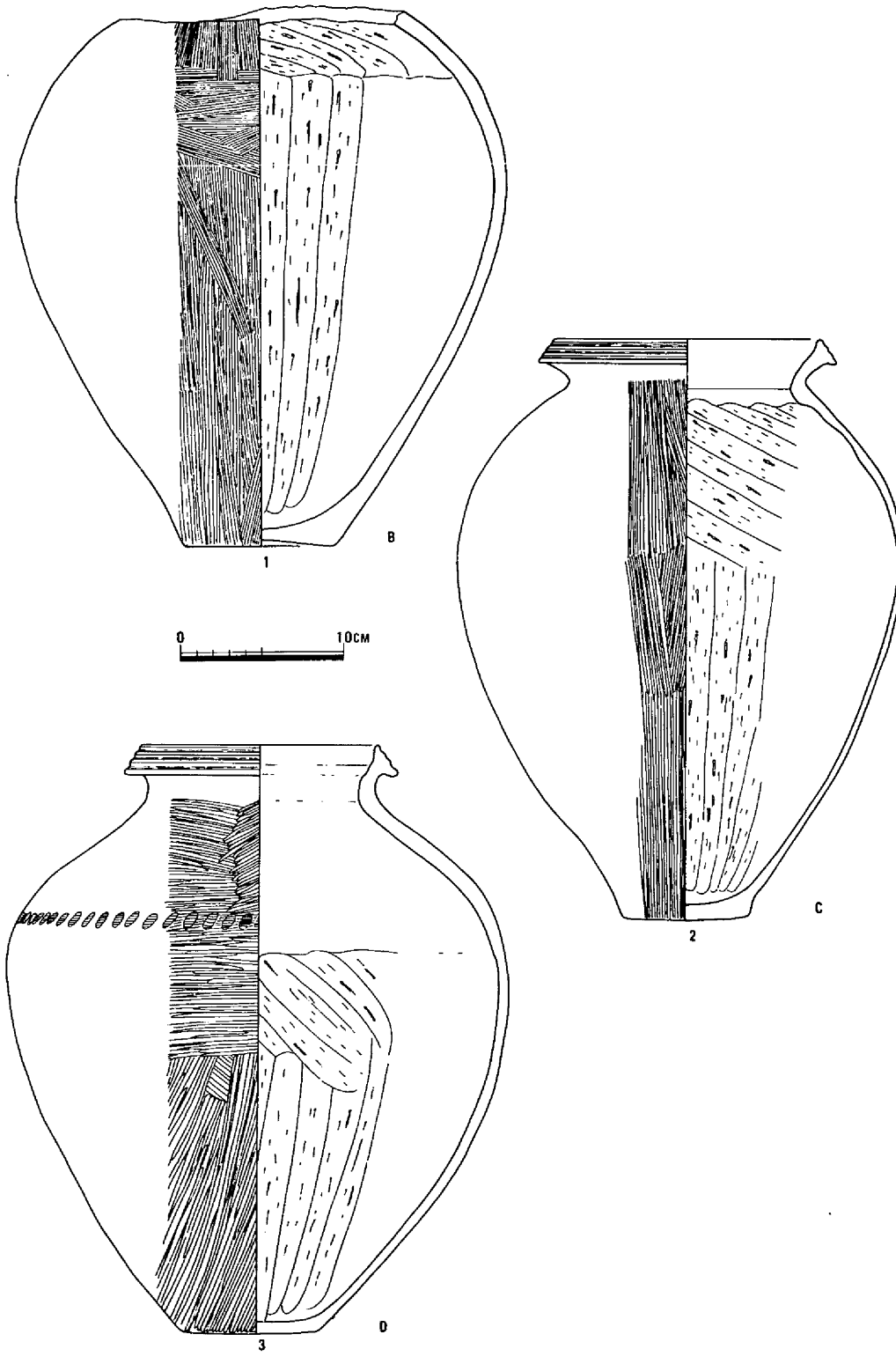
第44図　C～D8区　東壁土層断面図



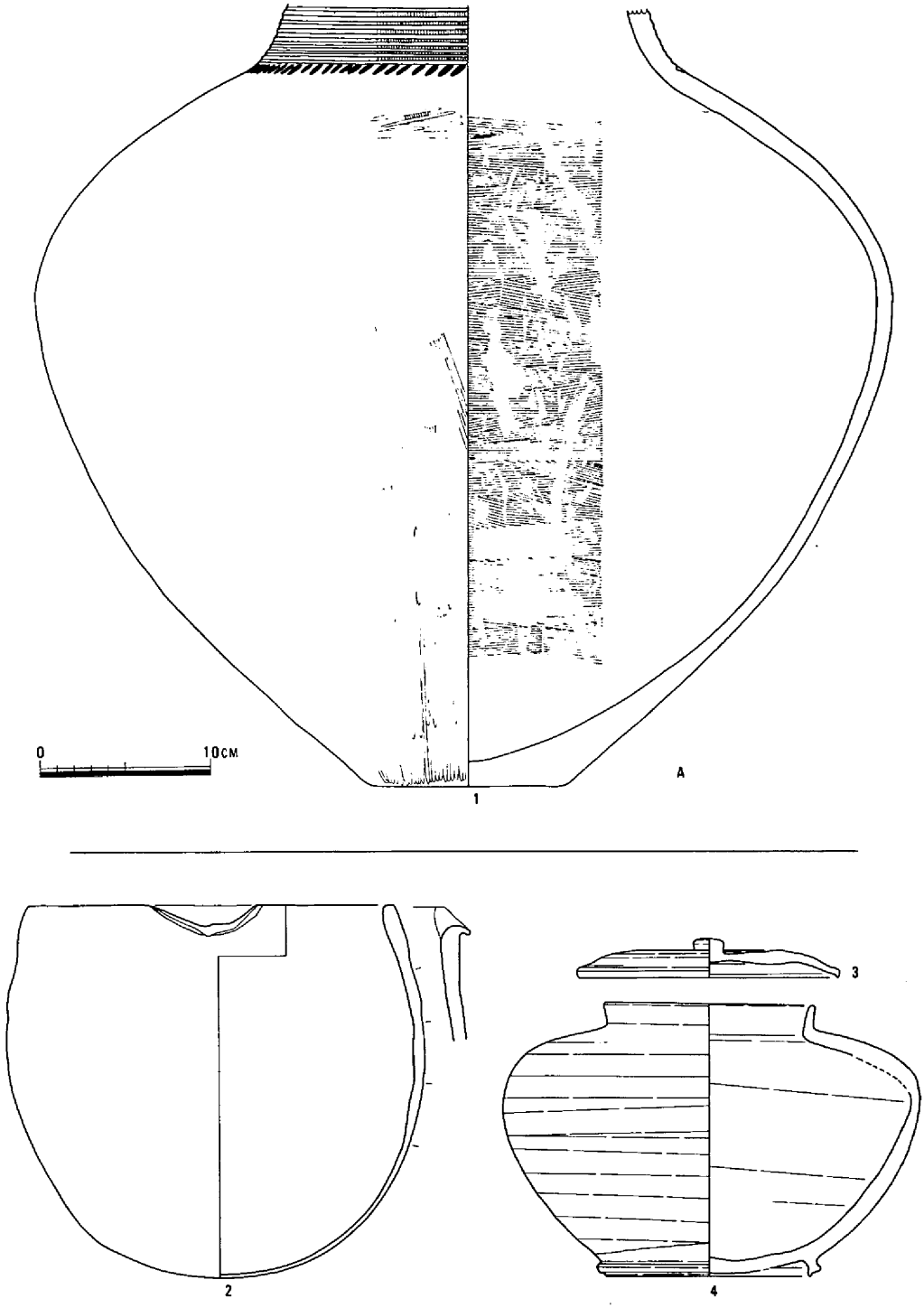
第45図　2号住居址（1～4）　3号住居址（7～11）　土壙65（12～13）
D 3区出土(5)　D 8 表土はぎ(6)



第46図　土壙墓（1～6）　方形台状墓（10～14）
D 2区（15）　その他（7～9）



第 47 図　　土器棺，土器実測図



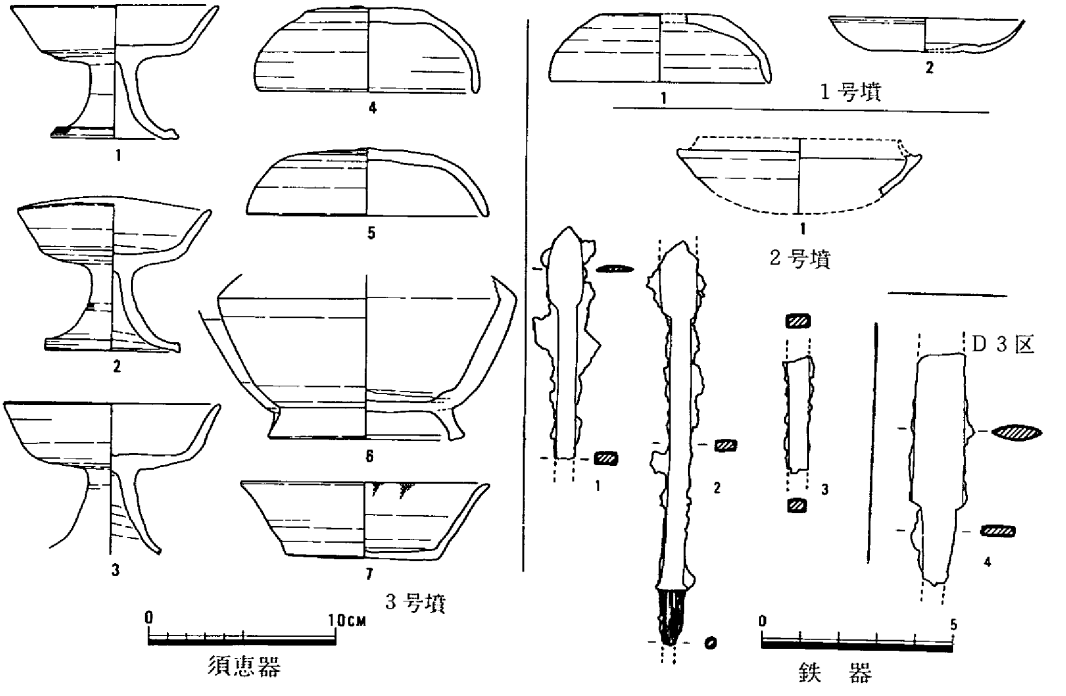
第 48 図　　土器棺・骨蔵器実測図

また，石囲いの設置の方法については，掘方＝土壙を正確に確認することができなかったが，山側(北)では地山を掘り下げたような痕跡がみられたことから，地山をあまり切り込まない掘方の存在が考えられる。石囲いは底石の上に重なっている部分がある。また骨蔵器にほぼ接して囲っており，2個の骨蔵器の間にも石を置き，北側と西側は2重に重ねて囲っているなどから，骨蔵器を底石の上に置いてから石囲いした可能性がある。いずれにしても簡略な作り方である。蓋石または標式になるものは検出されなかった。2個の骨蔵器内部には歯を含まない少量の骨片が検出された。一部黒色を呈するものがあり火葬骨であることがうかがえる。頭骨のカーブが小さく肋骨など骨格の大きさから小児骨であるだろうとの示唆を得た。

出土遺物（第48図－2・3・4）

2は土師質，暗茶褐色で軟質，片口付の深い甕状のもので，類似する器形は知見にない。高さ21.8 cm直径24.5 cm，口径21.5 cmで口縁の方がややすぼまり，底部は球形である。口縁部がやや厚く，上から4段粘土紐の継ぎ目のくびれ部がみえ，底部にかけて薄手に仕上げている。内外面共観察しにくいが，刷毛目整形の痕跡もみられるようである。3は薬壷形壷の蓋に転用されていた須恵器坏蓋である。口径15.4 cm，高さ2.3cm，頂部が平坦な宝珠つまみを有し，上面はヘラ削り，他はヨコナデ調整している。青灰色で焼成良好。4は須恵器薬壷形壷，器高16.5 cm，胴径24.7 cm，灰色で焼成良好やや肩のはる形で，口縁部は短くやや外傾する。底部は丸味をもっており，高台は短く外方へふんばっている。外面ヘラ削りは底部から肩まで及んでいるが，内面から肩の下までヨコナデ整形されている。

口縁部の外側，肩の上面に直径14.2 cmの蓋が融着した痕跡があり，焼成時に蓋をかぶせていたと推



第49図　古墳出土遺物実測図

考される。奈良末～平安初頭頃と思われる。

第 9 節　その他の土壙・出土遺物

方形台状墓の周囲や東方土壙墓群の間から，弥生時代の土壙墓より新しい時期の土壙が検出された。

(1) 方形台状墓の周囲（第16図）

方形台状墓 1 号と 2 号の溝の中間に 2 基・（新 1 ・ 2 ）方形台状墓 1 号西溝の南へ2.5 m離れて 1 基（新 3 ）方形台状墓 1 号東溝中に 1 基（新 4 ）の合計 4 基が確認された。個々の規模については表を参照されたい。新 1 はやや長方形の土壙で底部は水平でなく丸味をもつている。近世以降の瓦片が一点出土した。新 2 は正方形の掘方をもち，底部はさらに円形で丸味をもっている。新 3 は楕円形の土壙で上部に焼土の層がみられた。近 4 は方形台状墓 1 号東溝の埋積土を切って作られている。（第20図右端）第10層から室町以降の備前焼陶片が出土していることから，これより新しい時期につくられたものである。

(2) 東方土壙墓群（第18図）

東方土壙墓群中の65・112・118 の 3 基が新しいものと思われる。65は残存部が非常に浅いが，土師器小皿・刀子（第45図 12・13）が出土した。13は直径7.6 cm，高1.3 cm淡赤褐色の土師器小皿である。底部はヘラ起し痕が明瞭についており，上面からみた土器の回転方向は左である。12は現存長 192 cmの小形の直刀形を呈している刀子である。かます切先で鎬をもたない。関の位置は少しずれているが両関で，茎の断面は長方形で一部欠損しているが直径3.5 mmの目釘穴が 1 つ残っている。

112は不定形の大きな土壙で20～30 cmの石が 3 点あった。 118は長方形の土壙で深く，埋土は地山千枚岩の大きな割れと共に，瓦片が出土した。

前述のように 7 基の土壙が新しいものとみられる。65の土師器小皿の底部ヘラ起しと同様な例は落合町赤野遺跡ピット出土のものがある。

㊟ ヘラ起し技法の変遷について必ずしも明確ではなく，土師器小皿のみで，細分された時期を決定しかねるが中世の範疇に入るだろう。

岡山県埋蔵文化財報告 3，中国縦貫道建設に伴う発掘調査 1，「赤野遺跡」

他の土壙の特徴は壁面が垂直ではなくやや傾斜していることや，底部に平坦面を有さず丸味をもっていること，埋土の土質の違いなどが弥生時代の土壙墓と識別できる点である。時期は出土した瓦が表面黒色を帯びた瓦質のもので少なくとも中世以降～近世～近代と考えられる。

(3) その他の出土遺物

小形剣状鉄器（第49図右下－ 4 ）はトレンチ発掘中に，Ｄ 3 区から出土したもので，現存長6.2 cm刃部巾1.3 cm，厚さ0.4 cm，両丸形式の刃部をもち，両関を有し，茎は断面長方形である。直接関係する遺構はわからないが，古墳時代でも古式のものと思われる。

にわとり形土製品（図版16－12）図化しなかったが，高さ4.6 cm，長さ 4 cm，巾2.2 cmの小さなもので 2 つの型を合せて作った合せ目が観察される所から，型造りと思われる。黄褐色に焼成されており，近世に流行した小児玩具の一種と想定される。㊟

㊟ 勝田郡勝央町「小中遺跡」1区No.53土壙から，副葬品として人形・鯉土鈴等が出土している。
「小中遺跡」P 79，『岡山県埋蔵文化財報告』(7)，1975.3，岡山県教育委員会

第10節 小　　結

今回の調査では，当初予想された弥生時代の墳墓群以外に，弥生時代中期住居址，横穴式石室の古墳，火葬墓やその他の土壙など，各時期の遺構が検出され，あらためて遺跡のとらえかたについて考えさせられた。

下道山遺跡の発掘地点から，2基の方形台状墓と,123基の土壙墓群が検出された。これらからの出土遺物により，両者共弥生時代後期前半頃に形成されたものと考えられる。方形台状墓に埋葬された人々と，土壙墓群に埋葬された人々の間に格差がうかがえる。土壙墓群はA～Qの17グループに分類された。これは成人用と考えられる大形の土壙墓と，小児用と考えられる小形の土壙墓や土器棺を伴なうことから，グループ＝家族共同体という単位としてとらえられるのではなかろうか。グループ相互としては特定格差はみられない。一方，方形台状墓に埋葬された一群は，小児埋葬を伴なわない点や，特定個人の単独埋葬ではないので，家族という単位や，特定支配者の墓ともいえない。一定の墓域を溝と墳丘で区画されたこのグループには，一部供献土器がみられるが，その他特に副葬品はみあたらない。今回未発掘の西方にはさらに2基？の方形台状墓が予想されるし,西端の一番高い部分からは，多くの供献土器が発見されている。㊟1しかし出土遺物の時期は弥生時代終末期頃のものと考えられる。その時期に構築されたものなのか，追加供献であったのか一概にはいえないが，特殊器台形土器を含む供献土器群がみられ，下道山遺跡（墳墓群）の中では最も有力な被葬者であったと予想される。それでは一体方形台状墓の被葬者の性格は何であろう。家族という単位ではない集団の支配者層もしくは指導者なのか。あるいは特定の使命を帯びた人々（戦士？）か，西方の遺構の全容が明らかにされるまでは把握しがたい。

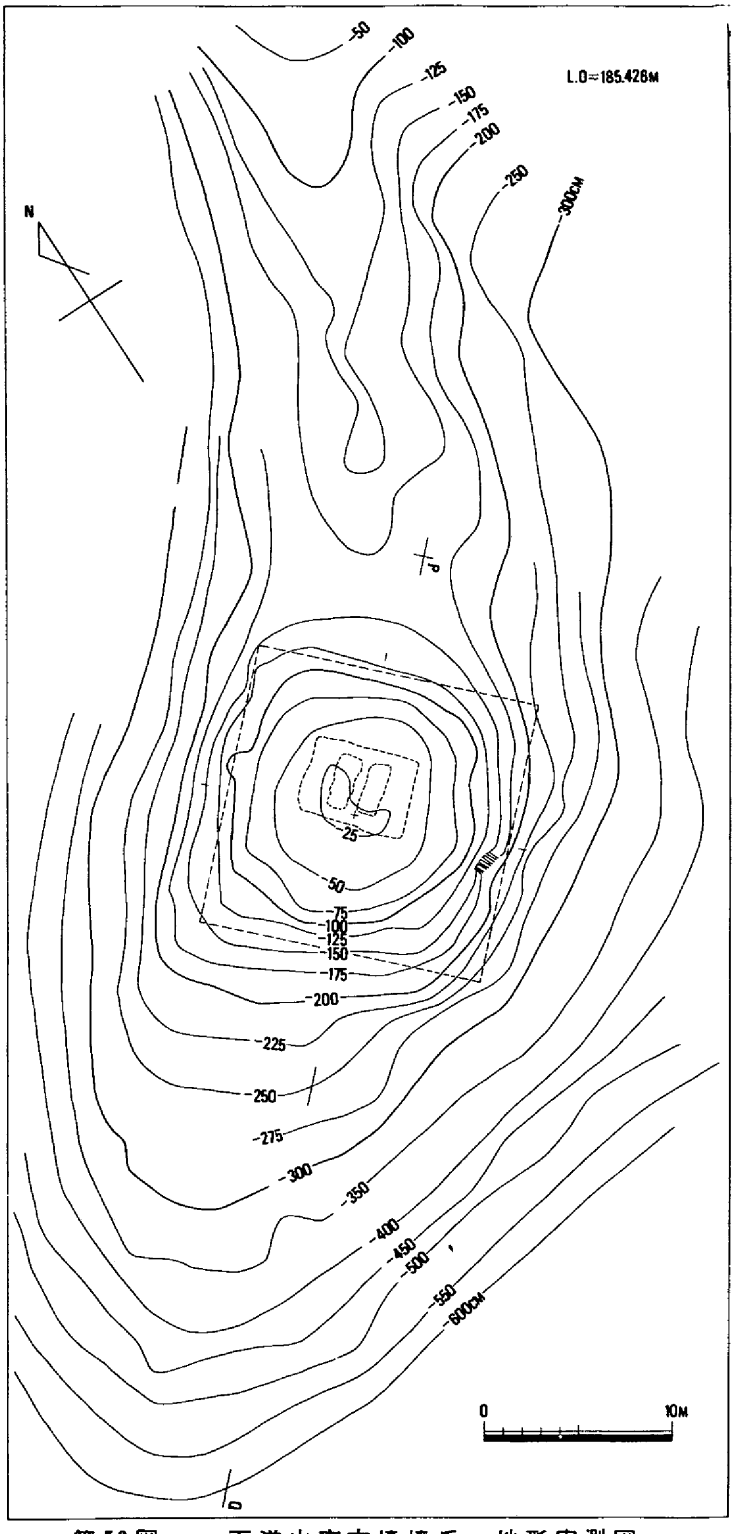
下道山遺跡周辺には，また他に権現山遺跡（消滅）㊟2.大平遺跡など（第2図），わずか百数十メートルしか離れていない地点にも土壙墓群があり，他の枝尾根上にも土壙墓群が予想されている。また津山市交通公園予定地㊟3.から弥生時代後期の住居址や貯蔵穴群が発見されており，この地域における集落と墓地からみた共同体の変遷過程について論ずることもできるようになるだろう。

この遺跡はとりあえず，地権者の御理解をいただいて破壊はまぬがれた。しかし史跡指定というような積極的な保護処置まで進んでおらず，今後共，関係者の協議・努力が必要と思われる。

注1. 御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21・22合併号』昭和34年11月

注2. 河本清氏の教示による。昭和51年から52年に墓地造成地部分など一部調査。一部保存したが，大半は土取りにより消滅した。

注3. 湊哲夫氏の教示による。昭和51年トレンチ調査。（総社 内山(うちやま)遺跡）



第50図　下道山南古墳墳丘・地形実測図

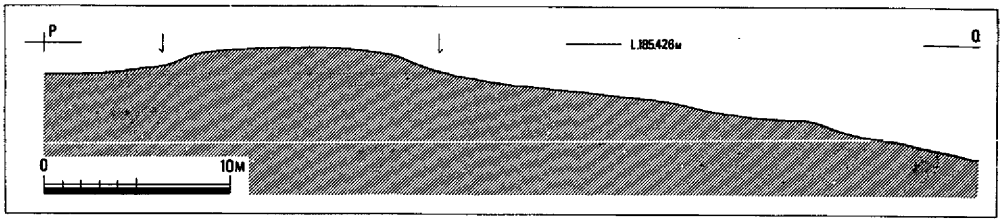
第 4 章
下道山南古墳

第1節　立地・外形

（図版17・第1・2・50・51図）

下道山遺跡の所在する丘陵頂部から東へ伸びた尾根は，さらに南東方向と南方向に分岐する。その南へ分岐した尾根の頂端部に下道山南古墳はある。古墳は尾根の平坦部いっぱいに築造されており，古墳周囲は急斜面となっている。下道山南古墳からの眺望は，北と西は神楽尾山丘陵によって遮られているが，東と南は大きくひらけ，那岐山から作（さく）北（ほく）の丘陵，そして遠く因幡・播磨の山並が望め，津山市街を一望のもとにすることができる。美作国府跡は眼下にある。きわめて見張らしの良い地を占めている。下道山南古墳の最高点は海抜 185.2 mを測り，この尾根の平地からの比高差は約80 mである。なお下道山南古墳の行政上の地番は津山市総社191 番地である。

下道山南古墳は地形測量時点では若干の果樹が栽培されていたにすぎず，畑地としての開墾をあまりうけておらず，



第51図　　下道山南古墳地形断面図

かなり良好な状態で保存されていた。したがって墳丘としての高まりは草木の伐採によって明確に認めることができた。しかし封土の流出はそれが盛土であったためかかなりの量にのぼり，墳丘は低平な感じを受けるものであった。墳形は『岡山県遺跡地図』第一分冊では円墳とされていたが，地形測量図（第50図）によれば，東と南の角はかなり丸味をもっていたが，北と西の角がよく旧状を留めており，等高線も北東辺・北西辺・南西辺が直線的になり，この時点で方墳と判断することができた。またその規模も傾斜変換点から北東辺は－150 *cm*の等高線付近，南西辺は－200 *cm*の等高線付近であろうと考え，一辺約20 *m*と推定した。測量時点では前述のように墳丘に大きな損傷は認められなかったが，南東辺に一カ所抉られた場所があり，また墳頂部は過去に石棺の抜き取りが行なわれたため若干の凹みがみられた。なお墳端の北側尾根筋にはやや広い平坦部があり周溝の存在も考えられた。

第2節　調査方法

下道山南古墳の調査は昭和50年度と51年度の2次の調査が行なわれた。

第1次調査は，古墳の南角と周辺が果樹園の造成によって破壊・削平されるため，墳端の確認と外部施設の有無を知ることを主な目的として行なった。消滅するものであるため古墳削平部分については全面発掘を行ない，また前記の目的のため古墳主軸（第52図X－W・Y－Z軸）に沿いトレンチを各辺墳端部に1本計4本を設定した。トレンチは地山岩盤まで掘り下げた。

第2次調査は，古墳の消滅が前提であったため全面発掘を行なった。表土除去後石棺抜き取り壙を掘り上げ，次に墓壙検出面まで墳頂を水平に下げていった。墓壙検出後は壙内を掘り上げ，次に各主体を主軸に従がって畦を残しつつ各主体墓壙内を掘り上げた。ところがこの頃地権者が当古墳を保存する意向を示されたため，第2主体については石棺を抜き取らずに現位置のまま埋葬を再現して埋め戻し，第1主体については墓壙内の粘土を一部残した状態で埋め戻した。最後に墳丘の断割に取りかかったが，保存されることとなったため，主軸に沿って土層観察用のトレンチを掘るに止め，葺石部分については断割を避け，また掘り下げも弥生時代の包含層である黒色土層の上面までとした。これは，この包含層から完形に近い土器が出土したり石鏃が出土し遺物の包含率が高いため遺構の存在の可能性があり，それを保存する目的からであった。調査終了後完全に埋め戻しを行ない，当古墳は地権者の好意により保存されることとなった。

第3節　外部施設

1. 墳丘（図版18　第52・53図）　下道山南古墳は一辺約15 *m*残存高 1.7 *m*の方墳である。ただしこの高さは南東辺墳端からのものであり，北西辺・北東辺墳端からの高さは約 1.2 *m*である。これらの

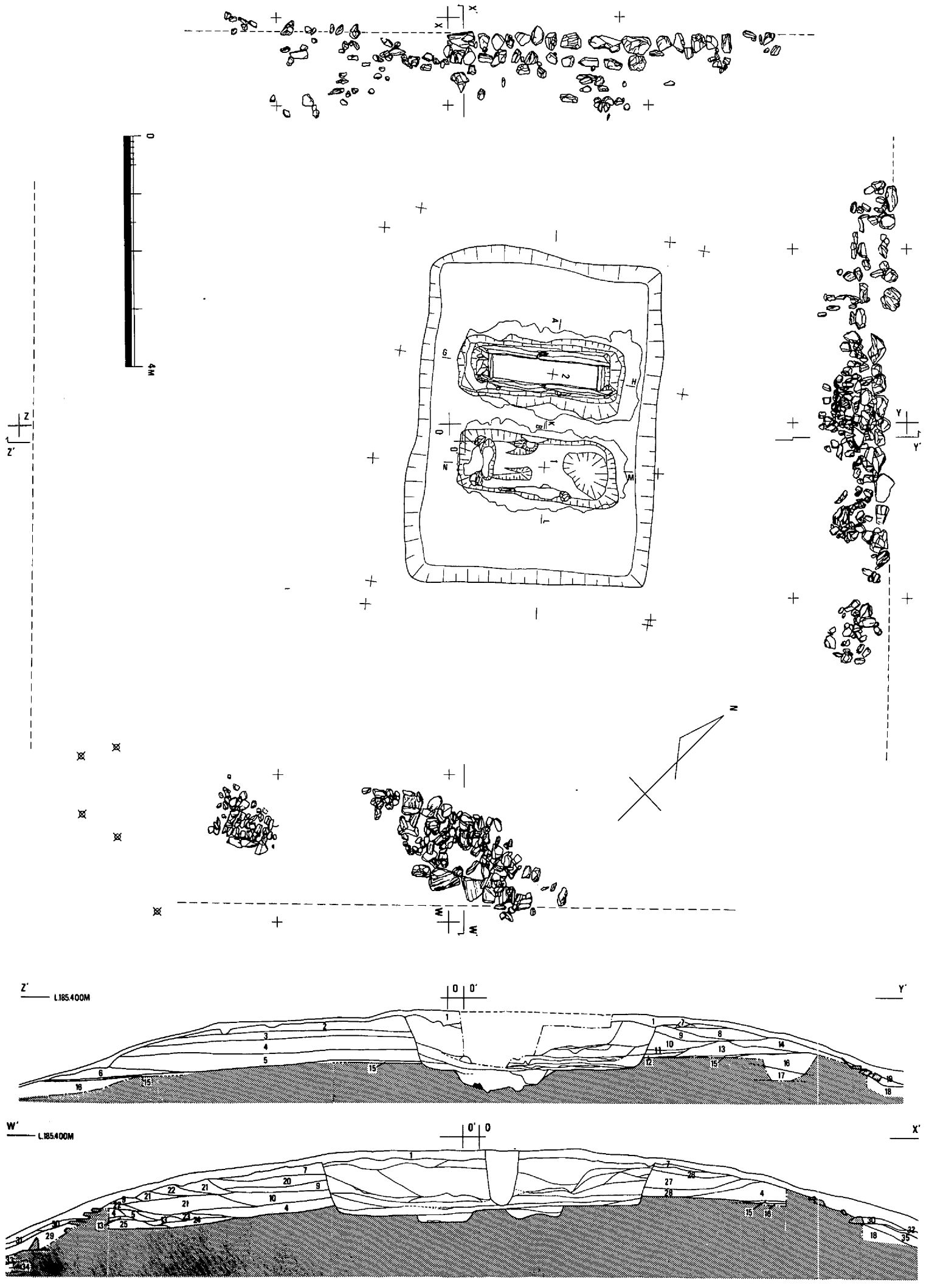
数値は残存した葺石から導き出したものである。それは以下に述べる墳丘築成についての考察による。なお一辺の方位はN 45°Eである。

下道山南古墳は墳丘の大部分が盛土によって形成されている。盛土と地山との境は墳丘築成前の旧表土と考えられる黒色土（第52図15）の上面である。この黒色有機質土は弥生時代の包含層で，墓壙壁の四周に認められ，墳丘断割トレンチの調査結果とも合わせ，墳丘中に一様に広がっていると考えられる。黒色土の下には均質で緻密な灰黄色土があり，墓壙底全面を形成し墳丘下全面にわたってあると考える。この灰黄色土は漸次変化して岩盤にいたる。このことから黒色土を墳丘築成前の旧表土とみて誤まりはないものと考える。

さて墳丘の築成であるが，当古墳ではその第1段階として地山の整形がなされている。各辺葺石の最下段の根石は地山の黒色土の下にある土に載っている。とくに北東辺では地山岩盤の上に置かれている。このことは，地山である黒色土以下の土を削って根石を置くための平坦面が作られたことを示している。さらにこの地山を削るという作業は墳丘規模を規定することにもなっている。根石の下の平坦面は墳丘外へそう大きな起伏をもたずなだらかに続いていくため，墳丘としての高まりが根石部分から始まるためである。なお墳丘の中央部分については大きな削平はなかったと考えられる。これは残存している黒色土がなだらかな傾斜をもち，一様な厚さを有していることから考えられる。このように墳丘築成の第1段階として墳丘を企画するための地山の削平がなされているのである。またつけ加えれば，この削平作業が単に根石付近だけでなく広く墳丘周囲でなされたことは，根石下の平坦面が墳丘外へなだらかに続くことからも想定されるのであるが，51年度の第1トレンチ（北東辺—125 *cm*等高線付近から北東へ約10 *m*）の調査によれば，その作業が周溝を掘り下げるというまでにはいたっていず，墳丘規模としては前述の如くになるのである。これが墳丘規模の推定において葺石を目安としたことの理由である。

次に築成の第2段階として土を盛るわけであるが，この土盛作業と葺石の積上げは同時併行で行なわれたのではないかと考える。葺石下の土層観察がないため明確ではないが，葺石の根石下に地山の平坦面をつくることは葺石を安定させるためであり，その安定は葺石のもつ墳丘の流出防止の機能を強めるもので，また土盛中の盛土の崩落を防ぐ機能も果しえたのではないだろうか。このことは墳丘の企画を守る上で重要ではないかと思われる。また北東辺においては葺石間を埋める灰黄褐色土（第52図14）の上に土盛りがなされていることからも考えられる。土盛りの方法は南西辺を除き原則的には周辺部から中心部へ向かって土が盛られている。これは墳丘企画を正確に実現しうるためではなかろうか。また葺石の積上げとの併行進行上からもこの方法にならざるをえないのかもしれない。南西辺の土層は他の三辺と異なっているが，これは盛土の搬入路のような意味を考えるべきであろうか。当古墳の盛土に含まれている礫はそのほとんどが地山岩盤を破砕したものであり，盛土は古墳立地点周辺から供給されたものと考えられる。おそらく墳丘周辺の地山削平時に出たものが多くを占めているのであろう。

墳丘上の施設としては葺石の他に埴輪片の採集からその樹立が考えられたが，墳丘流出のためか痕跡は見出しえなかった。

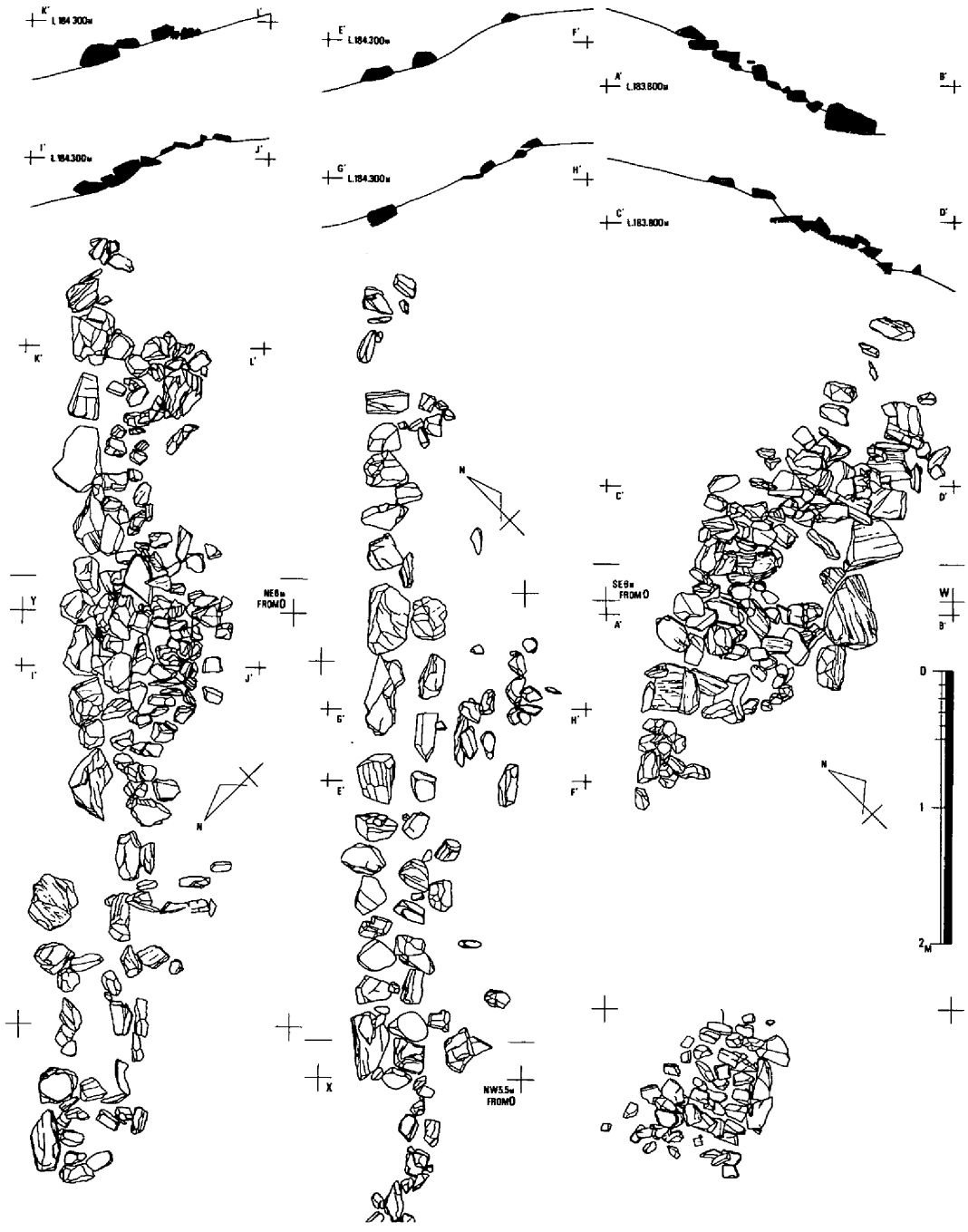


第52図　下道山南古墳平面図・墳丘断面図

図中は埴輪片出土地点

1. 暗灰茶～茶色土(表土)
2. 黄色土(礫多)
3. 暗灰褐色土(礫少)
4. 灰黄色土(礫少)
5. 橙黄色土(礫無)
6. 灰黄色土(礫無)
7. 灰黄色土(礫無)
8. 明褐色土(小礫多)
9. 赤褐色土(小礫多)
10. 暗灰褐色土(礫多)
11. 淡褐色土(含礫)
12. 灰黄緑色土(含礫)
13. 暗灰黄色土(礫無)
14. 灰黄褐色土(礫少)
15. 黒色土(旧表土)
16. 灰黄色土(細土)
17. 灰黄褐色土(礫少)
18. 岩　盤
19. 暗茶褐色土
20. 暗灰黄色土(礫無)
21. 暗灰黄色土(礫少)
22. 灰黄色土(礫少)
23. 暗灰黄緑色土(含礫)
24. 灰黄色土(礫無)
25. 灰橙黄色土(礫無)
26. 灰黄褐色土(礫無)
27. 灰褐色土(礫多)
28. 褐色土(大礫多)
29. 灰茶色土
30. 暗灰茶色土
31. 明灰黄色土
32. 暗灰黄色土
33. 茶褐色土
34. 赤褐色土
35. 暗灰黄緑色土(小礫多)

1，30～32堆積土，15～18，33～35地山，他は盛土



第53図　下道山南古墳葺石実測図（部分）　左・北東辺　中・北西辺　右・南東辺

2.　葺石（図版19　第52・53図）　墳丘の保存状態にもかかわらず葺石の残存状況は悪く，北東辺・北西辺では最下段付近，南東辺では中央小部分のみが残存し，南西辺では葺石の残存はまったくみられなかった。

北西辺の葺石は北半分の最下段二段程度の残存にすぎず，南半分の散乱した石については葺石かどうか疑問である。最下段・二段目共に長目の石は横積みにしている。この傾向は三段目以上にもいえるようである。最下段の石は二段目の石よりも大きく根石としての意識がみられる。最下段の石は少しずつの間隔をもって並んでおり，最下段と二段目の石列との間にも間隔がある。この最下段と二段目との間隔はその間の石が流出したため生じたものではなく本来からあったものと考えられる。したがって北西辺の葺石は葺くというよりは並べたという感じのものである。

北東辺の葺石は三辺のうちでもっとも広く残存していたが，やはり下段付近が多く，中央部のみやや広く検出された。最下段には大きな石を根石として置き上へ葺いていく，石の大きさは上へいくに従って小さくなる傾向があり，下段では横積みが多いのに対し上段では縦積みが多くなるようである。石の葺き方は北西辺よりははるかに密で根石もほとんど接しているが整然さに欠ける。

南東辺の葺石はごく部分的な残存にすぎなかったが，残存部分については良好な残存状況を示していた。最下段には北西辺や北東辺の根石よりもさらに大きい石を置いている。これはこの斜面が他の二辺よりも長く急なことによるのであろう。その上には石材に応じて横積み・縦積みを使い分け階段状にかなり整然と葺いている。その状況は南側の残存部分でより顕著である。石の大きさについては上にいくほど小さくなるという傾向はみられない。南側の残存部分の最下段の石は一見根石のようにみえるが，そうすれば墳形企画からはずれることになり，北側残存部分の根石に比べてかなり小さいこと，北側残存部分の各段の列が墳形企画に平行することから根石ではないと考えたい。

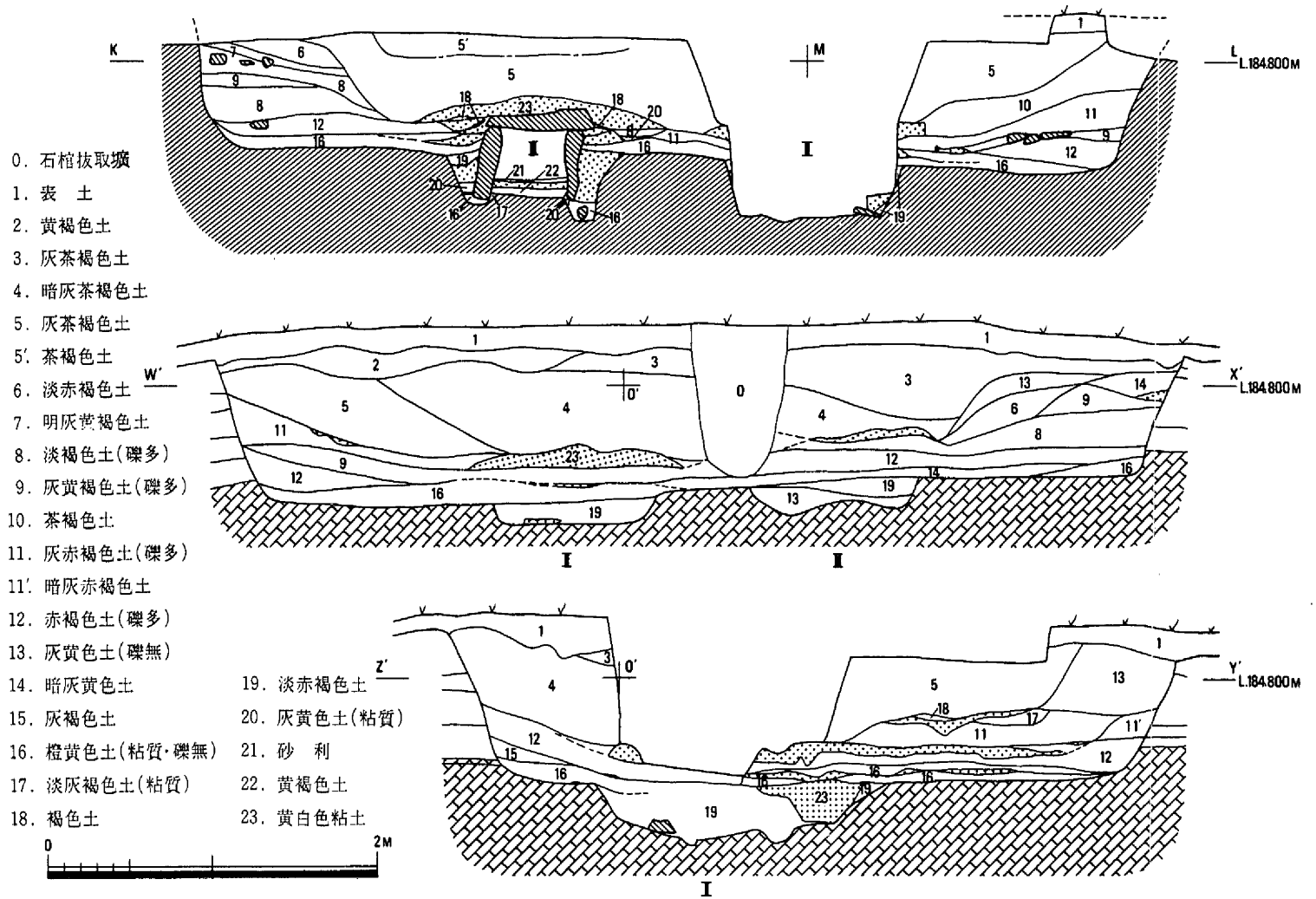
三辺の葺石を比較した際，北西辺と南東辺が大きく違っている。このことは，北西辺が背後に丘陵を控えているのに対し，南東辺が平野部から仰ぐ面であるということに関係するかと思われる。つまり前面・背面という意識によってこのような葺石のあり方の相違が生じたと考える。葺石に使用されている石は地山岩盤の割石が多く，風化しない青色のものと風化した赤色のものがあり，他に河原石もある。青色の割石が多く使用されているがそれぞれの石の使い分けはみられない。根石には三種共にみられる。

第4節　埋葬施設

下道山南古墳の埋葬施設は，墳頂平坦面に中心よりすこし北に片寄って設けられた墓壙内に設置された二基の組合式箱形石棺である。二基の箱形石棺は墓壙中軸線に対して対称に並置されていた。東側を第1主体，西側を第2主体と呼称する。

1.　墓壙（図版20・21 第52・54図）検出面で 5.4 × 4 *m*，底面で 5 × 3.6 *m*，深さ 0.8 *m*を測る。盛土上面から掘り込まれ，底面は地山を掘り下げ灰黄色土によってなっている。底面には二主体の石棺を設置するために二段目の小墓壙が掘られており，深さは約 0.3 *m*である。

墓壙内の埋土は大きく三つに分けることができる。一つは墓壙底全面を一様な厚さで埋める土で第54図の14・16がこれにあたる。礫をほとんど含まない緻密な土で粘性が少しある。黄色系の色調を呈する。二つは主体を取り巻くような形で墓壙壁から中心へ傾斜をもって四周に埋めた土で，同図6～9・11・12がこれにあたる。地山岩盤を破砕した礫を多量に含み固くしまっている。赤褐色系の色調を呈する。三つは墓壙中央を完全に埋める土で同図2～5・10・13・18　がこれである。小ブロック



0. 石棺抜取壙
1. 表　土
2. 黄褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 暗灰茶褐色土
5. 灰茶褐色土
5'. 茶褐色土
6. 淡赤褐色土
7. 明灰黄褐色土
8. 淡褐色土(礫多)
9. 灰黄褐色土(礫多)
10. 茶褐色土
11. 灰赤褐色土(礫多)
11'. 暗灰赤褐色土
12. 赤褐色土(礫多)
13. 灰黄色土(礫無)
14. 暗灰黄色土
15. 灰褐色土
16. 橙黄色土(粘質・礫無)
17. 淡灰褐色土(粘質)
18. 褐色土
19. 淡赤褐色土
20. 灰黄色土(粘質)
21. 砂　利
22. 黄褐色土
23. 黄白色粘土

第54図　下道山南古墳墓壙断面図

状の土が混じりあって各層をつくっており，しまりのない土である。茶褐色系の色調を呈する。この墓壙埋土の三種は石棺の構築・埋葬の過程に対応して生じたものと考えられる。石棺の構築・埋葬には，後述するが，三度の粘土の使用がある。この三段階に応じて墓壙内の埋立てがあり，その結果が埋土の三種である。それは，埋土の中でその上面に小粘土塊が点々と付着している特定の層があることより推察される。この特定の層は第54図中段の11・6・9，同図各段の16であり，16上面の粘土は棺取巻粘土に，11・6・9上面の粘土は蓋石被覆粘土に対応するであろう。この対応関係はこれら特定の層が二種の埋土の上面に位置し，またこの二種の埋土の各上面に棺取巻粘土・蓋石被覆粘土がそれぞれ載っていることから考えられる。以上のことから墓壙内の埋立てを復原すれば，まず各主体墓壙を埋めた後，墓壙底一面に薄く埋立てを行なう（第一段階）。次に棺を粘土で取巻いた後，墓壙壁から棺側石上面へ傾斜する形で埋立てを行なう（第二段階）。その傾斜を利用して埋葬を行ない，蓋石を粘土で被覆し，最後に墓壙全体を埋立てる（第三段階）。というような過程を経たものと考える。

ここで問題になるのは第1主体と第2主体の埋葬時期である。同時か，先後かである。北西－南東断面では明確にできなかったが，南西－北東断面（第54図下段）がその手がかりとなった。同図の11の上にある粘土層は，この断面図を実測した畦の断面（第55図）でみると，第2主体側から第1主体側へ下がっていくことがわかる。この粘土を第1主体の蓋石被覆粘土と対応すると考えれば，第2主体の埋葬後第1主体が埋葬されたという結論が得られる。ただしこの先後関係は埋葬・埋立ての第3段階に生じたもので，両主体は，先述しなかったが，初めから一墓壙内に並置させることを意図して構築されたものであり，第2段階までの埋立ては一時であったと考える。なお追葬については墓壙断面の観察ではその可能性を見出せなかった。

次に排水について触れておく。墓壙内また各主体墓壙内にも排水施設は見られなかった。にもかかわらず排水に対する配慮の可能性を求めれば，それは墓壙内埋立ての第一段階で壙底一面に薄く敷かれた土ということになろう。この土は礫を含まず緻密で粘質のある土で，各主体墓壙内にもみられるものであり，この層の存在が不自然で，これ以外の存在理由が考えにくいこと，またこの層の上面が墳丘盛土の下端に近いことなどから，この層に排水施設の可能性を考えたい。

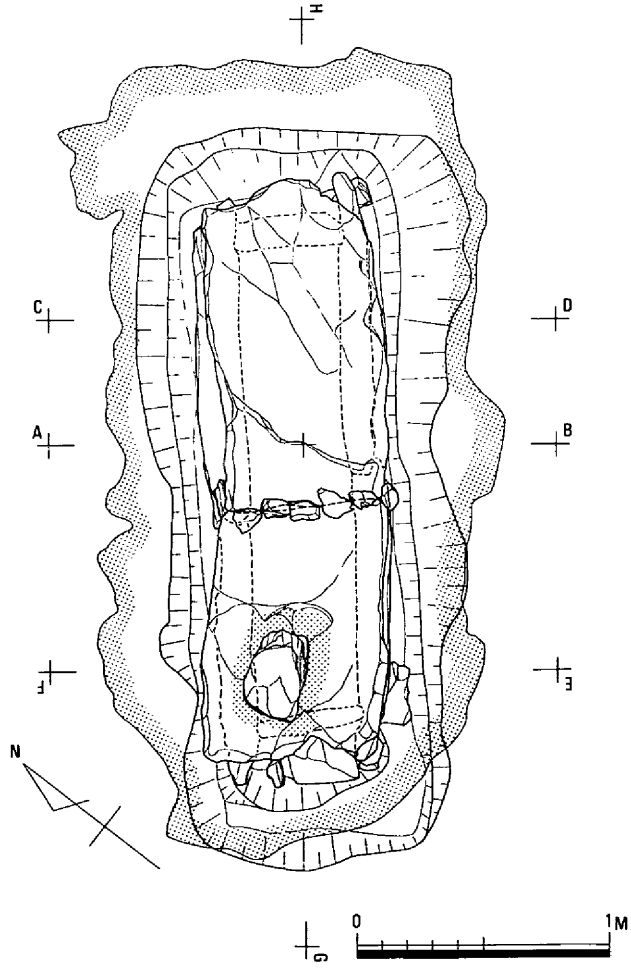
第55図　墓壙内北東－南西畦断面

2. 第2主体（図版22・23・24・26　第56・57・58・59図）　第2主体は組合式箱形石棺である。八枚の扁平な板石をもってつくられている。蓋石二枚・木口石各一枚・側石各二枚で，底石はない。側石に木口石をはめこむ形式である。棺の内法は埋葬面で長さ190㎝，幅45㎝，深さは埋葬面までで30㎝を測る。蓋石の二枚合わせての大きさは長さ230㎝，幅75㎝である。両側石の二枚合わせての長さは蓋石とほぼ等しく，両側石と北木口石の高さは50～55㎝，南木口石のみ70㎝ある。棺の主軸はN　49°　Eであ

る（図の主軸N 53° E）。

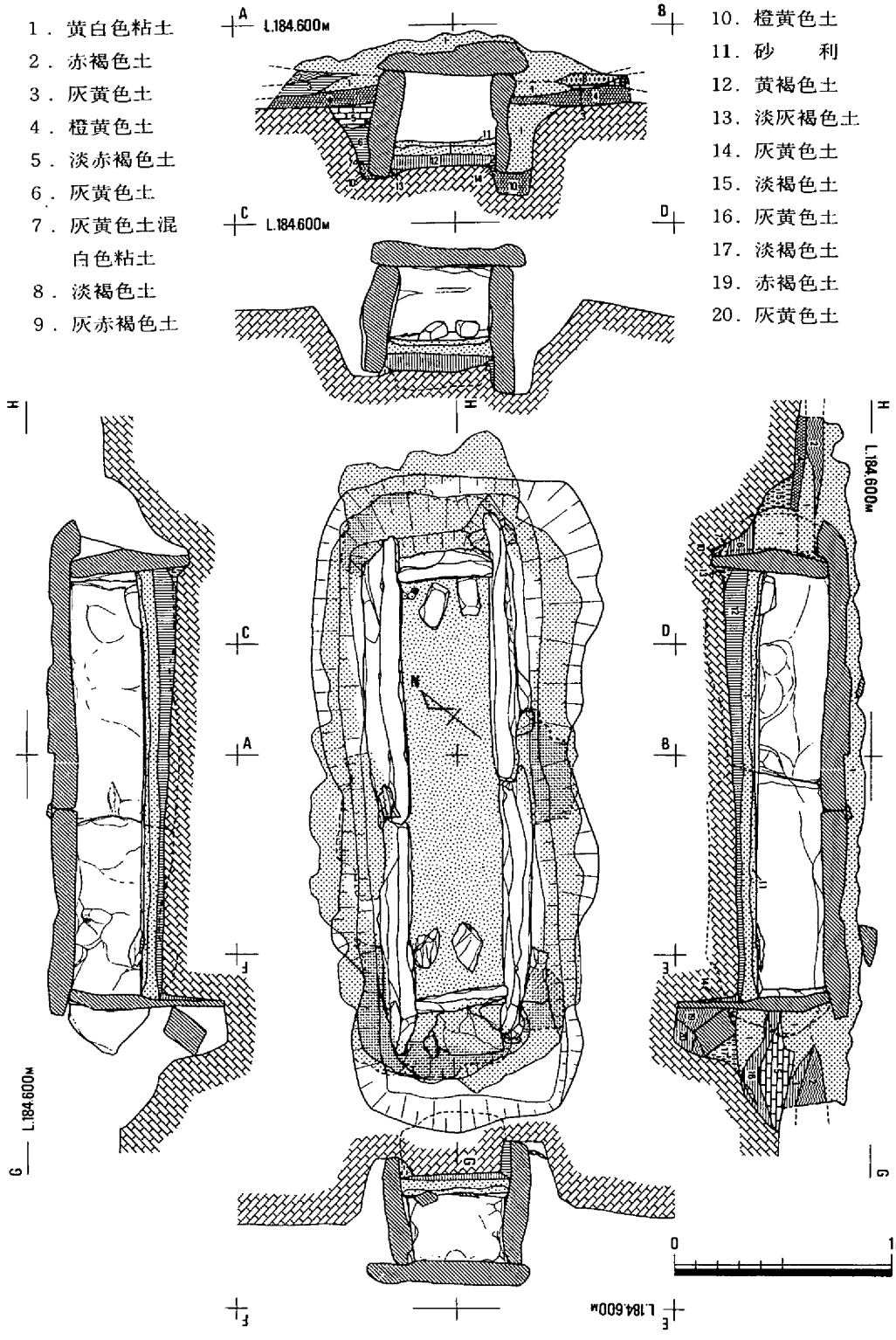
石棺石材は容易に加工できる材質で，各所に明瞭な加工痕を認める。蓋石では内面（棺内に向いた面）と継目にみられる。内面では北辺の木口石接触部より北が突出したように削り残されて，あたかも木口石にひっかかるようになっており，その他の縁辺では木口石接触部から端が平らに削られ，内面中央がやや丸味をもって棺内に膨らんだようになっている。内面は全面凹凸なく，滑らかになっている。継目は面が整えられている。側石では木口石はめこみ部分と継目に加工がみられる。木口石はめこみ部分は木口石の厚さよりやや広く抉りがつくられており，四カ所すべてにみられる。継目は精巧に，ほとんど隙間なく継がれている。側石・木口石共にその上端面はほとんど凹凸なく平らで，蓋石とほぼ密着する。このようにこの箱形石棺は，完成した姿を想定しつつ，入念な調整がなされている。

次に第2主体の埋葬状態を発掘過程に従って述べる。第2主体は蓋石全面およびその周辺を被覆粘土によって完全に覆われている。被覆粘土は長さ325 cm，幅165 cm（北）～150 cm（南），厚さは蓋石上で5～10 cm，蓋石周辺で10 cmある。北側がより広く，厚く覆われている。粘土中には小礫や褐色土が若干含まれるが，概して精選された良質のものである。粘土の南半中央よりやや南に大石が一つ置かれている。この大石は地山岩盤と同質のものであるが，墓壙内にはこれと同じ大きさの石があまりないこと，その位置が被葬者の顔上にあたること，被覆粘土にほぼ接していることから，何らかの意味をもって意識的に置かれたものと考えたい。この被覆粘土を取り去ると蓋石が露出する。蓋石の継目の上には小石が六個連接して並べられ，継目をほぼ隠している。蓋石を取りはずすと側石・木口石上端とその周辺に粘土がみられる。この粘土は棺周囲を厚く取り巻いている粘土（第57図実線水玉）で，棺周囲の赤褐色土とその下の灰黄色土を取り去ることによりその全体が露出する（図版22）。棺周囲か



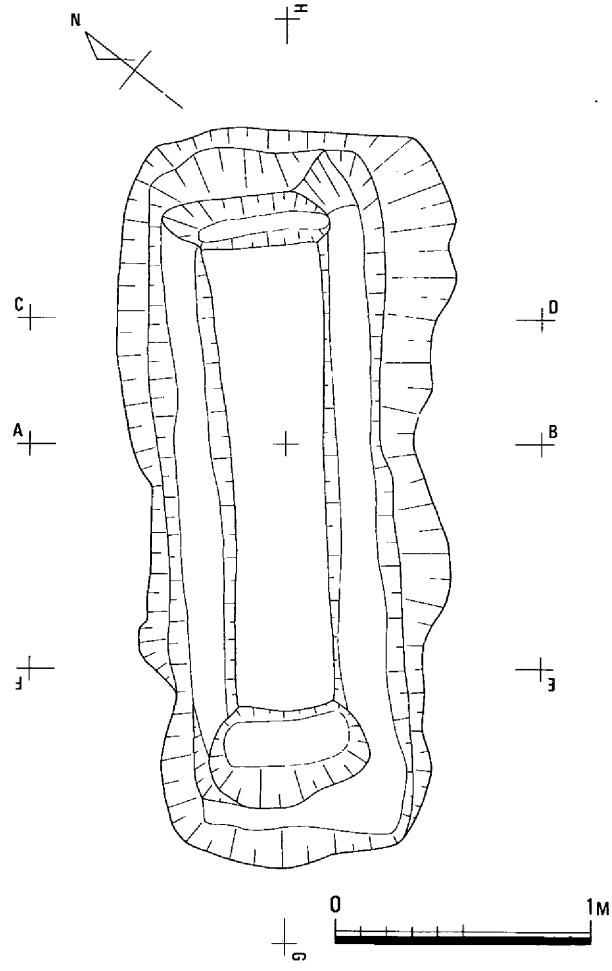
第56図 下道山南古墳第2主体蓋石・同被覆粘土実測図

1．黄白色粘土
2．赤褐色土
3．灰黄色土
4．橙黄色土
5．淡赤褐色土
6．灰黄色土
7．灰黄色土混白色粘土
8．淡褐色土
9．灰赤褐色土
10．橙黄色土
11．砂　利
12．黄褐色土
13．淡灰褐色土
14．灰黄色土
15．淡褐色土
16．灰黄色土
17．淡褐色土
19．赤褐色土
20．灰黄色土



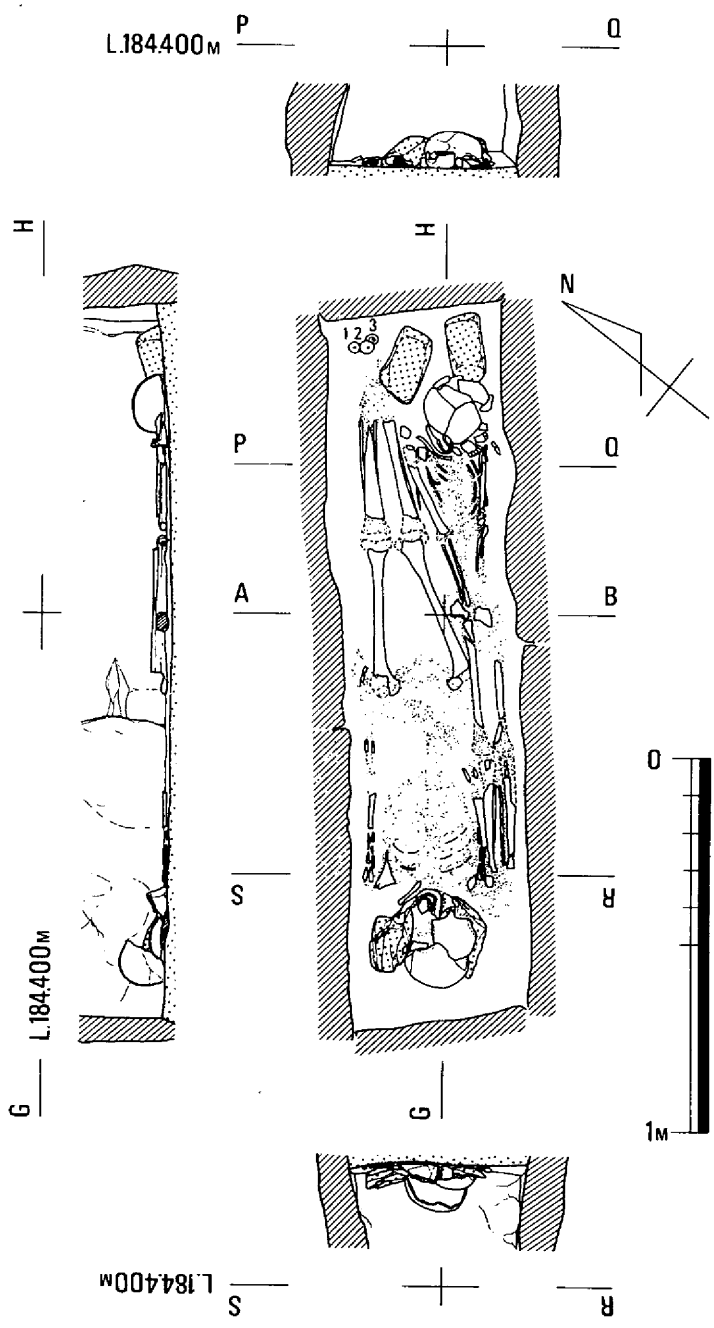
第57図　　下道山南古墳第2主体実測図

ら盛り上げるように粘土を積んでおり，厚さは側石に接する所で5～10cmある。被覆粘土と同様に北木口側がやや広く覆われている。棺の側では棺取巻粘土は蓋石被覆粘土と密着しており，両者を区分することはできない。これは蓋石と側石・木口石の合わせ目の目張りを完全なものにするため，棺取巻粘土を側石・木口石の上端まで積み上げ，蓋石で取巻粘土を押えるように閉棺したためであろう。棺取巻粘土を除去すると，側石の継目と木口石はめこみ部分に粘土がみられるほかは，橙黄色土が棺周囲を取り巻いている。橙黄色土を取り去ることによって第2主体の墓壙を検出することができる。検出面での墓壙肩の線は不整形であるが，墓壙を掘り下げていくと壁の傾斜が緩から急に変化する肩部があり，この肩の線は整形な隅丸長方形になる。墓壙の広さは検出面で長さ295cm，幅130～105cm，二段目の肩部で長さ285cm，幅90cm，深さは30cmである。墓壙内には側石の継目と木口石周辺に粘土が充填されている（第57図破線水玉）。この粘土も目張りのためのものであるが，他に棺をしっかり固定するためのものでもある。粘土は墓壙底までは達せず，墓壙底は灰黄色土・橙黄色土のやや粘性の土によって充填されている。この墓壙内の粘土のうち北木口のものは棺取巻粘土と広く密着しているが，側石継目のものは一部，南木口のものは取巻粘土との間に灰黄色土・淡赤褐色土が入り，接していない。墓壙底には木口穴が両側とも穿たれていた。北木口穴は浅いが，南木口穴は大きく深く，穴中に大小の石が木口石を穴の北壁に押しつけるようにして詰められている。このことは石棺の組立順序を暗示している。つまり，南木口石をまずしっかり固定してから片側石を合わせ，次に北木口石，最後にもう一方の側石を合わせて組み立てたものではないかと考える。また，側石はその下端が不整形なままであるため，墓壙底と側石下端との間に隙間があく，そこでこの隙間に石を置き側石の安定を図っている。これは東側石にみられ，東側石が先に南木口石に組み合わされた可能性が高い。棺内では埋葬面全面に厚さ約2cmで小砂利が敷か



第58図　下道山南古墳第2主体墓壙実測図

れている。砂利敷の下は全面粘土が貼られ厚さは5cmある。その下は黄褐色土が厚さ2～10cmで全面敷かれ，その下は地山である。木口穴の部分は一段下がるが，側石の下端付近にも軟らかい土があり，この土を取ると側石下端付近が溝状に一段下がることが確認され，墓壙底には木口穴だけでなく，側石設置用の溝も掘られており，墓壙中央に地山が台状に残された形になることが判明した（第58図）。



第59図　下道山南古墳第2主体人骨・遺物出土状態

以上のような埋葬状態から第2主体の構築・埋葬過程を復原すると，次のような順序になると考えられる。第2主体用の墓壙を掘る――墓壙内に石棺を組み立てる――石棺下端部を土で埋める――側石継目と木口石周辺を粘土で目張りする――第2主体の墓壙全体を土で埋める――棺の上端近くまで大墓壙全面に土を敷く――棺を粘土で取り巻く――大墓壙壁から取巻粘土の上端へ傾斜する形で，大墓壙四周に土を入れる――棺内に土を敷く――棺内に粘土を貼る――棺内に砂利を敷く――遺体埋葬――蓋石を置く――蓋石全面・周辺を粘土で厚く覆う――大墓壙全体を土で埋める。

遺物は棺内からのみ出土し，棺外遺物はない。棺内遺物は被葬者の人骨二体分と副葬品の紡錘車三個であった。人骨の出土状態については後に詳述するが，二体共に埋葬時の原位置のままであった。北と南にそれぞれ頭を置いて，差し違いに埋葬され

第60図　下道山南古墳第1主体石棺抜取時撮影写真

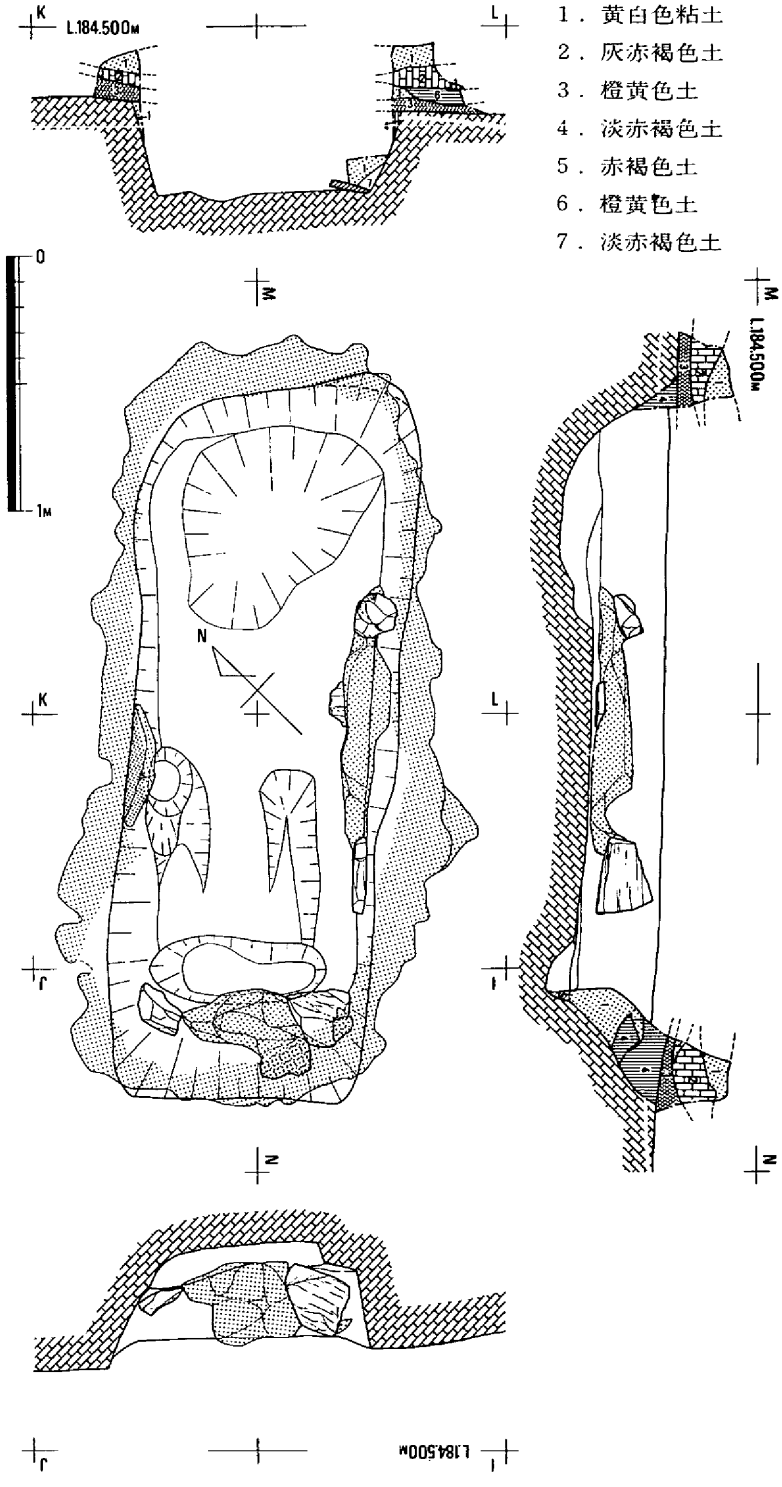
ていた。北枕の人骨を2号（女），南枕を1号（男）と呼称する。両方に枕石が二個あり，枕石の上に頭がきちんとのっていたと考えられる。2号の頭骨は枕石からはずれているが，西側枕石の南隅に強く朱が付着しており，この朱は遺体の顔面に塗られていたものと推定され，頭骨が腐朽してずり落ちたのであろう。朱は棺内全面（床面は除く）に塗布されていたもので，蓋石内面も棺内部分だけ朱く染まっていた。枕石の石材には1号2号で相違があり，1号は地山岩盤を破砕した扁平な山石であるが，2号はやや角張った緑色の河原石である。紡錘車は三個かたまって2号の枕石の西側，棺内の北西隅から出土した。西から1・2・3と呼ぶと，1と2は上面（広い方の面）を上にし，3は下面を上にし，3の上に2の片端がのり，1と2は接した状態であった。

最後に一言いえば，第2主体の埋葬状態をみると，2号に対する何らかの配慮が感じられそうである。それは被覆粘土にはじまり，棺取巻粘土・墓壙内充填粘土にみられる北側のより広く厚いこと，枕石が河原石であること，副葬品が頭の側にあることによるのであるが，ただ遺体の埋葬については2号が窮屈な姿勢をとらされていることは事実である。

3. 第1主体（図版25　第60・61図）　第1主体は過去に石棺の抜取りを目的にした発掘が行なわれており，主体は大きく破壊されていた。今回の調査では，蓋石被覆粘土の残存部分と墓壙についての調査を行なうことができた。

主体は箱形石棺であり，現在津山市郷土資料館に保管されているそうであるが，いまだ実見・実測していないので詳しくは述べえないが，第60図よりその形状をほぼ知ることができる。第60図は石棺抜取時に撮影されたもので，津山市教委の湊哲夫氏の努力により発見された。この写真を見るかぎり，第1主体の石棺も第2主体の石棺と同様のものであり，棺石の構成，組立方法から石材にいたるまでまったく同じである。より詳しくは実測の機会を得た時に述べることにしたい。

第1主体は中央部を既に破壊されていたが，縁辺部はほぼ原形を保ったまま検出することができた。



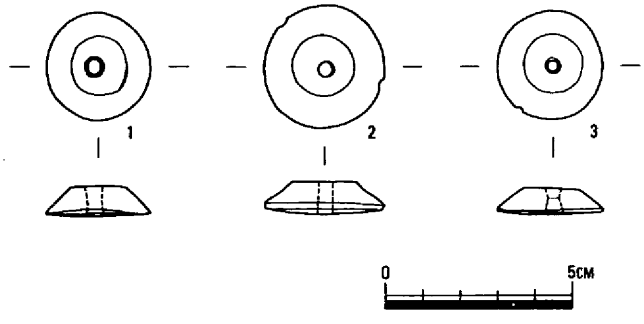
第61図　　下道山南古墳第1主体実測図

抜取壙を掘り上げた時点で既にその壁に粘土の帯が何層か露出していたが，発掘により壙の周囲を厚い粘土が取り巻いているのが検出された。この粘土が蓋石被覆粘土であることは第2主体との比較から明らかである。この被覆粘土の広がりは長さ300cm，幅110cm～150cmであり，第2主体の被覆粘土よりはやや狭い。被覆粘土の下は灰赤褐色土と橙黄色土が重なっているが，所々灰赤褐色土と橙黄色土との間に壙縁で黄白色粘土が挟まれている部分がある。この黄白色粘土は第2主体の例から考えて棺取巻粘土と考えられる。この粘土は部分的にしか残存していなかったため，その正確な広がりは捉えられなかった。この粘土の下の橙黄色土を取り除くと第1主体の墓壙が検出できた。第1主体の墓壙は第2主体の墓壙とやや相違する。すなわち，第2主体の墓壙が検出面で不

整形で二段になるのに対し，第1主体の墓壙は整形で壙壁の傾斜は滑らかである。その広さは長さ壙280cm，幅105cm，深さは30cmで第2主体の墓壙より少し小さい。第1主体の墓壙内には三カ所に粘土塊がみられる。やはり第2主体の例から考えて，側壁の二塊は側石の継目部分に充填されたもので，木口の塊は木口付近に充填されたものであろう。東側壁の粘土塊は第2主体の充填粘土に較べてかなり長い。東側壁では粘土に接して大きな石がある。これらの石はおそらく石棺を安定させるため棺と壙壁との隙間に詰められたものであろう。図示しえなかったが第2主体の墓壙内にもみられたものである。東側壁の底に近い石は第2主体でみられたように側石下に置かれたものであろう。南木口の石はその位置から考えて，木口石にあてられたものとするよりも側石用のものと考えた方がよいように思われるが，これらは第1主体石棺を実測した後に判断することであり，あくまでも推測の域をでない。墓壙底は石棺の抜取りによってかなり破壊されており，北端には大きな凹部がつくられている。南木口穴がかろうじて残存していたが，西側壁部の凹部についてはそれが側石設置用の溝の残存であるのかどうか明確ではない。南木口穴は第2主体のそれと比較して長さは等しいが幅においてかなり狭く，深さにおいては第2主体が墓壙底面より30cmあるのに第1主体は墓壙底面より10～15cmであり，かなりあさくなっており，したがって第2主体のような木口穴中の石はない。このことは石棺の組み立て方法や石棺そのものについても第2主体との若干の相違の可能性を考えさせるが，これも石棺実測によって解決すべきものである。北木口部の凹部については，それが石棺を抜き取るのに必要最低限のものだったとすれば，その深さに近く木口石の下端があったことも考えられ，木口穴の存在を推定することも可能である。なお墓壙主軸はN 51° E（図 N 47° E）である。

第1主体については，その石棺の実測を都合上なしえなかったため多くが推測にすぎないものになったが，その構築・埋葬方法については第2主体とほぼ同じと言っていい。規模においても同じか，あるいは第2主体より若干劣る程度で大差はない。このことはこの二主体が一墓壙の中に同時に構築されていることと関係するであろう。なお石棺抜取時に参加した人からの伝聞によれば，第1主体棺内からも二体の人骨が第2主体と同様の形で出土し，剣（刀？）が一振出土したということであるが，剣・人骨の所在については明確でない。

第5節 遺　　物（図版27）

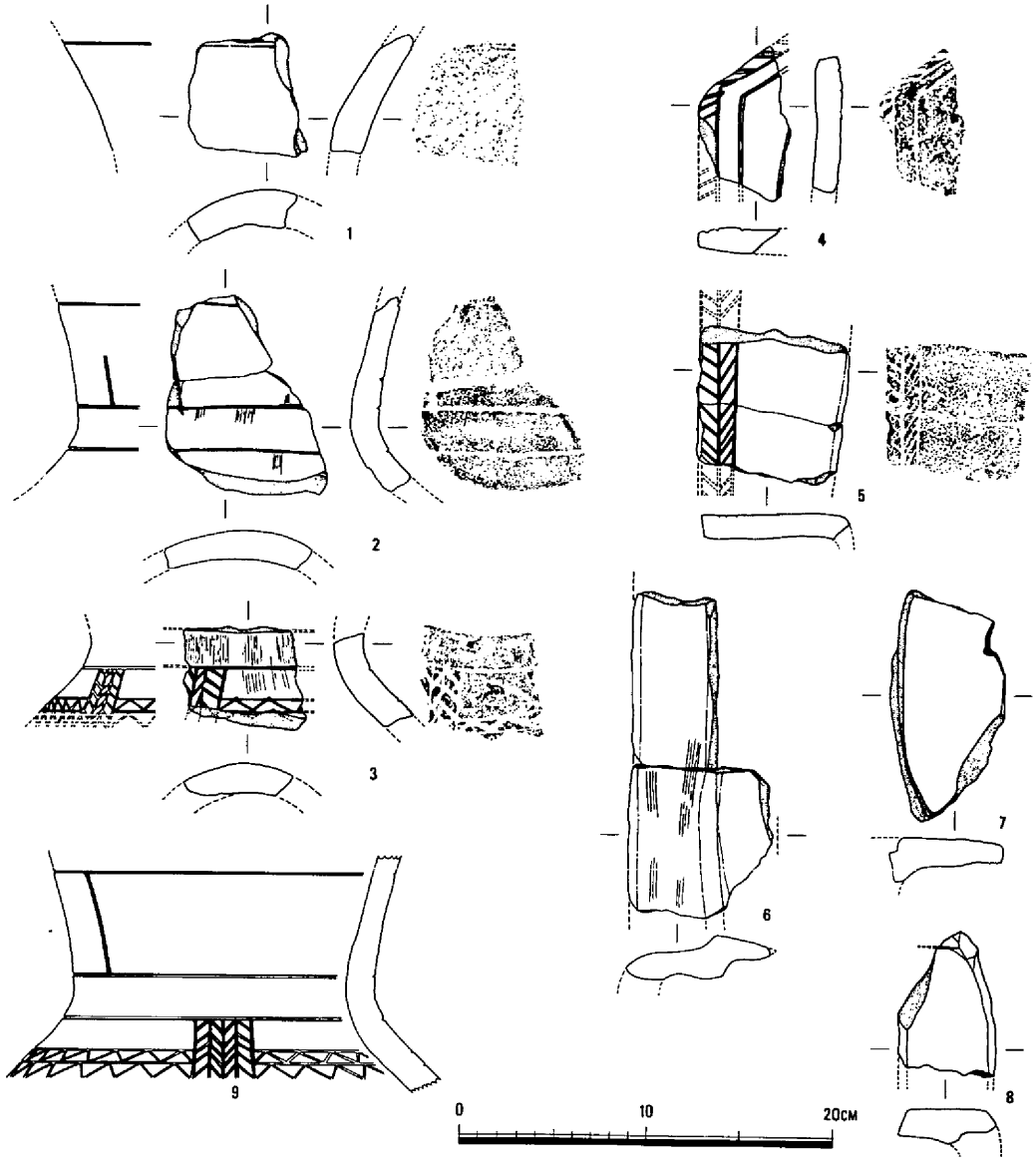


第62図 下道山南古墳第2主体出土紡錘車形石製品実測図

下道山南古墳の発掘調査によって出土した遺物は，紡錘車形石製品，埴輪，弥生式土器，石器，それに土師器である。このうち古墳に直接関係するものは紡錘車形石製品と埴輪片である。

1. 紡錘車形石製品（第62図）

第2主体の棺内に副葬されていたものである。石材はすべて蛇紋岩である。同形で低い截頭円錐形を



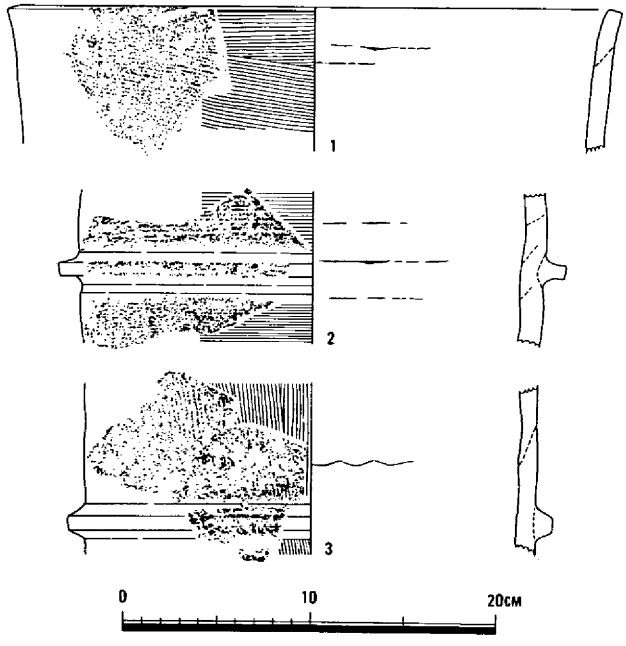
第 63 図 下道山南古墳出土形象埴輪実測図（9 は復原図）

呈する。よく磨かれている。1は径 28.5 mm，厚さ 7.5 mmあり，上平坦面（図で）はやや歪み長径15.5 mmである。傾斜面は丸味をもち，底面（図で）の縁は一部面取りがなされている。孔は両側穿孔で中央から少しずれる。孔径は 5 mm。上面・底面共にかすかに面反りがある。重さは 8.5 g。黒色に銀灰色が混じる。2は径32mm，厚さ 8.5 mm，上平坦面径 16.5mmある。底面は 1 mmの反りがある。傾斜面は内反り。底面の縁には全周に面取りがなされている。孔はほぼ中央で径 4 mm。底面はあまり磨かれていず小凹凸がある。重さは 11.5 g。緑色を呈する。3は径 28.5 mm，厚さ 7 mm，上平坦面径16mmある。底面に 1 mmの面反り。底面の縁は全周面取りがある。孔はほぼ中央で両側穿孔。孔径は 4 mm。重さ 7

g。黒緑色を呈す。

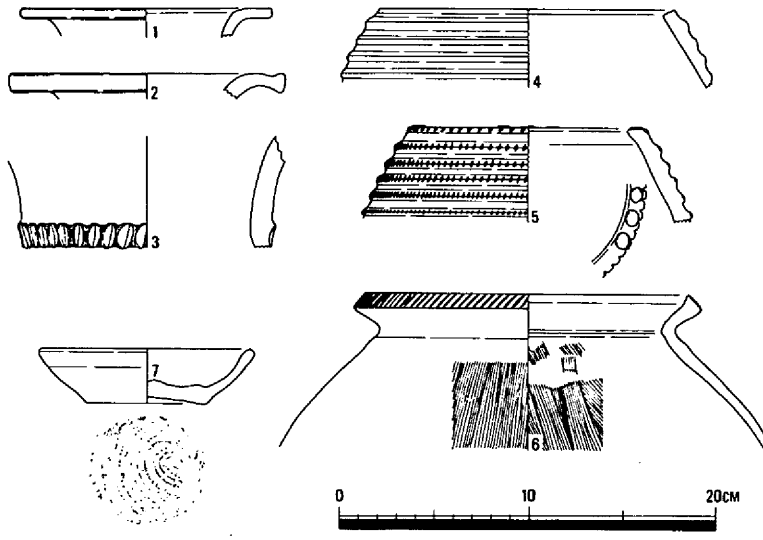
2. 埴輪 下道山南古墳出土の埴輪には形象埴輪と円筒埴輪の二種がみられるが，そのほとんどが50年度の調査で出土したもので，出土地点は第52図でみるように，墳丘の南隅や，南東辺墳端付近に集中している。いずれも墳丘の流出土中から出土したもので，墳丘上での樹立痕跡は確認できなかった。

a形象埴輪（第63図） 短甲（1～3，4？）1～4はいずれも50年度の第3トレンチ（南東辺第50図－275 cm等高線付近から南東へ約4 m）から出土しており，1～3は湾曲の状態・施文等からおそらく同一個体の破片と考えられる。2はくびれ部分に二本の横走する沈線があり，上方すこし離れてもう一本横走する沈線がある。くびれ部の沈線からすこし傾斜して縦走する沈線がみられる。1は上方に横走する沈線があり，2の上方の沈線と対応するであろう。3は上端割口が横走する沈線部分にあたっており，その下にもう一本横走する沈線がある。この二沈線の間隔は2のくびれ部二沈線間の間隔に等しい。下の沈線からは綾杉文帯が縦走し，この綾杉文帯から横走する鋸歯文帯がでている。下端割口には鋸歯文の先端の切り込みが残っており，横走する鋸歯文帯は少なくとも二段ある。1～3を合成して復原したのが9である。2のくびれ部は短甲の腰部で，3の鋸歯文帯は草摺，綾杉文帯はその合わせ目を表現していると考えられる。縦走する沈線については，図では端に表現したが，前方中央の合わせ目を表現したものかもしれない。しかし少し傾斜していることが疑問である。三角板を表現したものではない。綾杉文帯の例は管見にないが，鋸歯文帯の例は多く，近くは柵原町月の輪古墳にその例をみる。4は端部であるが，図を右へ90°回転させて考えると，短甲上端の覆輪を表現したものと考えることができそうである。 不明（5～8）5～8はいずれも墳丘南隅付近から出土している。5は端に綾杉文をもち，もう一端は湾曲して続いていく。6～8は無文で，共に板状である。8は上端に切込があり段をなす。



第64図 下道山南古墳出土円筒埴輪実測図

b円筒埴輪（第64図） 1は口縁部である。口縁端面の両縁は若干鈍い。外面は横方向のハケで調整されている。内面は軽い凹凸があり，明瞭な調整痕を認めない。粘土帯の継目がみられる。口径314 mm，厚さ10 mm。小片のため口径等完全でない。2，3は共に突帯部分である。2は突帯部分に強いヨコナデがなされ，突帯の上面・下面共に内湾し，突帯下は軽く凹む。突帯はしっかりしているが，薄い感じを受ける。外面は横方向のハケで調整されているが，

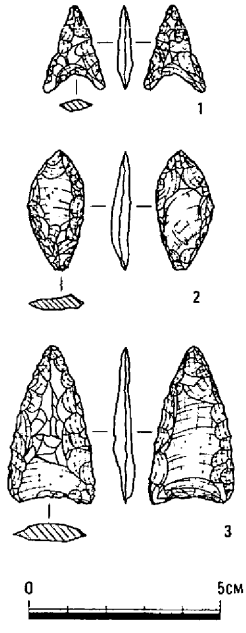


第65図　下道山南古墳墳丘内・周辺出土土器

突帯の上と下で細粗の差がある。内面には明瞭な調整痕なく，粘土帯の継目がみられる。径 250㎜，厚さ12㎜である。3の突帯は断面台形でやや鈍い感じを与える。2のような突帯周辺の湾曲はみられない。外面は縦方向のハケで調整されているが，突帯貼付前か後かは不明である。内面には明瞭な調整痕はない。径240㎜，厚さ10㎜である。

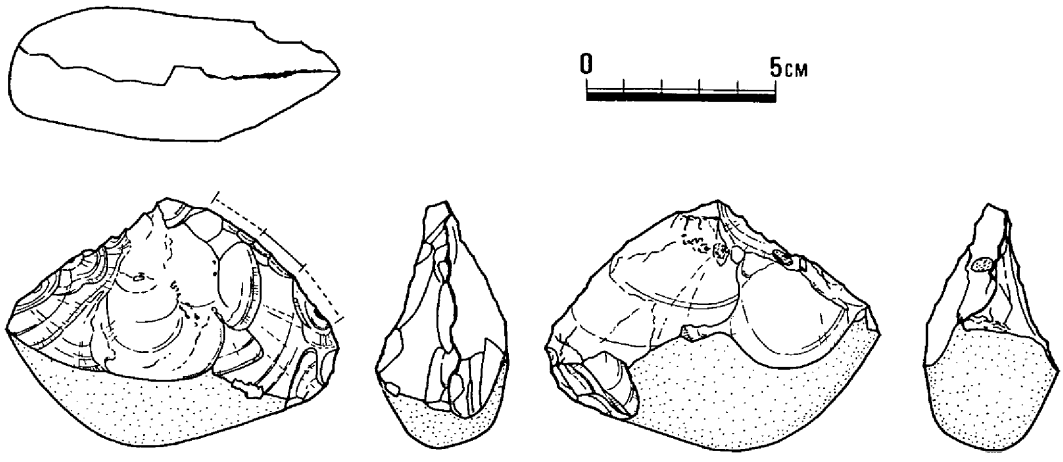
3. 土器（第65図）　表土・墳丘内・墳丘周辺から出土したものであるが，古墳との直接の関係はない。

a 弥生式土器（1～6）表土・墳丘盛土・盛土下包含層から出土した。いずれも盛土下の包含層に関係するだろう。1・2は壷形土器の口縁部である。口縁は水平になるまで大きく外反する。端部は上方に肥厚し丸味をもつ。ヨコナデ調整がなされる。口径は1が129㎜，2が143㎜である。3は壷形土器の頸部で下端に指頭圧痕文貼付突帯をめぐらす。外面・内面上方はヨコナデ，内面下半はナデ調整。4・5は無頸壷形土器と考えるが，共に小破片のため口径等完全とはいえない。4は口縁端面が内傾し，外面に貼付突帯をめぐらす。5は口縁端面が水平になり，内側へ伸びだす。外面には刻目貼付突帯を数条めぐらし，口縁端面に円形浮文を付加する。ヨコナデで調整されている。6は甕形土器である。口縁は「く」の字形に外反する。口縁端面を広くもち，上方へつまみ出し気味に拡張する。頸部は強くヨコナデされ一段凹む。内面頸部から胴部への移行部分も軽く凹む。口縁端面にはヘラ描斜線文が施されている。外面・内面共にハケ調整。同一個体と考えられる胴下部の破片があるが，外面ヘラ磨き，内面はハケ調整で，ヘラ削りはみられない。口径171㎜である。



第66図　墳丘内出土石器 1

b 土師器（7）墳丘周辺から出土。皿形土器である。内底面周辺に溝状の凹みがめぐり，中央部が高い。口縁は先端部が厚みを増す。丸くおさめる。口縁部はヨコナデ，内底面は指先でナデ回している。底面は糸切り底



第67図　　下道山南古墳墳丘内出土石器2

で，上げ底になっている。口径110 mm。

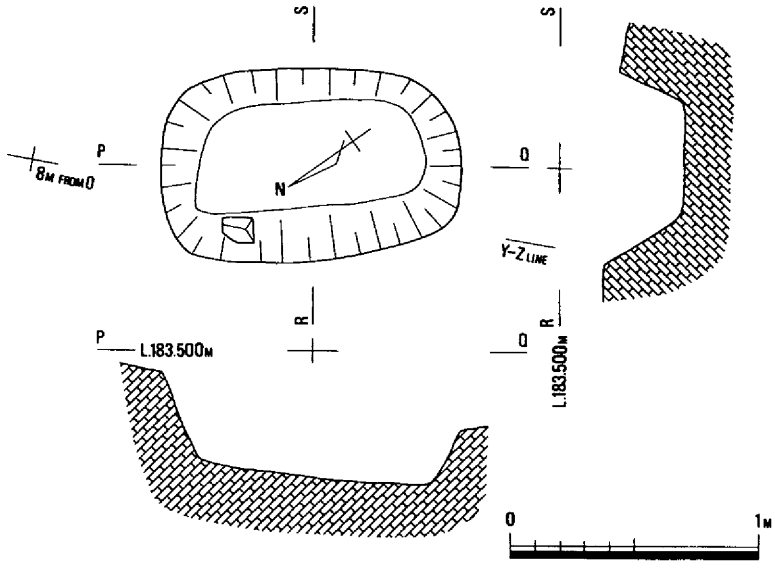
4. 石器　盛土中と盛土下包含層から出土した石鏃と石棺抜取壙から出土した旧石器がある。

a石鏃（第66図）すべて無茎で，サヌカイト製である。1は凹基式。両面共に小さい剥離がなされ，かなり風化している。全長23.5mm，幅16mm，厚さ4mm，重さ0.72g。2は凸基式。中央に大きな剥離面を残し，縁辺に細かい剥離がみられる。全長32mm，幅14.5mm，厚さ4.5mm，重さ1.63g。3は凹基であるが平基に近い。図の右の面は大剥離面を残し，縁辺にやや大きな剥離がみられる。左の面は基部に大きな剥離面が残っているが，中央の剥離は複雑で，縁辺には段状に細かい剥離がみられる。全長42.5mm，幅22mm，厚さ5.5mm，重さ3.48g。ほとんど風化せず，新鮮な感じを与える。

b旧石器（第67図）　下道山南古墳中第1主体の既掘壙上部から検出されたもので，もとは墳丘周囲の土中に存在し，古墳築造時に墳丘内に入ったものと思われる。安山岩または玄武岩状の石材で，内部は黒色を呈しているが，表面は風化がはげしく，黄白色軟質で発掘時の表面の風化は厚さ約1.2mm程あった。10cm前後の円礫（河原石）を加工して作った礫器で，両刃を造り出しており刃線はジグザグになる。正面からみると全形は菱形に作られており，基部は自然面を残し，側面からみると，刃部が三角形に鋭く，基部は丸味をもっている。図の左側のものに示したが，刃線のうち磨滅している部分がある。直線部分はかなり磨滅,破線部分はやや磨滅を示し.その他は鋭い刃線を残している。形態としては前期旧石器時代のものに類似するし，風化度もかなりのものだが，出土状態からは，時期の決め手となるものがない。6.5cm×8.8cm×3.5cmである。（この項栗野）

第6節　土　　壙（第68図）

50年度の調査でトレンチにかかり，検出されたものである。検出面で長さ120cm，幅80cm，深さ45cmである。底面は長さ90cm，幅40cmあり，隅丸長方形を呈する。地山岩盤を穿ってつくられている。壙内は茶色土一層であった。図示している石は河原石であるが，底面よりかなり高い位置にある。壙底は地山傾斜と同様に傾斜している。土壙主軸はN31°Eである。遺物はなかった。土壙の



第68図　土 壙 実 測 図

性格はその形態から墓壙を考えさせるが，単独に存在し，出土遺物もないことから確信はない。この土壙と古墳との関係であるが，土壙は古墳の南西辺から約 1.2 *m* 離れて古墳中央主軸付近に位置しており，この部分に造り出し，ないしは前方部の存在を，墳丘土層において南西辺が他辺と異なること，南西辺に葺石の残存がまったくみられないことから想定できるかと考えたが，土壙底と古墳墓壙底との比高差が120 *cm*と大きく，地形測量図にもそのような部分を認めにくいこと，また周辺の類例から，否定すべきだと考える。しかし，位置的には依然何らかの関係を考えさせるが，明確なことはいえない。ただ土壙内の土や，土壙自身のありようは，下道山遺跡で検出された中・近世墓壙とは異なり，もっと古い時代の所産である感じを受ける。

第7節　小　　結

下道山南古墳が提起する問題は多岐にわたり，限られた紙数で論じることはできそうもない。ここでは古墳の築造年代を考察し，その後問題点を指摘するにとどめたい。

棺内出土の紡錘車形石製品は中期特有の低平なタイプであるが，[注1]岡山県では他に比較する資料はないようである。畿内では，奈良池ノ内5号墳[注2]・大阪黒姫山古墳[注3]・京都宮の平1号墳[注4]などに類例をみるが，それらより一回わり小さい。短甲形埴輪については，その草摺部分の表現を，柵原町月の輪古墳[注5]・岡山市金蔵山古墳[注6]と比較した場合，「合わせ目」と表現した綾杉文帯に写実から装飾という変化を想定すれば，この二古墳より新しい時期のものと捉えうる。5世紀中葉から後半と推定される山陽町岩田3号墳出土の埴輪草摺は，合わせ目に鋸歯文帯を用いている。[注7]下道山出土の形象埴輪片は少数ではあるが，その中には動物埴輪らしきものはみられず，しいていえば近藤義郎氏のいうA型に含まれる。[注8]円筒埴輪については，月の輪古墳・津山市日上畝山51・52号墳・同市井ノ口車塚古墳出土品との比較を試みた。[注9]日上畝山51号墳は前方後円墳，井ノ口車塚も帆立貝式の前方後円墳で，[注10]いずれも中期後葉～中期末の築造と考えられる。下道山の胎土は石粒・砂粒を多く含み，月の輪の胎土と粗さにおいて類似する。日上畝山・井ノ口車塚の胎土はより細かい。下道山のタガは上面も下面も同等に強くナデ付けられ，貼付痕は消されている。64図2のタガは鋭く薄く高い。月の輪のタガも上・下面同様にナデ付けられているが貼付痕跡を認める。日上畝山52号のタガは鋭くはあるが，タガ貼付けのナデ

は上面と側面のみに行なわれ，下面では胴本体との間に隙を生じている。同51号のタガは断面台形の幅広く低いものであり，津山市六ツ塚5号墳[注11]に似る。井ノ口車塚は資料にばらつきがあり，タガも断面台形のものから三角形に近いものもあるが，下道山よりは新しい感じを受ける。以上みたように，下道山の円筒埴輪は日上畝山や井ノ口車塚よりは月の輪に類似し，月の輪のタガよりも更にしっかりしている。一見しただけであるが，総社市作山古墳のものに似る。

下道山の石棺および埋葬法は津山市沼6号墳[注12]に類似し，きわめて丁寧な埋葬である。葺石は全面に葺かれており，いわゆる鉢巻状の簡略化されたものよりは古いと考える。その立地は古式古墳のそれに近く，高い尾根端に独立して存在する。

以上の諸点を考慮すれば，下道山南古墳の築造時期は古墳時代中期中葉（5世紀中葉）に比定しうるであろう。さらにいえば，中葉のうちでも古く位置づけたい。

下道山南古墳の提起する問題としては，1）一棺内複数埋葬　2）一墓壙内複数主体　3）古墳築造時期と埋葬時期　4）墳丘築成法　5）副葬品の僅少　6）周辺方墳[注13]との類似と相違　などがあるが，特に6）については，宮川を挟んで対面する沼6号墳との関係が重要となる。時期も規模も類似した両墳であるが，その在り方・内容にはかなりの相違があり，それをどう捉えうるかは重要な問題である。（岡本）

注1. 小林行雄「ぼうすいしゃ」『図解考古学辞典』創元社（1959）

2. 久野邦雄・泉森皎・菅谷文則他『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊　奈良県教育委員会（1973）

3. 末永雅雄・森浩一『河内黒姫山古墳の研究』大阪府文化財調査報告第1輯　大阪府教育委員会（1953）

4. 高橋美久二・平良泰久「宮の平古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1974）』京都府教育委員会（1974）

5. 近藤義郎・岡本明郎・神原英朗他『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会（1960）

6. 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊　倉敷考古館（1959）

7. 神原英朗『岩田第3・5号墳発掘調査概報他』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第2集　山陽団地埋蔵文化財発掘調査団（1971）

8. 近藤義郎「吉備国における埴輪の変遷」『古代吉備』第2集（1958）

9. 日上畝山・井ノ口車塚出土品については湊哲夫氏により実見の機会を与えていただいた。

10. 今井堯・渡辺健治「津山市河辺井口車塚古墳調査と保存」『津山市文化財調査略報』第1集　津山市教育委員会（1960）

11. 津山市教育委員会『六ツ塚古墳群調査略報』津山市文化財調査略報第3集（1962）

12. 今井堯・渡辺健治・神原英朗・河本清「美作津山市沼六号墳調査報告」『古代吉備』第6集（1969）・『津山郷土館報』第1集（1968）

13. 近藤義郎・中島寿雄「第4章　門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究 第一冊』津山市（1952）

橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯綱神社古墳群（10）」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第4集　岡山県教育委員会（1974）

小結をまとめるにあたって河本清・湊哲夫・中山俊紀・狐塚省蔵・岡田博の各氏に便宜を図っていただき，また種々の御教示を得た。感謝します。

第5章　下道山南古墳出土の人骨について

京都大学理学部　池　田　次　郎

I　下道山南古墳第2主体内人骨出土状態　（図版23　第59図）

下道山南古墳第2主体の石棺から発見された二体の人骨のうち，頭を南西に向けた1号人骨は男性，これと反対方向を向く2号人骨は女性である。人骨の保存状態が比較的良好な部分は，1号・2号の頭骨および1号の左右大腿骨だけで，1号の左右上腕骨・下腿骨，2号の左右上肢骨・下肢骨・右寛骨の一部などは断片ながら残存している。その他の大部分の骨は腐蝕して形状をとどめていないが，褐色の粉状の痕跡によって，それらの骨が埋葬時におかれた場所を推定することができる。

1　号　人　骨

頭骨：石棺の西南端近くに，二個の切石が楔状におかれ，その間に頭骨がある。頭蓋冠は左を上にして横向きになり，その前方にある前頭骨は，外面を上にしているので，これは，冠状縫合で左右の頭頂骨から離れて，下方に落ちたものとみられる。同様に，左側頭骨も鱗状縫合で頭蓋冠と離れている。上顎骨は，左右とも口蓋面を上に向け，頭骨の尾側にあり，左右上顎骨の間に下顎骨の右半分が挟まれている。下顎骨は，歯の咬合面を上に向け，ほぼ水平に位置する。以上の頭骨の状態から，遺体の頭が，左右の切石の間に，顔を尾側あるいは上に向けておかれ，軟部が腐蝕した後，前頭骨・顔面骨・下顎骨が頭骨の主な部分から離れて落ち，頭蓋冠は右に倒れたと推定できよう。

胴骨・上肢帯骨・下肢帯骨：椎骨・肋骨および骨盤のほとんどの骨は痕跡にすぎないが，それらは胴部が仰臥姿勢であったことを示唆する。左の鎖骨は，下顎骨左半分の尾側に接して発見され，左肩甲骨の破片は，肋骨面を上に，関節面を外側に向けており，右肩甲骨の外側角の破片は，上腕骨近位部に近いところにある。これら上肢帯骨からも，この人骨が仰臥姿勢をとっていたことがわかる。

上肢骨：左上腕骨は，小破片ではあるが，明らかに体軸に並行に伸ばされている。尺骨・橈骨の断片およびそれらの痕跡から，肘関節は完全に伸ばしており，左大腿骨の大転子の外側付近に1本の中手骨が残っているので，手の部分も，骨盤の外側に接して伸ばしていたとみることができる。右上腕骨は，前面を上に向け，体に並行しているが，肘の部分でやや内側に向う。尺骨・橈骨の断片および痕跡から推定すると，右上肢，肘関節でやや内側にまげられ，手は下腹部の上におかれたのではなかろうか。

下肢肯：左大腿骨は前面を上に向けている。膝関節はまっすぐ伸ばし，脛骨は前縁が外側を向いているが，これは軟部が腐蝕した後，倒れたものであろう。腓骨は脛骨の下外側から発見された。右大腿骨も前面を上に向けているが，その遠位端は，左大腿骨のそれに近づくように内側にある。脛骨は，前縁を上に向けており，その外側にある腓骨とともに左下腿骨と並行にならぶ。ナ脛骨の遠位端の外側に距骨の破片があるが，これは軟部が腐蝕した後に，ころがったと考えられる。左右の下腿骨の尾側に，褐色の粉状の骨の痕跡が認められたが，これはおそらく左右の足骨の位置を示すものであろう。

以上の所見から，1号人骨は，仰臥伸展姿勢で埋葬されたといえる。

2　号　人　骨

頭骨：脳頭骨は，頭頂骨を上にし，顔を南東，尾側に向ける。左頭頂骨の一部および左側頭骨・前頭骨左半分は，こわれて下方におちている。右頬骨はほぼ原位置にあるが，左右の上顎骨は，前頭骨の尾側，下方に離ればなれに落ちている。下顎骨は，歯の咬合面を上にし，ほぼ水平に頭骨の下にある。頭骨の北東壁よりに枕石と思われる二個の石があり，その南東の石の端に頭骨の一部がのっている。頭骨の状況および頭骨と右鎖骨の位置関係から，遺体の頭部は，この二個の石の間に，顔を上方，やや南東壁方向に向けていたとみられる。

上肢帯骨：右鎖骨が下顎骨の尾側にあり，その外側には右肩甲骨の断片がある。

上肢骨・胴骨：右上腕骨・尺骨・橈骨は一直線にならんでいるので肘関節は伸ばしていたことがわかるが，上腕骨の前面が内側を向いているので，上肢は横臥の時の状態を示す。手の位置は，右寛骨の上にあったと想定される。左も，肘関節はまっすぐ伸びており，上肢は体軸に並行に伸びる。上肢骨の状況は，埋葬時に遺体が横臥姿勢をとっており，肋骨の断片と痕跡，およびそれらと左右上腕骨の位置関係は，遺体の肩をちぢめた，相当きゅうくつな姿勢であったことを物語っている。

下肢帯骨・下肢骨：右寛骨の寛骨臼付近の部分と，腸骨翼前部の破片が残っており，前者は，寛骨臼を尾側に，後者は殿筋面を上に向けているので，腰は，南東壁よりを前にした横向きである。右大腿骨はこの寛骨臼にその骨頭を関節させており，大腿骨体は内側面を上にしている。膝はまっすぐ伸ばしており，下腿では，前縁を内側にした脛骨の下に腓骨がある。左下肢骨は，右と大体同じような状態で，それに並行している。右距骨が右の脛骨の尾側にあり，さらにその尾側には，左右の足骨の痕跡が認められた。下肢帯骨・下肢骨の状況は，遺体の腰から下の部分が左を下にした横臥で，左右の膝を伸ばして埋葬されたことを示す。

以上，2号人骨は，左を下にした横臥伸展位で埋葬されたと考えられる。

1号・2号人骨の関係

二体の人骨は，互に近接しているにもかかわらず，重なりあう骨はほとんどない。1号の右上腕骨と2号の右脛骨，また1号・2号の右大腿骨が部分的に接しているが，いずれの場合も，骨は重なっていない。さらに，どの骨も埋葬時におかれた場所から大きく動いていないので，この二体の埋葬は同時，または，どちらか一方が追葬されたとしても，その時期は，先に葬られた遺体の軟部が腐蝕して白骨化する前であったろう。

この石棺は，一人の遺体を葬るのに丁度よい大きさであるから，これに二体葬るのはかなり無理であった。1号の男性人骨は，2号人骨を体の右側に葬るため，右下肢がやや斜めになっている点を除けば，正常の仰臥伸展位をとる。これにたいして，2号の女性人骨は，残された狭い空間を利用して葬られたために，上体が斜め横となり，腰の部分は左を下にしたやや変則的な横臥伸展位をとらざるをえなかったのであろう。両人骨とも枕石の上に頭をおいている。

Ⅱ 下道山南古墳第2主体内出土人骨の鑑定

下道山南古墳出土人骨は，保存状態が悪く，かつ骨質が脆弱であるために，骨を採集する際，小破片となったものが多い。

1 号 人 骨

頭蓋骨：脳頭蓋では，前頭骨・左右頭頂骨・左側頭骨・後頭骨が結合しており，顔面頭蓋の鼻骨に，左頬骨が前頭骨と左側頭骨に接続する。前頭骨は，前頭鱗の右外側部1/4を欠く。右頭頂骨は，側頭線が冠状縫合に交叉する点と，ラムダを結ぶ線の外側の部分がないので，前頭骨，右頭頂骨の側頭線から外側，すなわち，脳頭蓋の右側面を欠損している。左頭頂骨は完全で，これに乳様突起の下部と錐体を欠く左側頭骨が接続し，側頭骨の頬骨突起は，頬骨の側頭突起と結合して左の頬骨弓をつくっている。後頭骨は右半分を欠き，残存する後頭鱗の上部は左頭頂骨に結合する。矢状縫合・人字縫合は，内・外板とも完全に癒着し，矢状縫合の前頂部，三角部を除く部分，および人字縫合の三角部では縫合は消失しているが，冠状縫合では，内・外板とも癒着がみられない。前頭骨の湾曲は弱く，眉上弓のたかまりは強い。また乳様突起はかなり大きい。

顔面頭蓋では，脳頭蓋に接続する完全な左頬骨，右上顎骨前頭突起の一部，鼻骨の一部以外に，これとは離れているが，左右が結合している上顎骨がある。左右とも正中部から第1大臼歯歯槽までの歯槽突起と口蓋突起とからなり，ともに中切歯から第1大臼歯までの六本の歯が残存している。

下顎骨は，左右の下顎枝を欠損している。すなわち，左では下顎骨，下顎枝後縁，関節突起がなく，右では，筋突起の一部を除く下顎枝の大部分がない。歯は，左第1大臼歯が脱落し，その歯槽は閉鎖しているが，他の歯は左右第3大臼歯を含めすべて残っている。上顎第1大臼歯の咬耗の程度は，マイルズの歯牙機能年数25～30年，暦年令30～35才の状態である。

左鎖骨・左右肩甲骨・左右尺骨・左右橈骨：いずれも小破片。

上腕骨：左は骨体の破片，右は骨体約2/3と上腕骨頭の破片。

大腿骨：左右とも大腿骨頸および遠位骨端を欠く。右では，大腿骨頭および膝蓋面が骨体と離れているが残存する。

脛骨：左右とも近位・遠位骨端がない。

骨：左右とも小破片。

距骨：右の距骨頭，滑車の一部を含む破片。

1号人骨は，頭骨・大腿骨の形態的特徴，頭蓋骨縫合の癒着，大臼歯の咬耗の程度から，30～40才の男性と推定される。頭骨は朱と思われる顔料で赤く染まっている。

2 号 人 骨

頭蓋骨：脳頭蓋では，前頭骨・左右頭頂骨・左右側頭骨・後頭骨が結合し，前頭骨・右側頭骨に顔面頭蓋の右頬骨が接合する。前頭骨は，鼻部および眼窩部の内側縁と眼窩面の大部分，左眼窩上縁の内側部を欠く。左頭頂骨の後頭縁近くの部分と，右頭頂骨の蝶形骨角はない。左側頭骨は，頬骨突起付着部に近い側頭鱗の一部が残っているにすぎないが，右側頭骨は，乳様突起の下部，錐体の先端を除きほぼ完全で，その頬骨突起は右頬骨の側頭突起と結合して，頬骨弓をつくっている。後頭骨は，ラムダに近い三角形の小部分と，右のアステリオン付近の小部分がそれぞれ頭頂骨，右側頭骨と接続する。冠状縫合・矢状縫合の頭頂部は，内・外板とも癒着しており，冠状縫合は大部分が消えているが，矢状縫合の頂渦部より後方，人字縫合は癒着していない。前頭結節は強く突出し，眉上弓・眉間の膨隆は弱く，乳様突起は小さい。

顔面頭蓋では，脳頭蓋に接続するほぼ完全な右頬骨の他に，左頬骨の破片と，右上顎骨の口蓋突起・歯槽突起およびそれに続く上顎骨体の一部が残っている。上顎骨の歯槽突起は，正中部から第2大臼歯の歯槽までで，中切歯から第2大臼歯までの七本の歯が残っている。

下顎骨は，右の筋突起から左の第1小臼歯付近までの下顎骨体と，左の第2・第3大臼歯の歯槽縁付近の破片とであるが，両者は接続しない。右では中切歯から第2大臼歯まで，左では中切歯から第2小臼歯までの歯と第2大臼歯が歯槽内にみられるが，左第3大臼歯は明らかに未萠出である。脱落した歯として，上顎左の中切歯から第3大臼歯までの八本，上顎右の第3大臼歯，下顎左の第1大臼歯が発見されているので，この個体では，第3大臼歯は上顎では左右とも萠出しているが，下顎では未萠出と考えることができる。上顎第1大臼歯の咬耗の程度は，マイルズの歯牙機能年令25才前後，したがって暦年令は30才前後である。

肋骨・右鎖骨：小破片。

肩甲骨：左の外側角付近。

上腕骨：左は骨体の破片，右は両骨端を欠く骨体の大部分

尺　骨：左右とも骨体の破片。

橈　骨：右の骨体約2／3。

寛　骨：右の寛骨臼付近と腸骨翼前部の破片。

大腿骨：右は大腿骨頭の一部と，遠位骨端を欠く。右は骨体の約2／3　，左は約1／2。

左右腓骨・右距骨：破片。

2号人骨は，頭骨・寛骨・大腿骨などの形態的特徴，頭蓋骨縫合の癒着，大臼歯の咬耗の程度から，30才前後の女性と推定される。1号人骨と同様，頭骨には赤色顔料が付着している。

頭骨計測値と示数

計測，算出できた数値は次の通りである。

		1 号 人 骨	2 号 人 骨
1.	頭骨最大長	(188)	(168)
8.	頭骨最大幅		(129)
9.	最小前頭幅	91	93
10.	最大前頭幅		114
20.	耳ブレグマ高	118	111
26.	正中矢状前頭弧長	132	
27.	正中矢状頭頂弧長	132	122
29.	正中矢状前頭弦長	118	
30.	正中矢状頭頂弦長	116	108
8/1	頭骨長幅示数		(76.8)
20/1	長耳ブレグマ高示数	(62.8)	(66.1)
20/8	幅耳ブレグマ高示数		(86.1)

9/10	横前頭示数		81.6
9/8	横前頭頭頂示数		(72.1)
	矢状前頭頭頂示数	100.0	
29/26	矢状前頭示数	89.4	
30/27	矢状頭頂示数	87.9	88.5

推 定 身 長

全長が計測できる長骨がないので，正確な推定身長は不明である。ただ，発掘時に計測した第1号人骨の右大腿骨全長が435 mmであるので，これから算出した同人骨の推定身長は約162 cmとなる。

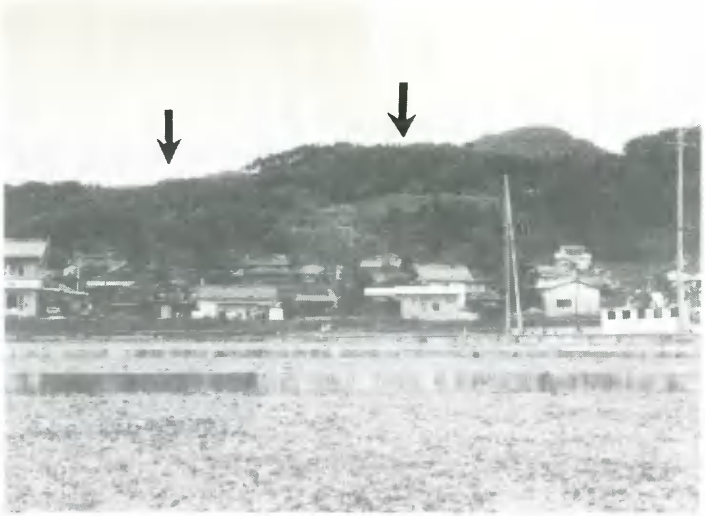
本資料を調査する機会を与えて頂いた津山市教育委員会河本清氏，岡山県教育委員会栗野克己氏，岡本寛久氏，および人骨の実測に協力して頂いた岡山理科大学川中健二，京都大学大学院生多賀谷昭氏に感謝の意を表したい。

あとがき

発掘調査にあたり，猛暑の盛りから，北風吹き雪降る季節まで労苦を共にされた調査参加者諸氏の氏名を明記し，末尾ではありますが，感謝の意を表します。ありがとうございました。

井上　恵	畝山高子	北原和子
北原たね代	北原多美子	北原春野
清水節代	清水常子	清水孫一
清水道子	豊田菊野	中塚きん子
仁木静子	早島玉代	二木　菅三
牧野通義	実石とみ子	宮本芳一
山下　都		

1　下道山遺跡遠影（東南から），左の高い山は神楽尾城跡



2　下道山遺跡遠影（北東から）・矢印左　下道山南古墳，右　下道山遺跡

1.　1号住居址（西から）

2.　1号住居址　中央ピットと柱穴（南から）

3.　2号住居址（南西から）

4.　3号住居址（南から）

1.　4号住居址　　（北東から）

2.　溝状遺構　　（西から）

3.　土壙墓2　　（北から）

4.　土壙墓46　西側石の状況　　（北から）

1.　土壙墓群全景　　（南から）

2.　土壙墓群全景　　（北から）

1. 土壙墓 4　（南西から）

2. 土壙墓 40・41・42・43・44　（南東から）

3. 土壙墓 1　（南から）

4. 土壙墓 30　（南から）

1. 方形台状墓１号　　（西から）

2. 方形台状墓１号　　（東から）

3. 方形台状墓１号主体部　　（西から）

4. 方形台状墓１号主体部　　（北から）

1. 方形台状墓1号　西溝　（南から）

2. 方形台状墓1号　主体部北側石だまり　（東から）

3. 方形台状墓1号　東溝　（南から）

4. 方形台状墓1号　南溝　（西から）

1. 方形台状墓　遠景　（南から）

2. 方形台状墓 2 号　（南から）

3. 方形台状墓 2 号　南溝　（東から）

4. 方形台状墓 2 号　南溝　（西から）

1. 方形台状墓 2 号主体部 3 ～ 8　　（北東から）

2. 方形台状墓 2 号主体部　　（東から）

3. 方形台状墓2号主体部　（西から）

4. 方形台状墓 2 号主体部 1 ・ 2 ・ 8　　（北から）

1. 土器棺A　（北から）

2. 土器棺B　（西から）

3. 土器棺C　（南東から）

4. 土器棺D　（西から）

1. 土器棺E　（北から）

2. 土器棺F　（東から）

3. 1号墳　全影　（北から）

4. 1号墳　石室全景　（南から）

1. 2号墳全景 （北東から）

2. 2号墳全景 （南西から）

3. 2号墳主体部 （南西から）

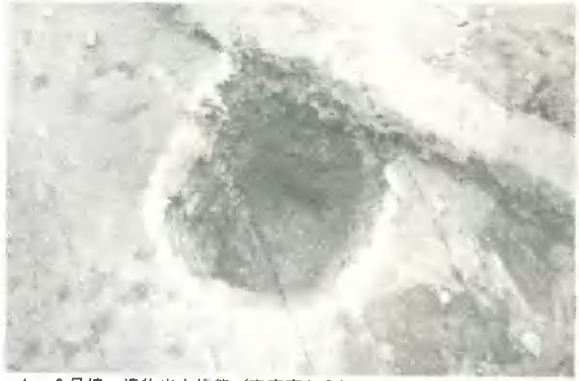
4. 2号墳主体部復元状態 （東から）

図版 12

1.　3号墳　石室全景（南東から）

2.　3号墳　遺物出土状態

3.　3号墳　奥壁と遺物出土状態（南東から）



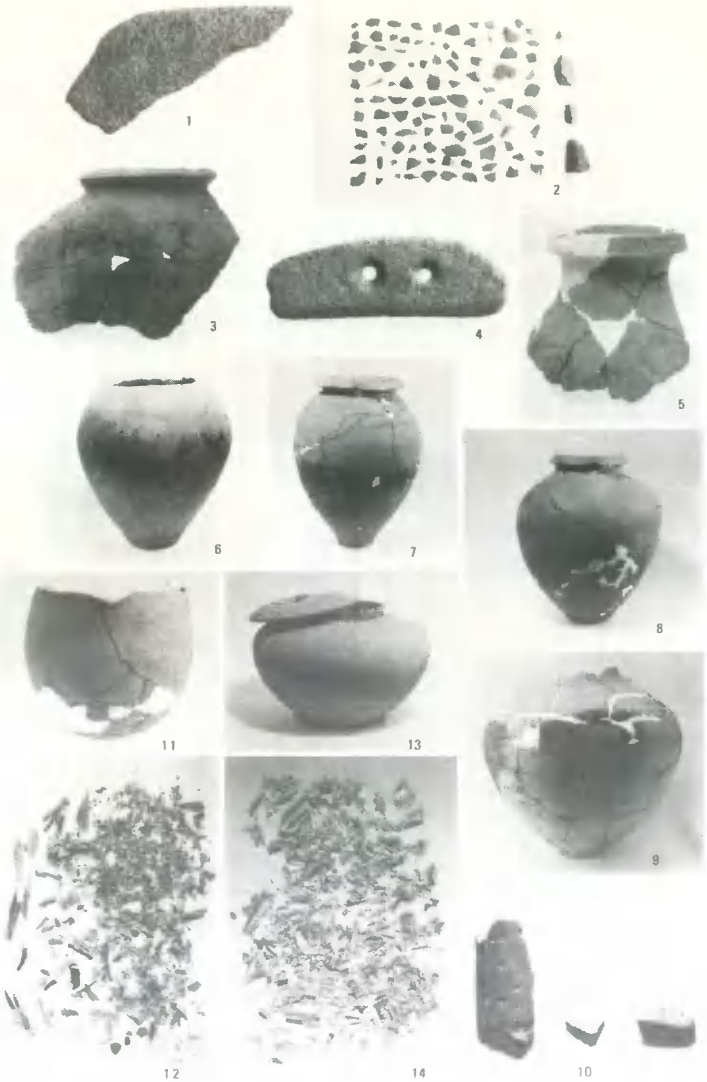
4.　3号墳　遺物出土状態（南南東から）

1. 骨壷出土状態（南から）

2. 骨壷石組状態（南から）

3. 方形台状墓付近の近世土壙（西から）

4. 方形台状墓南側の近世土壙（西から）



下道山遺跡出土遺物，２号住居址（１～２）・３号住居址（３～４）・Ｄ２区出土(5)
土器棺Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ（６～９）・方形台状墓２号（10）・骨壷と人骨(11～14)

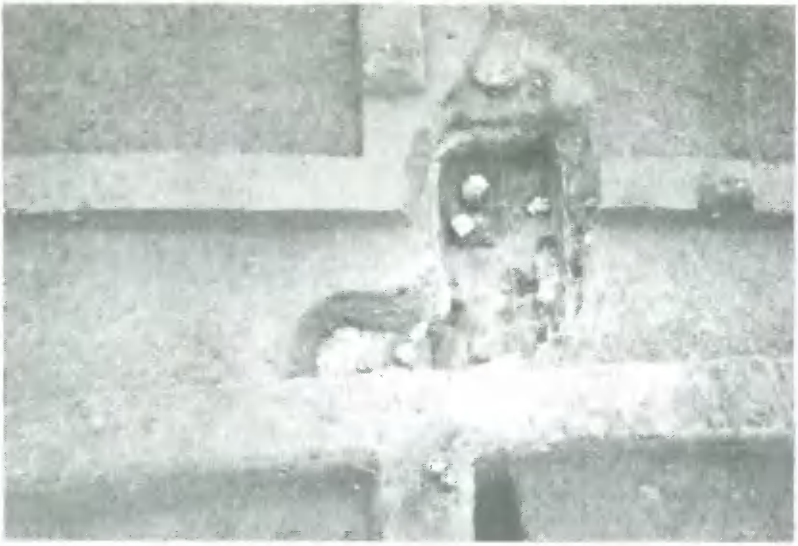
下道山遺跡出土遺物，1号墳（1～2）・2号墳（3～9）・土壙65（10～11）
C4区出土（12）

1. 下道山南古墳　　調査前外観（北東から）

2. 同　上　　（西から）

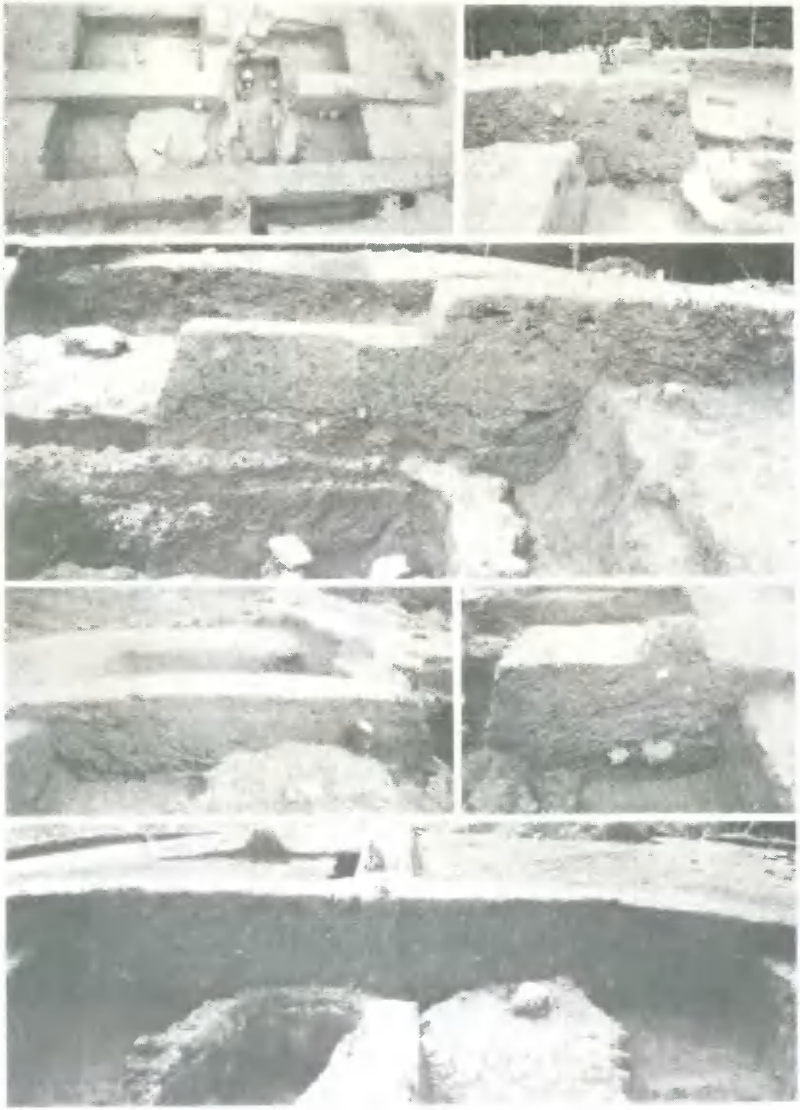
墳丘断面　上段：南西ー北東断面　中段：南東ー北西断面　下段：葺石最下段　(左)南東辺　(中)北東辺　(右)北西辺

葺石，左上・右上：北西辺，左中・右中上：北東辺，左下・右中下・右下：南東辺

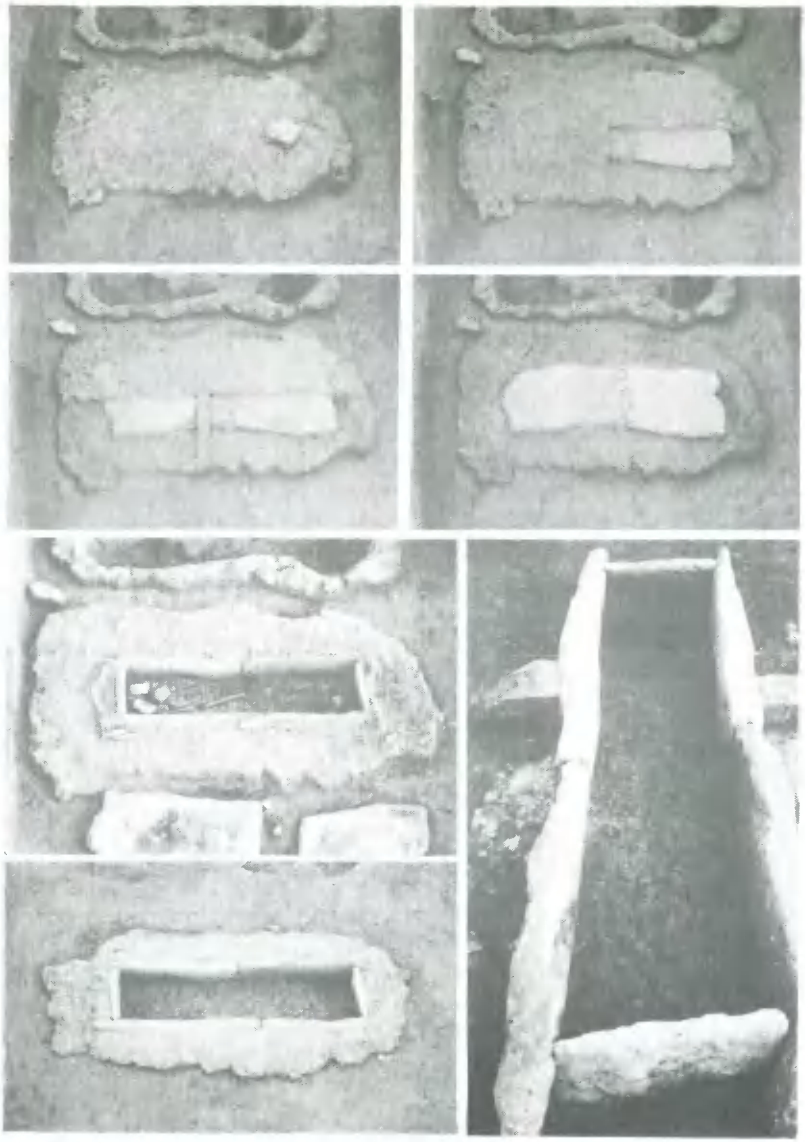


1. 下道山南古墳　　墓壙検出状況

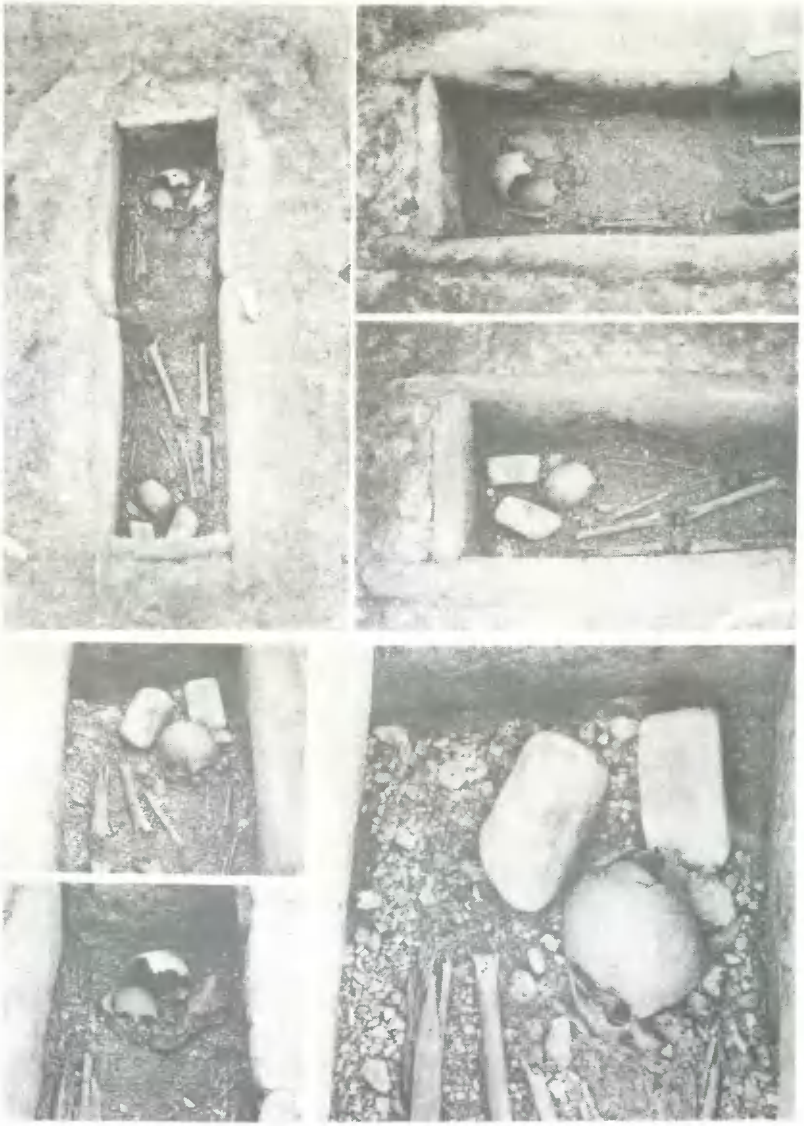
2. 下道山南古墳　　墓壙内掘り上げ終了後全景



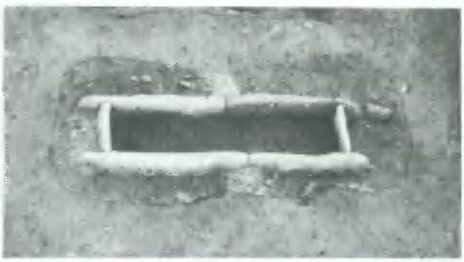
墓坑断面　上左：セクション位置　上右・中上：南西ー北東断面
中下：南東ー北西中央断面　下：南東ー北西南断面



第 2 主体　上：蓋石被覆粘土・蓋石，下左上：開棺直後，下左下・下右：棺取巻粘土・同断面



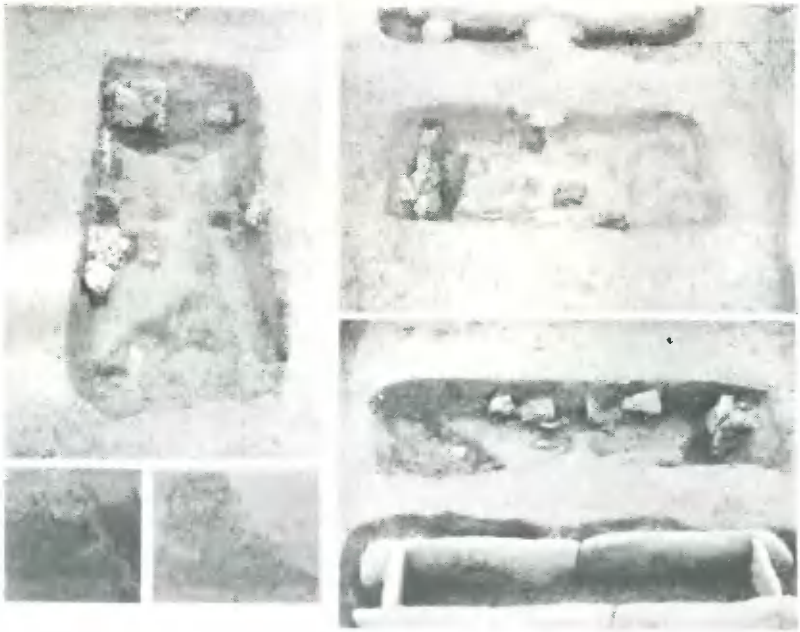
第2主体　人骨・紡錘車出土状態　上右上・下左下：第1号人骨　上右下・下左上：第2号人骨
下右：紡錘車と第2号人骨頭部



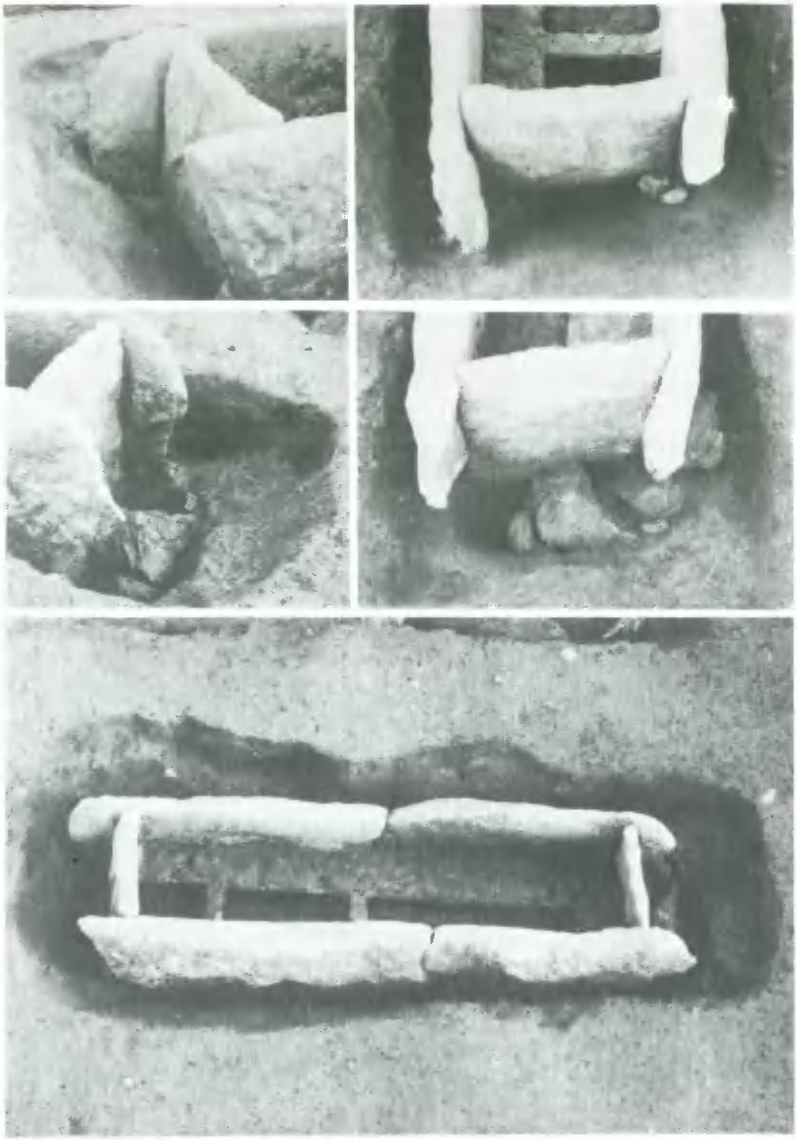
上：各主体墓拡検出状況

下：第 2 主体　下左下・下右上：墓拡内粘土充填状態　下右下：棺取巻粘土断面（木口）

各主体墓壙り上げ終了後全景



第1主体　左上：南西壁　右上：全景　右下：南東壁　左下：被覆粘土断面



第 2 主体箱形石棺，上：北東木口石加工状況，中：南西木口石加工状況・木口穴，下：全景

下道山南古墳出土遺物 1 ～ 3 ：紡錘車，4 ～ 14 ：埴輪，15 ～ 21 ：土器，22 ～ 25 ：石器(挿図番号)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(17)

下道山遺跡緊急発掘調査概報

1977年2月20日　印刷
1977年2月28日　発行

編　集　岡山県教育委員会文化課

発　行　岡山県教育委員会

岡山市内下山2—4—6